

ゆか



目次

コロナ禍と地域交流	笠原清志	3
ウィズコロナにおける地域交流活動の展開 —2021年度の跡見学園女子大学の対応から考える—	土居洋平	4
氷川下つゆくさ荘、跡見の学生に期待すること	清水 誠	8
大塚仲町町会と跡見学園女子大学の連携に期待すること、跡見生に期待すること。	紅林光正	10
跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて —TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) の1年間の活動を振り返って (活動報告) —	中村英昭	12
跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析	新垣夢乃	18
特 集 コロナ禍の活動 —経験の共有とコロナ後に残るもの—	跡見学園女子大学地域交流センター	22
「スミファ (すみだファクトリーめぐり)」活動への参加 —コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて—	許 伸江・一條結衣・熊谷綾花・宮崎陽菜・茂手木佑衣・梁島彩椰	23
コロナ禍における地域活動 三郷市行政不服審査会委員長・葛飾区男女平等推進審議会委員の活動から	鷹 咲子	26
コロナ禍における地域活動 —防災フェスタ中止に伴う啓発パンフレット作成を通して—	赤松瑞枝	29
「文京区エリアスタディ (社会調査実習)」にみるコロナ禍の影響	佐野美智子	31
2021年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告	土居洋平	34
2021年度 氷川下つゆくさ荘における跡見学園女子大学の活動について	土居洋平	36
我楽田工房との連携・協働プロジェクトについて	土居洋平	39
コロナ禍での遠隔地との連携事業の実施の可能性 —西川町お土産開発プロジェクトを事例に—	土居洋平	41
跡見「学芸員」in 菊坂のコロナ禍の活動について	新垣夢乃	44
コロナ禍での静岡県東伊豆町地域活性化事業における経験共有と今後	塩月亮子・土方あかり	47
コロナ禍だからできた「わたしの文京遺産」を発見する「まち歩き」ゼミ	河村英和	52
「跡見学園女子大学附属心理教育相談所 無料講習会」活動から コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて	松寄くみ子・阿部洋子・酒井佳永・野島一彦・宮岡佳子・宮崎圭子・鈴木真理・新井 雅・小栗貴弘・板東充彦・前場康介	54
「新座市就学支援委員会 委員」活動から コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて	松寄くみ子・宮崎圭子	56
コロナ禍における「跡見ひきこもり支援事業」の展開とその後	板東充彦	59
コロナ禍における「文京区ひきこもり等支援者連絡会」の展開とその後	板東充彦	61
文京アカデミーの子どもワークショップの実践 —コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて—	茂木一司・高橋 杏・竹丸草子・郡司明子	63
第2回「文の京書道展」開催報告	横田恭三	67
「ポストコロナの自転車にやさしい道路のつくり方」開催の報告	坪原紳二	72
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告 (2)	磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優理・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曾根南美・渡辺恵未・渡邊菜月	74
菊坂跡見塾文化財防火デー避難訓練報告	水村美穂・松延咲季・山岡沙織・渡邊菜月	84
メディアで紹介された旧伊勢屋質店 (菊坂跡見塾)	貴堂 直	88
最優秀賞を受賞して	三村侑綺	89
「ひと涼みアワード2021」オンライン啓発部門 最優秀賞 受賞コメント	石渡尚子	90
令和3年度の地域交流関連活動記録	貴堂 直	91
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程		103

【表紙】

- ・文京区：地域交流センター主催シンポジウムの学生スタッフと地域交流センタースタッフの集合写真 (右上)
- ・新座市：「遊びの広場」にボランティアとして参加した学生たち (右下)
- ・文京区：旧伊勢屋質店にて開催した一葉忌イベントの集合写真 (左)

コロナ禍と地域交流

学長 笠原清志

中国の武漢で、2019年の12月にコロナウイルスが蔓延し、その後、都市封鎖まで行われました。しかしその時ですら、これは遠い中国の一都市での出来事であり、私たち日本人の生活に、ましてや大学の対面授業が、一年以上も中止になるような事態に発展するとは夢にも思っていませんでした。

その後、ヨーロッパではコロナウイルスは急速に感染拡大をし、いくつかの国では都市封鎖まで行われる状況になってしまいました。我国でもコロナウイルスは猛威を振るい、政府は緊急事態宣言を発出するまでになりました。それに伴い大学でも入学式、オリエンテーションは中止になり、その後は対面授業の中止、オンライン授業での代替という状況が急速に進行しました。このような事態の進行は、大学教育の本質に関わる問題を引き起こしたと思っています。

教育の本質は、授業を通じての教師と学生との人格的交流、そしてそれを通じた教師と学生、学生同士のネットワークの形成が卒業後も続き、それが学生諸君の財産になっていくものです。しかしコロナ禍で授業がオンラインで代替され、クラブ、サークル活動までも停止されると、教育の本質的なものが揺らいでいくような怖さを感じます。

地域交流センターでは、このような状況の下でも、この一年間、様々な工夫をして活動をしてきました。今回の「地域交流センター年次報告書：ゆかり」第3号では、伊勢屋質店の資料調査、TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）への加入をへて、文京、新座キャンパスを軸にした地域交流活動が展開されていること等が報告されています。他方で、コロナ禍で本学と地方の観光、地域振興関係のインターンシップや協働事業はほとんど中止せざるを得なかったことも事実です。コロナの感染者数が9月以降、徐々に減少しつつありました。しかし2022年になりますと、第6波の到来で対面教育の実施、地域交流も再びその実施を巡って、議論をしなければならない状況になってきています。

コロナ問題については正しく恐れ、学生、教職員の健康には十分注意を払いながらも、学生生活、教育の現状を早期に正常化しなければなりません。その際には、地域社会に軸足を置いた地域交流センターの活動が回復し、地域社会になくてはならない大学となるべく戦略的に事業を展開していく必要があります。地域交流センターが、どのような状況の下でも、本学の教育・研究活動の中心の一つとして発展していくことを祈念しています

ウィズコロナにおける地域交流活動の展開

—2021年度の跡見学園女子大学の対応から考える—

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

2020年2月末頃から具体的に地域交流活動にも影響を与えるようになったコロナ禍は、今年度末で発生から2年が経過したことになる。2020年度の上半期は、その影響がどのようなものか、どのような対策が有効かも不透明なところも多く、また、ワクチン等も普及していないことから、地域交流活動の多くが延期や中止に追い込まれた。秋ごろになると、感染が一時的に収束期に入ったこともあり、また、感染症対策についてもノウハウが蓄積されていったことにより、少しずつ地域交流活動も再開していった。しかし、2020年末ごろからの感染の拡大に伴い、再び多くの活動が延期・中止等に追い込まれていった。

2021年度は、こうした感染の拡大と収束のサイクルについての経験も踏まえ、また、ワクチンの普及等もあいまって、コロナ禍のなかでの地域交流活動の展開した時期、すなわち、ウィズコロナにおける地域交流活動が模索されていった時期ともいえるだろう。

そこで、本稿においては、コロナ禍が具体的にどのような地域交流活動の展開に影響を与えており、また、それに対して今年度に本学がどのような対応を進め、また、ウィズコロナでの地域交流活動の展開という新たな局面を迎えた2021年度に、具体的にどのように対応を進めてきたのかについて概観したい。

2. コロナ禍が地域交流活動に与えた影響

まず、コロナ禍が地域交流活動にどのような影響を与えたかについて、本学の概況を押さえておきたい。これについては、コロナ禍直前の状況と昨年度の状況を比較するとわかりやすいだろう。当センターでまとめた年次報告書ゆかりで比較してみると、2019年度に学内の地域交流活動調査で報告されたのは83件の活動であった（跡見学園女子大学地域交流センター、2020）。一方で、2020年度の報告を確認すると13件であり、数だけで見ても8割以上の減少であることがわかる（跡見学園女子大学地域交流センター、2021）。ただし、2021年度については、この報告書に原稿を寄稿されているものだけでも約20件の活動があり、ある程度は復活をしてくれていることがわかる。

ただし、復活したものの中味をみると、文京キャンパスや新座キャンパス近隣を中心に首都圏で実施されているものが殆どであり、遠隔地での活動はごく一部を除いて再開されていない。また、再開されたものでも、遠隔地の場合はオンラインでの活動の比重が近隣以上に高く、実際に気軽に現地を訪れる活動ができる環境には至っていないことがわかる。また、遠隔地から来ることを前提にした活動も再開していない。具体的には、コロナ禍前には実施されていた地方から来る修学旅行生の東京案内

の対応等の活動などは、中止されたままになっている。それに加えて、近隣の活動でも、いわゆるマルシェや祭礼に伴うイベントなど、不特定多数の集客を前提にした活動の多くが中止されている。コロナ禍においては、キャンパス近隣での活動は再開しつつあるものの、広域移動・集客・観光に関わる地域交流活動の再開が困難になっているのである。

3. コロナ禍における跡見学園女子大学の対応

こうしたなかで、本学では2020年度秋の感染のいったんの収束に伴い、学生サポートセンター主導で「課外活動等再開にあたっての諸注意について」を作成・公表し、学生クラブ団体やゼミの課外活動の際の感染対策、注意事項を明示し、一定のルールのもとで活動が再開できるようにした。ただし、地域交流センターで募集した学生が有志で集まって活動しているものなど、上記の枠に収まらない課外活動もあり、また、感染状況に応じてできることの範囲を明示する必要があるといった意見もあり、その後もより包括的で感染状況に対応した形での指針の作成が検討されてきた。

包括な指針の作成については、特に地域交流活動において必要な場面が多かったこともあり、地域交流センターが中心となって原案の作成を行った。そして、各種会議体での検討を経て、2021年4月12日には「跡見学園女子大学 教室外の活動に関わる指針」が策定された。ここでは、正課・非正課問わず教室外で行われる活動一般について、どのような感染状況において、どのような手順で何ができるのか、また、そうした活動において感染対策として何が必要であるかが示された。具体的には、別に定められた0～4の5段階の授業形態レベル(感染状況に対応して授業の手法を定めたもの)に対応して、正課の教室外活動と非正課の教室外活動が、誰の判断でどのようにできるかを示したものであった。

このように、コロナ禍においてもルールを定めて感染状況に応じて実施可能なことを明示することで、実際にキャンパス近隣エリアでの地域交流活動も少しずつ再開していったのであるが、次第に運用において課題があることもわかってきた。それは、感染状況に応じた判断が、実際にはかなり難しいということである。授業についても地域活動についても今日レベルが変わったから明日から対応するということは困難であり、実際のレベル判断は1ヶ月程度、場合によってはさらに先の感染状況を見通したうえで判断を行い公表し、それに向けて準備をしたうえでレベルの切り替えが行われる。しかし、感染の拡大・収束の波は終わってみないとそのピークや底がどこであるのかが見えにくい。結果、例えば感染拡大を過大に評価してピークを実際より後ろに想定してしまい、結果として収束期に入った時点で授業形態レベルをより厳しい段階にしてしまうということもあった。また、その逆に感染拡大の初期にすぐに判断ができず、感染がかなり拡大しているのにも関わらず緩い基準のままでありつづけるということもあった。

2021年度も秋学期に入る頃には新型コロナウイルスの感染拡大防止対策についての知見も蓄積され、また、感染が拡大と収束を繰り返すことへの理解も深まってきた。そして、収束期においても感染者が増加している時期においても、感染防止対策として行うことは基本的には同一のことであることもわかってきた。そう考えると、感染者が爆発的に増加している等の、これまでの感染拡大——収束のサイクルとは明らかに異なる状況ではない限り、細かいレベル分けなどを行わず、教室外の活動は学内の各部局の判断でできることが望ましい。そうした見解に基づき、2021年10月21日に指針の改定を行い、

授業形態レベル0～4の5段階のうちレベル1～3においては教室外の活動についての制限に差を設けず、担当する部局の判断で実施をできるという形にした。授業形態レベル0は完全に収束してコロナ禍前の状態に戻ったことが想定され、レベル4は感染者が極めて高い水準で推移し授業もオンラインのみの実施になるという段階が想定されている。これ以外に、授業形態は感染状況に応じて1～3のレベルが設定され対面・オンラインの割合が細かく設定されているが、教室外活動については活動の制限に差を設けることなく、ある程度先の活動の企画もしやすい形に変えたのである。

本学では、11月2日から授業形態レベルが1に設定され、対面授業の割合も増加したこともあり、秋から年末にかけては地域交流活動もしやすい状況が続いた。筆者自身に関わる活動でも、この秋の期間には、対面で実施される活動も複数復活をしてくれている。また、学内を会場に100人程度を集客するイベントも実施の見通しがつき、本報告書でも紹介しているように、11月14日には「文の京ゆかりの文化人懸賞事業 朗読コンテスト」（主催：文京区、主管：跡見学園女子大学、協力：一般財団法人NHK放送研修センター日本語センター）の本選も、文京キャンパスプロッサムホールにて実施することができた。また、12月25日には、本学地域交流センター主催（協力：拓殖大学・東洋大学・文京学院大学、後援：文京区社会福祉協議会）のシンポジウム「コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性」も実施している。

同じ時期、学内でも2022年の春休みの時期を念頭に遠方に行く事業の企画や集客のイベント等もされはじめたが、これを執筆している2022年1月初旬現在、オミクロン株の感染拡大が続いており、そうした事業の実施が危ぶまれている。教室外の活動の制限は、上記の指針の改定に伴い部局の判断があれば実施が可能であることに変わりはないが、これまでとは異なる次元での感染拡大状況を踏まえ、遠方に行く事業や集客事業の企画が憚られる雰囲気になっている。一方で、これまでの感染対策の蓄積も踏まえ、人数を絞った形や更なる感染対策の強化をしながらの企画実施も模索されている。このあたりは現在進行形のことであり本報告書に概況をまとめることはできないが、よほどのことがない限り何らかの形で地域交流活動も継続して行おうということは、活動に携わる教員・学生・地域住民等の関係者の間では共有されつつある。2022年1月現在、コロナ禍の感染状況は再び厳しい状況に突入しつつあるが、これまで同様、感染は永遠に拡大するということはありません、いずれ収束するはずである。本学地域交流センターでは、こうした状況においても、これまでのコロナ禍での活動ノウハウの共有を進め、ウィズコロナにおける地域交流活動の展開を支えていきたいと考えている。

4. ウィズコロナにおける地域交流活動の展開に向けて

最後に、現時点にてコロナ禍での地域交流活動としてどのような工夫がされているのか、ごく簡単に以下にまとめておきたい（なお、詳細は本報告書の各活動報告に記載されているので、適宜参照されたい）。

まず、この2年で地域交流活動に限らず、大学のみならず社会全体においてオンラインの活用が急速に普及した。もちろん、地域交流活動においても日常的な打ち合わせからオンラインイベントの実施等で、幅広く活用されている。当初は、高齢者も多く参加する会合等ではオンライン会議の実施が難しいこともあったが、次第に世代に関わらずオンライン会議のノウハウが普及していったこともあり、現

在では、サポートが必要な少人数のメンバーが地域の居場所等に来るといった工夫も行われ、対面とオンラインのハイブリッド形式で様々な会合が日常的に行われている。

地域のイベントも、少人数の対面参加者と多数のオンライン参加者のハイブリッド形式で数多く行われるようになっていく。また、ハイブリッド形式で行われるようになった結果、気軽に遠方の参加者に声がけをしやすくなるという効果もあるようだ。都市農村交流イベントなどは、ハイブリッド形式が一般化したことで、かえってやりやすくなった面もあるようである。

また、感染は永遠に拡大していくというわけではなく、拡大／収束という周期があることも、この2年の間に社会全体に理解が深まっている。これを受けて、感染拡大期には一つの場所に集まるのは少人数でオンラインを最大限駆使して活動を継続し、感染収束期には、感染拡大対策もしっかり行うことを前提に一定の人数が集まって行うイベント等も実施していくという形が定着しつつある。これにより、コロナ禍当初に存在していた「全ての活動が終わりの見えない形で延期され続けてしまうのではないか」という絶望感は、かなり払拭されたように思われる。

今後は、コロナ禍で特に活動が停滞してきた広域移動・集客・観光に関わる地域交流活動についても、これまでに得た知見を活かしながら、再開に向けた支援をしていきたいと考える。

参考文献

- ・跡見学園女子大学地域交流センター、2020、『地域交流センター年次報告書 ゆかり』第1号、跡見学園女子大学地域交流センター
- ・跡見学園女子大学地域交流センター、2021、『地域交流センター年次報告書 ゆかり』第2号、跡見学園女子大学地域交流センター

特別寄稿

氷川下つゆくさ荘、跡見の学生に期待すること

文京区氷川下町会 会長 清水 誠

氷川下つゆくさ荘は、介護用品店が2018年3月で閉店し、閉店後に「地域の居場所」として活用できないかと文京区社会福祉協議会さんより話をいただきました。

地域にお住いの赤ちゃんからお年寄りまで、気軽に立ち寄る事ができ、地域の人たちの情報交換、見守り、助け合い、学び、趣味を通じてのふれあいの場、まちづくりの場として人々の優しさや温かさを感じることでできる居場所となることを目指して、千石3丁目空き店舗活用プロジェクト（案）が発足しました。

2018年3月には第1回準備会を設立し、町会、地域団体、行政などの参加者で、千石3丁目プロジェクト委員会の立ち上げとなりました。

第2回準備会で準備会の名称を実行委員会に変更し、実行委員会メンバーは近隣3町会、株式会社イーザイ、大原地域活動センター、大塚地域活動センター、高齢者あんしん相談センター、東京保健生活協同組合、文京区社会福祉協議会他、28名の方々に参加して頂きました。

2018年、第1回実行委員会の中で議論になったことは、建物の耐震性の問題点でした。そこで、色々な人が集まる場所だからこそ、安全、安心に集まれる建物であるか耐震診断調査するという事になりました。

それをうけて耐震性能に付いて、第1回改修WGを発足し、耐震診断の確認、事業、改修スケジュール案の検討に入りました。

そして内装解体後に分かった事は、土台の他道路側2階の雨漏れによる柱、及び床の劣化が激しく、いつ床が抜けてもおかしくない状態であることでした。第4回改修WGでは、耐震補強工事について、どのように財源を確保するかが大きな問題になりましたが、耐震補強工事の不足分についてはイーザイさんに相談し、イーザイさんより耐震補強工事の不足分の投資が決まりました。そして千石3丁目空き店舗活用プロジェクトから、名称変更の検討が行われ、氷川下町会から氷川下、建物の外壁塗装がつゆくさ色、建物の名称が平和荘であることから、「氷川下つゆくさ荘」という名称に決まりました。それと時期を同じくして耐震補強工事も無事に完了し、内覧会を開催する事が出来ました。

そこで、オープニングセレモニーに向けて準備を進めておりましたが、コロナ禍のため8月に関係者に限定したオープニングセレモニーを執り行いました。第1回準備委員会から此処まで2年5ヶ月の時間を要しました。ただコロナ禍の中での利用については、三密を避けての使用など、本来の目的である地域の居場所やまちづくりの場としての活用は制限されていました。さらに、2021年3月には氷川下つゆくさ荘の上階において漏電による火災が発生しました。その後、修繕工事が終わり、7月にはお祓いを行いこれからの氷川下つゆくさ荘の安全とコロナの終息をお願いしました。

氷川下つゆくさ荘は、町会もまちづくりの場所として活用しており、若い皆様にも町会活動などをご理解いただく場所となっております。

氷川下という町名は1966（昭和41）年4月に大塚、1967（昭和42）年1月に千石になり、氷川下と

いう町名は地図上では消滅しましたが、現在まで氷川下町会という名前は残り、千石2丁目の一部、千石3丁目の一部、小石川5丁目の一部、大塚3丁目の一部、大塚4丁目の一部を町域としています。この氷川下町会の立地は、文京区の各種管轄では複雑で、町会は大原地域活動センター、富坂警察署の管轄となっていますが、校区としては大塚小学校、文京区立第一中学校となっており、これらの学校は大塚地域活動センター、大塚警察署の管轄地域となっています。そのため、町会の若い方々が学校のPTA役員として防災訓練やその他の地域活動に参加すると大塚地域活動センターや大塚警察署とのつながりとなり、町会との関わりが消えてしまいます。

そのため、町会内にある氷川下つゆくさ荘を活動拠点とすることで、地域の垣根を超え、若い世代の方々に町会活動の案内をすることができるのではないかと考えています。例えば子ども達にちびっ子縁日、ちびっ子八百屋さん、ハロウィン、防災訓練、春と秋の全国交通安全運動、年末の火の用心の見回り、お祭り、バスによる日帰り旅行など、色々な事業の報告・案内を行いたいと考えています。ここ2年間はコロナ禍で、町会活動はほぼ中止になりましたが、一つだけ子ども達と楽しい時間を過ごせるハロウィンをコロナ禍でも3年間連続して開催する事が出来ました。これは、氷川下つゆくさ荘で跡見学園女子大学の学生さんとお知り合いになり、皆さんのお手伝いがあったおかげで、楽しい時間を過ごすことができました。心から感謝しています。

これからの氷川下つゆくさ荘については、オープンデーなどに、跡見学園女子大学の学生さんと一緒に参加し、おしゃべりしたり、年寄りが苦手なスマホの使い方レクチャーなど、色々な企画をお願い出来たら幸いです。お願いばかりですいません、年寄り体力と知力が低下し、口は達者になります。

コロナに打ち勝ち地域交流の場としてさらに発展してゆく為に、若い皆様のお力を借りし、楽しい居場所を作るためにこれからよろしくお願い致します。



写真1：2021年のハロウィンの様子



写真2：ハロウィン運営スタッフ打ち合わせの様子（跡見学園女子大学の学生も運営スタッフとして参加）



写真3：氷川下町会会員と跡見学園女子大学生がともに活動している様子

特別寄稿

大塚仲町町会と跡見学園女子大学の連携に期待すること、 跡見生に期待すること。

大塚仲町町会広報部長 紅林光正

このたび、「大塚仲町町会と跡見学園女子大学の連携プロジェクト」を実施することとなりました。このような機会を頂き厚く御礼申し上げます。実現の労をお取り頂いた新垣先生、また、実際にプロジェクトをゼミで扱う決断を下さった佐野先生に心よりお礼を申し上げます。

1. 連携までの経緯

大塚仲町町会（以下「仲町町会」）の故宮本会長から、跡見学園女子大学（以下「跡見女子大」）コミュニティデザイン学科の皆さんが町会のイベントに協力して頂けるようにと伺いました。当初は、お祭、スイカ割りなどにお手伝い頂けるとは何とありがたいお話ではないかと思っていました。しかし、「コミュニティの課題解決」を学ぶ学生であれば、仲町町会の抱える諸課題の解決に力をかけて頂けるかもしれない。また、学生の皆さんにとっては、実存する「町会」を対象に実践学習ができればその学びは大きいのではとも考え、相互協力の可能性についてご担当の新垣先生に相談しました。複数の先生からありがたいご協力のお申し出を頂きましたが、町会役員（以下「役員」）と相談した結果、佐野先生のご担当が仲町町会の期待内容と合致しているのではと判断し、ご協力をお願いすることになりました。

2. 仲町町会について

仲町町会は、昭和初期に地域の親睦団体として生まれました。戦争でやむなく中断されましたが、復興を願う地域の人々により昭和30年（1955年）に再興され今に至っています。設立以来、会員相互の親睦をはかり、住みやすい街づくりを目指してきました。

しかし、都電がバスに代わり人通りも少なくなり、賑わっていた大塚三丁目周辺の商店街もほとんどなくなってきました。大通りには集合住宅が立ち並び、街の様相は大きく変わりました。

街がにぎやかだったころ、人びとはお互いに挨拶しあい、日々の中に近所づきあいがありました。住みよい街づくりのために公共事業への協力も行い、お祭り、盆踊り、映画会、写真会など地域住民が楽しむイベントも多彩で、子どもたちにも町会はとても身近な存在でした。今でも子供の頃に参加した町会旅行などを懐かしく話す会員もいます。町会に協力し町会のために会費を収めることに疑問を持つ人も少なかったと思います。しかし、時が経つにつれ、住民のニーズに沿った新しい活動が徐々にできにくくなり、町会は単に「お祭りや旅行のみを行う組織」という印象を持たれるようになりました。何のために町会があるのかが見えにくくなってきたようです。役員が高齢化し新しいメンバーも増えないた

め世代交代も円滑にすすんでいません。このままでは町会の存続にかかわりかねないと心配する声もでてきました。

3. 跡見女子大との連携に期待すること

この状況を改善するには、何をどのようにしていけばよいのか、内部にいる役員のみで解決していくには限界があります。コミュニティデザインの豊富な知識・経験をお持ちの佐野先生と活力ある学生の皆さんの力をお借りして、これからの町会のありかた、事業の方向、役員に期待することなどを分かりやすく導き出して頂けることを望んでいます。

また、このプロジェクトにかかわった人々は、安心して住みやすい街にするためには何が必要かをあらためて考える機会になります。課題を共有することができれば推進力になり、町会活動への協力者も増えてくるのではと期待しています。さらに、役員がこの経験から問題解決のノウハウを学べることは貴重です。将来、自分たちで様々な課題解決に取り組むことができれば、すばらしいですね。

なお、地域コミュニティの改善は、短期で効果が期待できるものばかりではないでしょう。「仲町町会はいいいね」と住民のみなさんに感じてもらえるまで、佐野先生にはこのプロジェクトを見守って頂ければありがたいです。

4. 学生の皆さんに期待すること

このプロジェクトは貴重な体験学習になるでしょう。ご自身の学びを深めるため、また、仲町町会のために、積極的に取り組んで下さい。遠慮は無用。皆さんの真剣さは街の人々の心を動かしします。協力者が増えればプロジェクトはさらにうまくいくと思います。そのためには、是非、町会のイベント運営に参加して下さい。歓迎します。特に来年の秋のお祭りは、吹上神社四百年記念祭として盛大に行われる予定です。一緒に神輿を担いで思い切り楽しみましょう。役員と一緒に準備から運営に携われば、「百聞は一見にしかず」。調査では得られない貴重な情報に気づかれるでしょう。また、ふれあいを重ねることで相互信頼が深まり本音も話し合えるようになると思います。この体験を五感で感じて頂き、改善案に活かして下さい。

このプロジェクトが地域住民のためになる「町会事業」を生み、運営面で学生の皆さんのご協力を頂きながら地元に根付く事業に育てていければいいなとも思っています。是非、プロジェクトの意義、ご経験を後輩に引き継いで下さい。跡見女子大と仲町町会との連携を深めながら未来につなげることができれば、このプロジェクトの成果は双方にとって意義あるものになるのではと思います。

佐野先生のゼミがスタートするのは2022年4月からと伺っています。どのようなプロジェクトになるのか、今からとても楽しみです。よろしくお願い致します。

以上

跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて

—TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) の1年間の活動を振り返って (活動報告) —

地域交流課 中村英昭

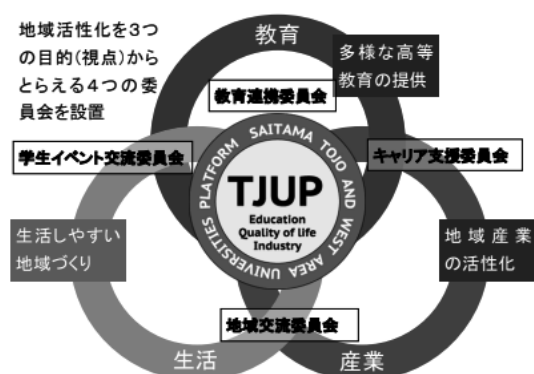
TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) に一昨年12月に本学が加入し、はや1年が過ぎました。その活動について、ご報告いたします。

1. TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) とは？

TJUPは、その名のとおり、埼玉県東武東上線沿線および西武池袋線沿線の地域の大学・短期大学・自治体および企業が連携して協働事業を展開していくプラットフォーム（共通の土台）です（図 TJUP 概要のイメージ 参照）。現在、19の自治体会員、20の大学・短期大学が加盟しているほか、地域の企業等が事業者等会員として参加しています。また、TJUPでは、「地元で生まれ、地元で育ち、地元で生きていく若い世代への支援」というビジョンのもと、「多様な高等教育」「生活しやすい地域づくり」「地域産業の活性化」を目指した活動が展開されています。なお、新座キャンパスのある新座市も、本学と同じ令和2（2020）年度に加盟しています。

跡見学園女子大学は、これまで文京キャンパスの所在する文京区、新座キャンパスの所在する新座市とは個別に包括協力協定を締結し、地域貢献を展開してきました。また「彩の国 大学コンソーシアム」に参加し、埼玉県内の各大学と連携。単位互換、公開講座の実施、共通教職員研修会の実施などの取り組みを推進してきました。今回、単独の自治体に留まらず埼玉東上地域全体の活性化に取り組む形や、大学・短期大学・自治体・企業が幅広く連携しながら地域の活性化に取り組むスタイルが、より効果的な地域貢献につながると考え、また、私立大学等改革総合支援事業「統合版」（タイプ3プラットフォーム型）の補助金獲得を目指し、TJUPに加入をいたしました。

現在、TJUPでは、1) 教育連携、2) 地域交流、3) 学生イベント交流、4) キャリア支援の4分野で



TJUP 概要のイメージ



TJUPのWEBサイト

の取り組みを中心に活動が展開しています（それぞれの活動内容は、TJUP ホームページ内に各取り組みのページがありますので、そちらをご参照ください）。TJUP 内に、それぞれに対応する委員会があり、会員校はいずれかの委員会に加入するという形をとっているのですが、跡見学園女子大学は、1) 教育連携に関わる委員会に参加しています。また、2) ～4) の活動についても事業に協力し、その内容を検討するワーキンググループに関連部署の職員が参加しています。さらに、昨年10月より、本学がHPグループの中のSNS検討ワーキンググループの責任校となり、活動の幅を広げています。

○TJUPの参加大学

参加大学は、東武東上線、西武線沿線を中心とした大学・短期大学19校、オブザーバーとして埼玉県立大学の計20大学・短期大学が会員校となっています。

- | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------------|
| ○跡見学園女子大学 | ○埼玉女子短期大学 | ○十文字学園女子大学 | ○城西大学 |
| ○城西短期大学 | ○女子栄養大学 | ○駿河台大学 | ○西武文理大学 |
| ○大東文化大学 | ○東京家政大学 | ○東京電機大学 | ○東邦音楽大学 |
| ○日本医療科学大学 | ○日本工業大学 | ○文京学院大学 | ○武蔵丘短期大学 |
| ○明海大学 | ○山村学園短期大学 | ○立正大学 | ○埼玉県立大学(オブザーバー) |

○TJUPの地域について

基本的に、参加大学の近くの市町村を対象としています。

特定地域 (50音順)

特定地域	2020.9より追加した特定地域
★入間市	★小川町
★越生町	★川島町
★熊谷市	★ときがわ町
★坂戸市	★新座市
★狭山市	★ふじみ野市
★鶴ヶ崎市	★嵐山町
★滑川町	川越市
★鳩山町	所沢市
★飯能市	宮代町
★東松山市	寄居町
★日高市	
★毛呂山町	
★吉見町	

★：自治体会員 (2021.10現在)



○TJUPの産業界について

企業との新商品の共同開発・共同研究を推進していく他に、農林業・食料産業を含めた新たな産業の開拓、特にsociety5.0に関連し他地域との連携の中で参加校の卒業生が地域で活躍できる新しい産業イノベーションに取り組んでいきます。また、地域企業への就職斡旋や地域キャリア教育を大学連携の中に取り組み、地域で活躍する若い世代を支援することで、地域産業の活性化を推進し、地域雇用

の拡大と地元定着率の向上を図ります。2021年10月現在、様々な業界の10団体と包括協定を結んでいます。今後も地域の企業等とプラットフォームは順次協定を締結していきます。

〈事業者会員〉2021.10現在

株式会社アーベルソフト

伊田テクノス株式会社

埼玉福興株式会社

飯能信用金庫

一般財団法人 リモート・センシング技術センター

イオンタウン株式会社

埼玉産業人クラブ・TDU産学交流会

株式会社セキ薬品

株式会社ベルク

株式会社JTB 川越支店

2. 跡見学園女子大学の地域交流課のTJUPの活動について

2020年12月に本学がTJUPに加入し、今日まで地域交流課が活動してきた具体的な活動内容を以下に記します。

① 2020年12月から2021年3月まで

○主に具体的に活動するにあたっての学内の組織体の立ち上げなど、活動するための学内の体制作りを中心に活動していきました。

学内活動：学内での各部署への担当の振り分け

- ：活動のための学内規程（跡見学園女子大学TJUP事業推進委員会規程）の制定
- ：学長の施政方針にTJUPの活動目標の掲載
- ：総合改革支援事業の補助金対応の検討について

学外活動：各月の運営協議会へ参加。

- ：1月初頭に各委員会が割り振られる。
- ：TJUP共同IR責任者グループの学内の調査及び集計を本学のIR・大学資料室が実施し、担当校へ報告。

② 2021年4月から2021年6月まで

○本学の4月1日付人事異動による、地域交流課の課員メンバーの交代のため、TJUPの活動に関しては人的（担当者にとっての）準備期間となりました。

○4月は引き続き学内を中心に活動。特に重要な学内活動として、TJUP事業推進委員会を開催。5月・6月はTJUPの活動を具体的に理解するために、様々なTJUPのオンライン会議に参加。また、他大学のTJUP活動のスタッフとして参加し、TJUPの活動の見識を深めていきました。

学内活動：4月に事業推進委員会の開催。学内、学外でのTJUP活動の確認。

- ：各TJUP活動の本学の参加状況把握。活動把握。

学外活動：各月の運営協議会へ参加。5月の全体会に参加。

- ：TJUP教育推進委員会の会議に参加。
- ：TJUP加盟校主催の公開講座にスタッフとして参加。

③ 2021年7月から2021年10月まで

○積極的に活動〈活動期間 具体的な活動は活動一覧表参照〉

学内活動：7月にTJUP事業推進委員会の開催。

：9月には、会員校4校（跡見学園女子大学、城西大学、城西短期大学、日本医療科学大学）によるTJUP共催のリレー公開講座を新座キャンパスよりオンライン配信で実施。

【TJUP 4校共同公開講座「新型コロナウイルス危機を生きる～正しい知識と対応～」(「ポストコロナの自転車にやさしい道路のつくり方」跡見学園女子大学編) 講師：本学観光コミュニティ学部 コミュニティデザイン学科 坪原紳二 教授】

学外活動：各月の運営協議会へ参加

：他の委員会の活動の進捗状況を確認しつつ、総合改革支援事業にからめて活動を加速させる。

④ 2021年10月から2021年12月まで

○活動のまとめ、来年度活動準備

学内活動：10月に事業推進委員会を開催し、私立大学等改革総合支援事業「統合版」(タイプ3プラットフォーム型)の状況を報告。

学外活動：各月の運営協議会へ参加。10月開催の全体会に参加。

：TJUP主催事業にスタッフとして参加。

4月以降、TJUPの活動一覧表

日付	活動内容	参加者(敬称略)
4月19日	第10回 教育推進委員会 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、福島・米田(教務課)
4月23日	第20回 運営協議会(オンライン会議)	中村(地域交流課)
4月27日	第6回 TJUP 共同IR責任者会議	新田見(IR・大学資料室)
4月28日	令和3年度 第1回 事業推進協議会(跡見学園女子大学内)【オンライン会議】	学内メンバー参加* (主に大学執行部メンバー、事務連絡会メンバー、地域交流センター・地域交流課教職員)
4月30日	十文字学園 訪問	中村(地域交流課)
5月28日	第4回 全大会(オンライン会議)	笠原学長、中村・新垣(地域交流課)、新田見(IR・大学資料室)、小野・吉川(庶務課)、夏目(会計課)
5月28日	第21回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)、新田見(IR・大学資料室)
6月4日	第4回業界セミナー「オンライン合同企業説明会」運営スタッフとして参加	鈴木(就職課)【スタッフとして参加】
6月12日	リレー公開講座(東邦音楽大学) 運営スタッフ参加	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
6月19日	リレー公開講座(駿河台大学) 運営スタッフ参加	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
6月24日	第11回 教育推進委員会 会議(オンライン議)	中村(地域交流課)、福島・米田(教務課)
6月25日	第22回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
6月26日	リレー公開講座(東京家政大学) 運営スタッフ参加	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
7月3日	埼玉で学ぼう! 埼玉県内大学・短期大学 合同オンライン入試説明会@ZOOM(オンライン)	木川(入試課)【スタッフとして参加】

7月9日	L'eTs みんなでディスカッション	今村(就職課)【スタッフとして参加】
7月16日	科目研究ワークショップ(TJUP教育連携委員会主催)(オンライン)	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
7月16日	令和3年度 教育連携懇談会について(TJUP教育連携委員会主催)(オンライン)	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
7月30日	第23回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
8月26日	主催共同FD・SD「チームビルディングの理論を学ぶ(入門編)」(オンライン)	夏目(会計課)
8月27日	第24回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
8月28日	地域交流委員会オンライン公開講座『SDGsを知ろう!!』(オンライン)	菊地(図書館)
9月6日	広報委員会 HPグループ会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、笹井(庶務課)
9月16日	教育推進委員会 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、福島(教務課)
9月24日	第25回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
9月26日	4校共同公開講座(跡見学園女子大学)(オンライン)	中村・新垣(地域交流課)、久保田、新田見(IR・大学資料室)【スタッフとして参加】
9月27日	教育連携委員会 共同FD・SD(オンライン)	中村(地域交流課)、福島・米田(教務課)
10月1日	第7回 TJUP 共同IR責任者会議	新田見(IR・大学資料室)
10月16日	子どもスポーツ体験教室(東京家政大学) 運営スタッフ参加	新田見(IR・大学資料室)【スタッフとして参加】
10月20日	事業推進協議会(跡見学園女子大学)(オンライン会議)	学内メンバー参加* (主に大学執行部メンバー、事務連絡会メンバー、地域交流センター・地域交流課教職員)
10月20日	第1回 SNSワーキンググループ 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、笹井(庶務課)
10月22日	第5回 全大会(オンライン会議)	笠原学長、中村・新垣(地域交流課)、新田見(IR・大学資料室)、吉川(庶務課)
10月22日	第26回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
10月28日	TJUP共催 城西大学公開講座(運営スタッフとして参加)	中村(地域交流課)【スタッフとして参加】
11月10日	第2回 SNSワーキンググループ 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、笹井(庶務課)
11月15日	第18回 教育連携委員会 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、福島・米田(教務課)
11月24日	第3回 SNSワーキンググループ 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、笹井(庶務課)
11月26日	ブランドデザイン研究会(オンライン)	中村(地域交流課)
11月26日	第27回 運営協議会(オンライン会議)	中村・新垣(地域交流課)
12月10日	広報委員会 HPグループ会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、笹井(庶務課)
12月16日	第19回 教育連携委員会 会議(オンライン会議)	中村(地域交流課)、福島(教務課)
12月17日	第28回 運営協議会(オンライン会議)	中村(地域交流課)、小野(庶務課)
12月23日	TJUP 活動紹介(オンライン)	曾田副学長、土居センター長、中村・新垣(地域交流課)、渡部(国際交流課)
12月27日	TJUP 和光市への自治体、加入勧誘活動	土居センター長、中村(地域交流課)

3. 今後の展開について

昨年度は、TJUP 加入したばかりで、4 月当初からすぐに活動という体制は整っていなかったが、来年度は、4 月からより積極的に活動していきたいと思っています。その中で地域交流課の役割としては、既に地域との関わりを持ちながら教育活動を展開されている先生方、または、これから展開していこうという先生方に TJUP を紹介し、先生方と TJUP の活動の橋渡しを行っていただければと考えています。そして、更に本学周辺の自治体や TJUP 加入自治体の悩みとその悩みを解決できるアイデアを持っているかもしれない本学の教育機関としての英知を、その二つを結びつけていく活動をしていきたいと思っています。また、本学の教育活動で活動の場を探している先生方と、その活動の場を提供していただける自治体・企業とをつなげる橋渡しの役割、コーディネーター的な役割を地域交流課は担っていければとも考えています。【地域・活動する本学の学生・先生方、そして跡見学園女子大学自身みんなが元気になる】、そんな活動のお手伝いを地域交流課として、行っていただければと考えております。

また、今後、和光市を含め、TJUP に加入する自治体が増えるという情報もあります。地域交流課は、TJUP の活動に学内・学外にアンテナを張り、有効により活発に活動が行われるようにサポートしていきたいと思っています。

2022 年 2 月 17 日付で、文部科学省「令和 3 年度私立大学等改革総合支援事業」（タイプ 3・プラットフォーム型）に本学の取り組みが選定されました。

TJUP を通して跡見学園女子大学の地域活動の成果のひとつが実った結果となりました。

以 上

跡見学園女子大学の地域交流活動への 新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析

新垣夢乃

1. 本稿の目的

地域交流センターでは、2019年度から跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について継続的に調査を行ってきた。2020年度の調査報告である「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について―特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して―」においては、跡見学園女子大学で実施または実施が計画されていた約89%の地域交流活動が新型コロナウイルス感染症流行によりなんらかの影響を受けていることを示した〔新垣 2021：58〕。その一方で、活動再開の兆しが見えつつある活動、SNSでの成果報告やオンライン化などにより地域交流活動を止めまいとする努力が各現場では行われていることに希望を見出す形で2020年度の調査報告は締めくくられている〔新垣 2021：58〕。

しかし、実際にはその後の2021年には2020年とは比較にならないほど多くの感染者が発生した第3波（2021年1月にピークを迎えた波）、第4波（2021年5月ピークを迎えた波）、第5波（2021年8月にピークを迎えた波）が発生し新型コロナウイルス感染症流行は収束することなく続いた〔東京都 2021〕（本稿を編集する2022年2月2日時点では、1日の感染者が94,914人となり、これまでの波とは桁違いの感染者が出ている状況となっている）。

また、2020年度の調査は2020年7月から8月の期間に実施されたもので、今から振り返ると、そこで明らかになった地域交流活動はその後、さらなる新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けたことが想像される。そのため、2020年度の調査時点よりも、2021年度の方が地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響がより強く現れてくることが想像される。

そのような経緯から、昨年度と同じく新型コロナウイルス感染症流行の影響が跡見学園女子大学の地域交流活動にどのような影響を与えているのかを改めて問い直す必要性が生じている。そこで、本稿では、2021年度の跡見学園女子大学においてどのような地域交流活動が実施または実施が計画されていたのかを明らかにしていく。さらに、もうひとつの目的として、2020年度に引き続き新型コロナウイルス感染症流行の影響が地域交流活動にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを設定する。

2. 調査の集計と結果

今回の調査は、Atomi Information Portalの掲示登録を使用し、掲示登録上で職種が「常勤」となっている跡見学園女子大学全学部に所属する104名の教員を対象に、2021年5月26日～7月1日の期間で「学内の地域交流関連活動に関わる調査」という名称で実施した。回答者は28名（約27%）であった。

今回の調査によって、回答を得られた地域交流活動の件数は33件であり、下記のような活動が実施、または実施計画があることがわかった。

表1：地域交流活動一覧

	活動名称	活動概要	活動時期	活動区分
文京・東京	1 スミファ(すみだファクトリーめぐり)(墨田区)	イベントへのスタッフ参加	11月	正課活動
	2 葛飾区男女平等推進審議会委員(葛飾区)	学識経験者としての助言	通年	教員活動
	3 我楽田工房との連携・協働プロジェクト	インターンシップの実施	6-3月	正課活動
	4 野菜に関する食育情報の発信	野菜摂取の関心を深める情報発信	通年	正課活動
	5 熱中症啓発プロジェクト	熱中症啓発活動	通年	正課活動
	6 食育プロジェクト	食育イベントや共食会の実施	秋学期	正課活動
	7 文京区防災フェスタへの出展	防災啓発活動	12月	正課活動
	8 文京区エリアスタディ(社会調査実習)	社会調査実習にて区内の地域調査	通年	正課活動
	9 津和野町地域交流連携事業	行政、地域住民との連携事業	通年	正課・課外・ 教員活動
	10 春学期の3-4年ゼミ「観光デザイン演習IA」 と「観光デザイン演習IIA」	文京区の観光資源・歴史的建造物等 を学ぶ	通年	正課・ 教員活動
	11 跡見「学芸員」in 菊坂	菊坂跡見塾を活用した地域交流	通年	課外活動
	12 B-ぐる映像制作プロジェクト	コミュニティバスで放映する映像制作	通年	課外活動
	13 氷川下つゆくさ荘との協働プロジェクト	施設の運営、企画立案への参加	通年	課外活動
	14 (仮) 跡見ひきこもり支援事業	NPO等と連携した区内の青少年支援	通年	課外・ 教員活動
	15 港区市街地再開発事業事後評価委員会委員	事業に係る事後評価を実施	通年	教員活動
	16 跡見学園女子大学心理教育相談所講習会	市民向け講習会の実施	通年	教員活動
	17 文京アカデミー	市民向け講座の実施	8月	教員活動
	18 ひきこもり等支援者連絡会	NPO等と連携した区内の青少年支援	通年	その他
新座・埼玉	19 鳩ヶ谷地域交流連携事業	産学連携の地域活性化事業	通年	正課・ 課外活動
	20 三郷市行政不服審査会委員長	学識経験者としての助言	通年	教員活動
	21 三郷市男女共同参画審議会委員	学識経験者としての助言	通年	教員活動
	22 新座市就学支援委員会委員	学識経験者としての助言	通年	教員活動
	23 新座市子ども・子育て会議委員	学識経験者としての助言	通年	教員活動
その他	24 南富良野町地域連携事業	事業に対し調査・分析での協力	通年	正課活動
	25 銚子市における地域課題体験スタディツアー	学外実習	9月	正課活動
	26 山形県西川町・新規お土産開発プロジェクト	お土産開発についての提案	6-3月	正課活動
	27 盛岡市「文京区学生と創るアグリノベーショ ン事業」のうち、「もりおか短角牛の産業構造 分析及び首都圏を対象とした商品開発・PR 施 策等の検討並びに実行」事業	事業に対し調査・分析での協力	通年	正課・ 課外活動
	28 長野原町 (一社) つなぐカンパニーながの はら 地域交流事業	地域課題の把握・解決をめざす事業	通年	正課・課外・ 教員活動
	29 岡山県笠岡市(六島) 交流連携事業	まちづくり協議会事業の支援、地域活 性化策の提案	通年	正課・課外・ 教員活動
	30 渡嘉敷地域交流連携事業	行政、地域住民との連携事業	通年	正課・課外・ 教員活動
	31 広野町交流連携事業	企画への支援、復興事業への参加	通年	課外・ 教員活動
	32 セミナー「BIZCOLI TALK コロナ禍の家計消 費の動向と変化の兆し」講師	専門知識を活かしたセミナー開講	5月	教員活動
	33 静岡県東伊豆町地域活性化事業	地域資源調査、イベントの運営協力	通年	その他

順不同、分類・記載は筆者判断による
学内の地域交流関連活動に関わる調査資料にもとづき筆者作成

3. 新型コロナウイルス感染症流行の影響について

地域交流センターでは、2019年度、2020年度、2021年度と跡見学園女子大学において実施、実施計画のある地域交流活動について調査を行ってきた。そこで把握された地域交流活動の件数の推移は下記のようになっている。

表2：2019年度～2021年度の地域交流活動の件数の推移

年度	実施地域：文京・東京	実施地域：新座・埼玉	実施地域：その他	総数
2019年度	33	22	28	83
2020年度	27 (約18%減)	11 (50%減)	25 (約11%減)	63 (約24%減)
2021年度	18 (約55%減)	5 (約77%減)	10 (約64%減)	33 (約60%減)

() 内には、同項目の2019年度比減少率を示した。
(出典 金子 2020：12、新垣 2021：46-68)

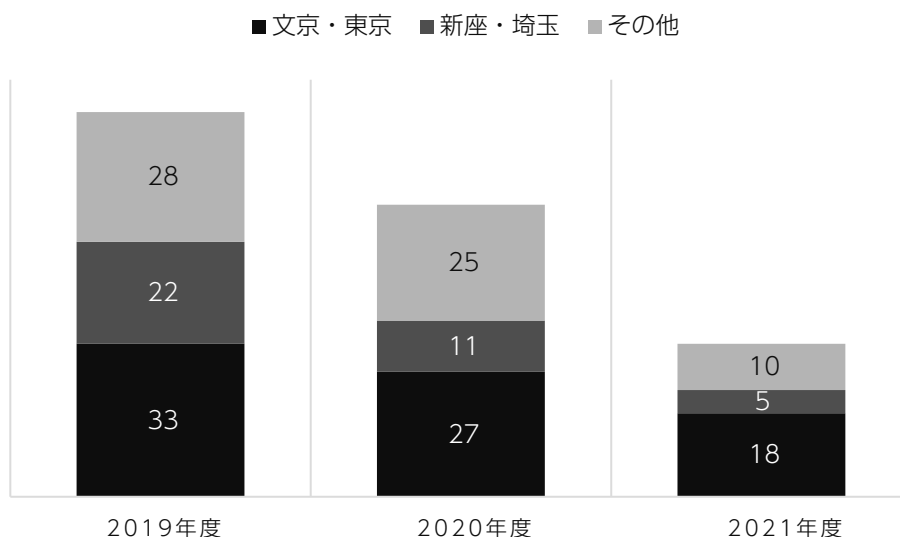


表2からは、地域交流活動が2019年度と比較して2020年度は約24%減少、2021年度は約60%減少していることがわかる。そのため、跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行による影響は、2020年度よりも2021年度に強く現れたということが出来る。

特に強い影響を受けたのが「新座・埼玉」、「その他」の地域で実施される地域交流活動である。「その他」地域での地域交流活動は2019年度と比較して2021年度は約64%減少、「新座・埼玉」地域での地域交流活動は2019年度と比較して2021年度は約77%減少となっている。表1の「新座・埼玉」地域での地域交流活動については、5件中4件が地方行政の委員などの教員活動となっており、「新座・埼玉」地域で学生たちが関与する地域交流活動が希少なものとなっている現状がうかがえる。

4. まとめ

本稿の目的として設定した、2021年度の跡見学園女子大学においてどのような地域交流活動が実施または実施が計画されていたのかという問いについては、33件の地域交流活動が実施または実施が計画されていることが明らかになった。

また、もうひとつの目的として設定した、新型コロナウイルス感染症流行の影響が地域交流活動にどのような影響を及ぼしているのかという問いについては、2019年度と比較して2021年度地域交流活動の件数が約60%減少していることが明らかになった。また、この地域交流活動の件数の減少は、2020年度よりも2021年度に強く現れており、その背景には新型コロナウイルス感染症流行の長期化による影響が考えられる。さらに、地域交流活動の件数の減少は「新座・埼玉」、「その他」の地域で実施されていた活動により強く影響していることが明らかになった。

その背景としては、長距離の移動や宿泊を要する「その他」地域での地域交流活動が強く影響を受けることは、新型コロナウイルス感染症流行の特徴を考えると理解できる。また、跡見学園女子大学の場合、前期課程（1、2年次）が新座キャンパス、より専門性を増す後期課程（3、4年次）が文京キャンパスというダブルキャンパス制を採用しており、ゼミや卒業論文の学びの場となる「文京・東京」地域での地域交流活動の方に軸が出来ることは理解できる。しかし、新座キャンパスが所在する、「新座・埼玉」での活動が最も減少していることは意外であり、「新座・埼玉」地域にきちんとした軸がなかったことも想像される。

このままでは、「その他」と「新座・埼玉」の地域と跡見学園女子大学のつながりが喪失する危険性も考えられる。一度喪失したつながりを再構築することは、大きな労力を要する。今回の調査からは、今後、新型コロナウイルス感染症流行が収束した際に備え、地域交流センターでは「その他」と「新座・埼玉」の地域との連携を充実し、学内向けに教育と地域をつなぐハブの機能を充実させることが喫緊の課題として見えてきた。

幸いにして、いくつかの希望も見いだせる。2020年12月より跡見学園女子大学は、「埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）」へ加入をはたしており、このプラットフォームを活用することで埼玉東上地域の地域や大学間の連携が可能となっている。また、2021年からは「にいざ子どもの未来包括連携プロジェクト」や「新座市北二福進協」との連携をスタートさせており、今後の教育との接続の可能性も期待される。これらの連携を活かし、新座市や埼玉県内の地域と跡見学園女子大学の教育をつなぐことが、新型コロナウイルス感染症流行により被った影響からの立て直しのためには重要となると考える。

引用文献

- ・新垣夢乃、2021、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について―特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して―」『ゆかり』2
- ・金子祥之、2020、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状と課題―学内調査を通じた実態把握―」『ゆかり』1
- ・東京都、2021、「専門家によるモニタリングコメント・意見【感染状況】」『（第72回）東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議資料（令和3年12月23日）』（https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/020/757/72/20211223_03.pdf 2021年12月29日参照）

特 集

コロナ禍の活動

―経験の共有とコロナ後に残るもの―

跡見学園女子大学地域交流センター

地域交流センターでは、2019年度より継続して跡見学園女子大学内における地域交流活動の実施状況に関するアンケート調査を実施してきた。この調査により、2021年度の跡見学園女子大学では、コロナ前に比して地域交流活動が約6割減少したことがわかった。

この数字は、コロナ禍が地域交流活動に対して大きな影響を与えていること、そして、コロナ禍において地域交流活動を継続／立ち上げることが如何に困難であることを示している。

本特集では、コロナ禍においても地域交流活動を継続／立ち上げてきたそれぞれの教員、ゼミなどがどのような経験をしてきたのかを共有するとともに、困難に立ち向かったからこそ見えてきた課題や知恵をコロナ後に残るものとして共有することを目的としている。

2022年度以降もコロナ禍は続くことが予想される。本特集で共有した経験は、知の資源として、これからのウィズコロナにおいて役立つものとなるだろう。また、その知の資源はアフターコロナに向けて、多くの示唆と気づきをもたらすものとなるだろう。

「スミファ (すみだファクトリーめぐり)」活動への参加 —コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて—

マネジメント学部 教授 許伸江

マネジメント学部3年 一條結衣・熊谷綾花・宮崎陽菜・茂手木佑衣・梁島彩椰

1. はじめに

マネジメント学部の許伸江ゼミでは、毎年3年生の学外係を中心に地域交流イベント等の学外活動を行っている。2021年度は、「スミファ (すみだファクトリーめぐり)」というオープンファクトリーイベントのSNSでの広報活動に参加した。本稿では、その活動内容について紹介する。

2. スミファの概要

(1) スミファの内容

スミファ (すみだファクトリーめぐり) は、一般の人が墨田区の町工場を巡り、職人と話し、その技術に触れ、ものが作られていく現場を肌で感じることでできるイベントであり、2012年から開催されている。2019年までは対面で行われていたが、2020年はコロナ禍のため完全オンライン開催となり、2021年はオンラインと対面のハイブリッド形式で開催された。例年、約20社が参加、来場者数は2019年までは約4000人の規模のイベントである。墨田区の多様な産業構造を示すように、印刷業、金属加工、ガラス加工、ウレタン加工、鋳造、革漉き、プレス加工、裁断加工など、多岐にわたる業種や工程を見ることができるのが魅力である。

(2) コロナ禍での開催

2021年度のスミファは、記念すべき第10回であったため、2020年の完全オンラインの経験を活かしつつ、対面でのワークショップや物販も行うなど、さらに力を入れて準備を行った。なお、今回は31社が参加し、11月20日(土)・21日(日)に開催された。第10回の内容は、①工場見学、②ツアー、③ワークショップ、④販売である。これに加えて、Webサイトでは参加企業の紹介動画を作成して公開した。

3. 跡見学園女子大学の許伸江ゼミの学生が担当した内容と感想

以下では、ゼミ学生がスミファで担当した内容と感想を述べていく。なお参加にあたりゼミで「学外係」を5名選んだ。スミファのような学外でのイベントに積極的に取り組みたい学生の立候補により決まった。この5名がリーダーとなり、他にもゼミ内から参加したい学生を募集し、7名が参加することとなった。よって合計12名で活動したことになる。

(1) 担当した内容

担当内容は、「スミファ学生企画」として、SNSを利用して参加企業のPR活動を行うことである。なお、11月20日(土)・21日(日)の本番に向けて、事前にInstagramとFacebookで参加企業紹介を行うため、投稿日時は9月27日～10月30日の16時に投稿することで調整した。それ以前の準備として、PRするための取材活動を8月中旬から開始した。ゼミ内のスミファ参加者12名を3グループ(1グループ4名)に分けて、各チーム8社～9社の企業を担当した。スミファ実行委員の「学生担当」の前島昭美氏がスケジュール管理やトラブルの際



写真1：学生によるInstagramの投稿
出所) Instagramのsumifa_sumidaアカウント(2021年9月30日投稿)

の対応など、全て柔軟に対応してくださった。投稿に向けて、以下のような流れで取材と投稿を進めた。

- ①担当企業とメールで連絡を取り、取材形式(zoom／対面／メール)の確認と取材日程の調整
- ②取材：各企業がスミファ2021で行う押し企画について深掘り
- ③掲載記事の作成(企画内容・担当者一言メッセージ・学生から一言)
- ④作成した記事と写真を各担当日にInstagramとFacebookに投稿(事務局のチェックを経る)
- ⑤スミファ2021の開催日当日に対面参加(着物着付け体験・革工場の見学)

(2) 参加した学生の感想

1) 大変だったこと

- ・企業とメールでやり取りをすること自体があまり経験のないことであったため、失礼がないか、どんな文を送ればいいのか悩み、1つのメールを送ることにかなりの時間を要した。
- ・特にメール取材はこちらが受け取ることができる情報が限られているため、その情報量でいかに魅力を伝える記事にするか苦労した。
- ・企業の方が伝えたいことを汲み取り、お客様により良く伝えるためにどうしたら良いかを考えることが難しかった。
- ・1グループが担当する企業が自分自身が想像していたよりも多く、各企業から得た情報が混ざらないように、それぞれ得た情報は随時メモを取って整理した。

2) やりがいを感じたこと

- ・学生という立場では、企業と直接何かを成し遂げていくことは普通であればなかなか経験できないことであるため大変貴重な数か月を過ごすことができた。
- ・自分自身が直接取材して作成した記事が実際に世に出ることが嬉しくて非常にやりがいを感じた。
- ・自分に務まるかととても不安であったが、最後まで成し遂げることができて自分自身も成長ができた。

- ・対面取材は大変緊張したが、伺いたいことを漏れなく聞けて楽しく取材することができた。
- ・スミファ 2021はオンラインでの開催であったが、コロナウイルスの影響により開催条件が制限されたなかで、スミファに参加をするお客様をいかに楽しませることができるか考えることは簡単なことではない。しかし各企業やその担当者は、お客様に魅力を知って楽しんで頂くため、工夫を凝らした企画を行いその様子を見ることができ、とてもよい学びとなった。
- ・企画を発信するための記事を自分が作成するというのに大きな責任を感じた。
- ・記事作成の際に細部までこだわっていた企業もあり、スミファへの強い想いを感じた。この想いに向き合うことで大きなやりがいを感じることができた。
- ・企業とお客様を少しでも繋げる役目が果たしていたのならば、非常に嬉しく感じる。
- ・記事完成後に企業の方に確認をして頂いた際に「伝えたいことが明確に表現されていてとても嬉しく思いました。〇〇さんのお陰です!」と言って頂いた時は、企業様の伝えたいことを汲み取ることができ、自分が発信したいことが認められたことに非常に達成感を覚えた。

4. まとめ：コロナ禍後に残るもの

2021年度は、オンラインでのやりとりが中心で、どのように学生がやりがいと責任感を持ってくれるのか心配な部分もあったが、実行委員会の学生担当の方のご尽力もあり、無事に責務を果たすことができた。

しかしながら、やはり対面とzoom、メールでの取材では、内容の深掘りに差を感じたようである。可能な限り企業に直接訪問して場を共有した方が、より内容の濃い記事が完成するのではないかという意見が複数でた。

とはいえ、2019年度までは対面のみで行っていたオープンファクトリーであること、そしてイベントとしては工場の現場に来てもらうことが最大のポイントであることから考えると、オンラインでもこれだけの充実した内容で開催できることは大きな収穫であろう。これまでは小規模・零細企業では作成すらできなかった企業紹介動画を、スミファの実行委員や仲間たちで協力して作成するなど、新たな可能性も見えてきた。

今後は、こうしたITやネットワークを利用した取り組みは更に充実していくことは間違いない。よって、リアルでの体験の良さと、オンラインやオンデマンドでの良さ（遠方からも参加可能、あとから何度でも見られる等）も活かしたイベントへとさらに進化することを期待し、学生もそこに参加することでwin-winの関係を築いていく努力を続けたい。

コロナ禍における地域活動 三郷市行政不服審査会委員長・葛飾区男女平等推進審議会委員の活動から

マネジメント学科 鷹 咲子

1. はじめに

本稿では、コロナ禍における地域活動として、筆者がつとめる三郷市行政不服審査会委員長・葛飾区男女平等推進審議会委員の経験を紹介し、この経験をコロナ後にも、どのように活かしたら良いか考えたい。

2. 「三郷市行政不服審査会」の活動について

三郷市は、埼玉県南東部に位置し、人口は約14万人（2022年1月1日現在）であり、微増している。2021年の65歳以上人口が総人口に占める高齢化率は27.1%で全国平均29.1%より少し低い。以前から、マネジメント学部のアカデミック・インターンシップの受入れ先であったが、2017年に本学と三郷市が包括協定を締結し、行政不服審査会のような市の委員会に学識経験者委員としての就任を依頼されることが増えたことが、筆者が三郷市行政不服審査会委員長を務めることになったきっかけである。筆者の就任後、2020年度に1件の答申を行った。答申内容は後述するデータベースに掲載されているが、「保育施設の利用者負担額」に関する案件である。

「三郷市行政不服審査会」は、行政不服審査法に基づき制定された三郷市行政不服審査会条例により設置されている委員4人以内の第三者機関である。他の公共団体と同様に三郷市行政不服審査会では、市の処分又はその不作為についての審査請求の裁決の客観性・公正性を高めるため、市長の諮問に応じて、審理員が行った審理手続の適正性や法令解釈を含め、審査庁（市長）の判断の妥当性を判断して答申を行う。なお、行政不服審査会等が行った答申内容等は、総務省の「行政不服審査法に基づく裁決及び答申に関するデータベース」から検索・閲覧できる形で公開されている。

そもそも「行政不服審査」とは、国や地方公共団体の違法又は不当な処分に関し、国民が簡易迅速かつ公正な手続の下で広く国や地方公共団体に対する不服申立てをするための制度で、(1) 国民の権利利益の救済を図るとともに、(2) 行政の適正な運営を確保することを目的としている（行政不服審査第1条）。処分に対して不服がある場合には、裁判に訴える（行政訴訟）という方法もあるが、手続もより複雑で、裁判所へ足を運ぶ必要がある。行政不服審査制度の不服申立ては、書面で行えて、おおむね裁判よりも短い期間で結論を得ることができ、手続に費用もかからないという利点がある。

国や地方公共団体が「処分」を行う場合には、処分相手に対する「教示義務」があり、不服申立ての方法や申立先、期限などの説明（教示）をすることになっている。処分が書面でなされる場合には、「処分」に関する文書に例えば次のように示される。「この処分に不服がある場合は、この処分があったことを知った日の翌日から起算して3か月以内に、〇〇に対して審査請求をすることができます。」本件も

「保育施設の利用者負担額」の通知の教示文によって、審査請求に至ったようである。市長が指名した市職員が勤める審理員が行った審理手続の適正性や法令解釈の妥当性について、資料に基づき、弁護士・税理士等の学識経験者委員と合議しながら判断し、答申をまとめる。

3. 「葛飾区男女平等推進審議会」の活動について

葛飾区は、東京都の区部北東部に位置し、近年の人口の増減は小さく横ばいで約46万人・高齢化率24.7%（2022年1月1日現在）となっている。

「葛飾区男女平等推進審議会」は、葛飾区男女平等推進条例により設けられ、男女平等社会を実現するため、男女平等推進施策に関する事項や推進計画の策定等について審議する。委員17人で構成され、その内訳は、公募区民4人、区内関係団体を代表する者8人、学識経験者3人、区長が必要と認める者2人となっている。

コロナ禍の2020・2021年度には、主として葛飾区男女平等推進条例に規定されている「葛飾区男女平等推進計画（第6次）」のための審議を行った。「葛飾区男女平等推進計画」は1996年に第1次の計画が策定され、今回の第6次の計画は、2022～2026年度を計画期間としている。

この計画は「男女共同参画社会基本法」に定める「市町村男女共同参画計画」に該当する計画で、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」に定められた「市町村基本計画」にあたる「葛飾区配偶者暴力の防止及び被害者保護のための計画（第4次）」と「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」に定められた「市町村推進計画」にあたる「葛飾区女性活躍推進計画（第2次）」を包んでいる。また、人権尊重・男女平等推進施策は、総合的な区のまちづくりビジョンである葛飾区基本構想、構想実現のための基本計画、具体的な事業計画である実施計画にも位置づけられているほか、この計画では葛飾区の福祉・教育・子ども施策などとも連携を図っている。

2020・2021年には、計7回の審議会が開催され、葛飾区男女平等推進計画（第6次）の素案がまとめられ、素案についての意見を広く求めるパブリック・コメントの手続が行われている。

4. コロナ禍における活動

「三郷市行政不服審査会」は、コロナ禍であったが少数の委員数でもあり、対面での審査会が実施された。「葛飾区男女平等推進審議会」は、当初筆者の海外留学に伴い、審議への参加が難しいと考えていたが、コロナの影響で、会議自体が会場での対面とオンライン会議のハイブリッド形式で開催されたため、海外からオンラインで会議に参加することができた。同様に、2021年の文部科学省の「就学援助事務システムの標準化検討会」もオンライン方式で会議が開催されたため、海外にいながら会議に出席することができた。従来は、対面で行われていた会議前後の打合せも、会議本体と同様にオンラインで行われた。

5. おわりに ―コロナ後に活かすべき経験―

本稿で紹介した2つの自治体の会議の対面での開催場所は、最寄り駅から距離もあり、開催日時を調整する際には、授業時間との調整が難しい場合もあった。しかし、コロナ禍において、大学の授業がオンラインで行われたり、オンラインで参加できる会議となったりしたことにより、従来よりも柔軟に日程調整を行うことができた。今後、コロナが終息した場合も、状況によってはオンラインでも会議に参加できると、授業時間との調整が容易になると考えられる。

しかし、授業と同じく、対面とオンラインでのハイブリッド形式での開催は、技術的に難しいことも多い。対面会場で発言者分のマイクが十分に準備できない場合、オンラインでの参加者に発言者の音声が入り届かないことも多い。また、市や区の施設におけるWi-Fiなど通信環境が十分でない場合、会議システムによっては、通信環境に負荷がかかり接続が不安定になることもある。コロナ後にもオンラインで会議に参加できることのメリットは大きいですが、ハイブリッド形式での開催の技術的な問題を解決することは今後の課題である。

コロナ禍における地域活動 —防災フェスタ中止に伴う啓発パンフレット作成を通して—

赤松瑞枝

1. はじめに

赤松ゼミは2017年から文京区防災課が主催する防災フェスタに参加し、研究成果をブースにて発表している。8月の最終日曜日に教育の森公園で開催される同フェスタでは、多くの企業や団体がブース出展を行い、防災に関する情報発信をすると共に、自衛隊や消防局等の協力のもと、地域住民や来場者が防災訓練を行っていた。しかし2020年及び2021年は、新型コロナウイルス感染防止の観点から開催中止となった。そこでゼミ生は、研究内容をインターネット上で発信することで、啓発活動に取り組んだ。本稿では、2021年に行った取り組みの一部を紹介する。

2. 在宅被災への備え方に対する啓発パンフレット作成

ステイホームが強調され、仕事や学習にオンラインが導入されるようになった昨今、在宅時間が増加している。また三密を避けるという観点から避難所への一斉避難は必ずしも望ましいとは言えず、様々な場所への分散避難や在宅避難が推奨されつつある。こうした現状を踏まえると、在宅時に被災し復旧までの時を自宅で過ごすというケースの急増が予測され、これまでとは視点を変えた「備え」が求められる。こうした背景を踏まえて今後の防災のあり方について調査をした結果、学生たちは、平常時や災害時などの枠にとらわれずに適切な生活の質を確保し、災害時にも利用できる備品や環境整備を日常的に行う「フェーズフリー」という考え方が紹介されていること、しかし未だ浸透しているとは言い難いこと、に着目した。そして2つのチームに分かれ、それぞれの視点から、「フェーズフリー」の有効性を紹介するパンフレットを作成し、ゼミのホームページ⁽¹⁾やTwitter⁽²⁾、Instagram⁽³⁾等で情報発信した。

1つのチームは定義や原則、自宅でできる取り組み事例及び「フェーズフリー」に該当する文京区の防災関連取り組みを紹介するパンフレットを作成した(図1)。もう1つのチームは、学生を対象に認識度調査を行い、それらの結果を示しながら衣食住の側面でのように「フェーズフリー」を導入したらよいかアイデアを紹介した(図2)。双方のパンフレットに目を通すことで、概念・定義の把握から具体

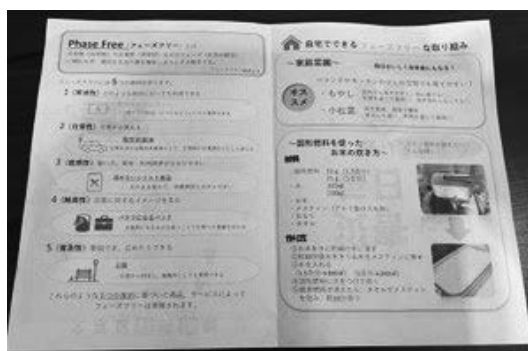
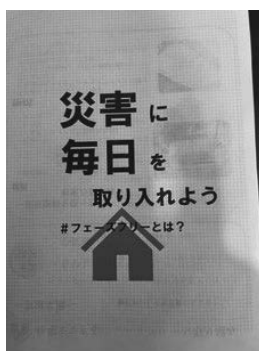


図1：フェーズフリー啓発パンフレット 概要解説編

例の把握へという流れができ、初めて見聞きする人にも分かりやすく関連情報を提供することが可能となっている。さらに身近な事例を掲載しているので実践意欲を促しやすい効果もあると考えている。



図2：フェーズフリー啓発パンフレット 具体事例編

これらのパンフレットについては、試作品完成後、文京区防災課の防災フェスタ担当者にお目通しいただき、多角的視点から分かりやすくまとめられているとの評価を得た。さらにSNSを御覧下さったフェーズフリー協会の代表者から推薦頂き、第2回フェーズフリーアワードアイディア部門にエントリーし審査を受けることになった。

3. おわりに

アフターコロナでは従来の方法に戻すのではなく、新しいかたちの防災を構築することが求められており、在宅避難（分散避難）を安全に実現するための啓発もその一つに位置づけられている（根本、2021、2）。このことから今回の活動は、学生たちがコロナ後の地域防災にも資する研究成果及びオンラインでの情報発信のノウハウを取得できたという点で有意義であったと言える。防災フェスタへの出展が叶わずとも、自主的な研究を行って成果物をまとめ、オンライン上で広報するという方法により、地域と係る活動が可能になることが分かったことも収穫であった。

一方、発信した情報の受け取り手が少ないことや、受け取り側の感想を把握できていないことが改善すべき課題である。防災フェスタへの出展時は、200名前後の来場者とコミュニケーションを取り、学生が多くの示唆を得て、自分たちの取り組みを客観的に振り返ることが出来ていた。オンラインであってもこうした学びを得られるよう工夫を凝らしながら、活動を継続させたい。

補注

- (1) 赤松ゼミホームページ <http://index.html>（最終閲覧 2022年1月7日）
- (2) 赤松ゼミTwitter https://twitter.com/akamatsu_zemi（最終閲覧 2022年1月7日）
- (3) 赤松ゼミInstagram https://www.instagram.com/akamatsu_zemi/（最終閲覧 2022年1月7日）

引用文献

- ・根本昌宏、2021、2020年から2021年の防災、1-2、北海道庁ホームページ
https://s/4/8/9/8/6/0/_/%E3%80%90%E8%B3%87%E6%96%997-4%E3%80%912020%E5%B9%B4%E3%81%8B%E3%82%892021%E5%B9%B4%E3%81%AE%E9%98%B2%E7%81%BD%202022%E5%B9%B4%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6.pdf（最終閲覧 2022年1月7日）

「文京区エリアスタディ（社会調査実習）」にみるコロナ禍の影響

コミュニティデザイン学科 佐野美智子

1. 「文京区エリアスタディ」について

「文京区エリアスタディ」は、観光コミュニティ学部社会調査士課程科目「社会調査実習」（3・4年生対象）として開講する2クラスのうちの1つで実施している社会調査のテーマである。社会調査実習の授業では、春学期と秋学期を通じて同じ教員が担当するクラスを履修し、一年間かけて調査の企画・設計から、実査、データの集計・分析、成果報告書の作成まで、社会調査の全過程を一通り、体験を通じて学習する。実際の調査経験を通じて社会調査法を理解し、実際に活用するためのスキルを身に付けることを授業の目的としている。

筆者が担当するクラスでは、文京キャンパスがある文京区を調査対象エリアとする「文京区エリアスタディ」を行うことを基本とし、毎年、さまざまな個別テーマに取り組んでいる。過去取り上げたテーマには以下のようなものがある。

	テーマ	内容
第1回 (2017年度)	なぜカフェ・喫茶店を利用するのか？	カフェ・喫茶店のサードプレイスとしての役割を検証することを目的に、文京区茗荷谷エリアのカフェ・喫茶店の協力を仰ぎ、来店者に対する質問紙調査と店長に対する質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。さらに、本学および近隣大学の学生の一部を対象に集合調査を実施した。
第2回 (2018年度)	大塚3丁目地域満足度調査	文京区では1999年以降、人口・世帯数ともに増加が続いていることをうけて、高層マンションが増えて新しく地域に住む人が増加するなか、古くから地域に住む旧住民と新住民の共生が地域社会にどのような変化をもたらしているのかを調査した。調査対象エリアは大通り沿いに高層マンション建設が相次ぐ大塚3丁目に設定した。質問紙調査とインタビュー調査（アンケート回答時にインタビュー協力願いに応じてくれた方々が対象）を実施した。
第3回 (2019年度)	教育の場としての文京区 一小学5・6年生の保護者の教育観―	文京区にはいわゆる「ブランド小学校」が多く、2013年以降に区立小の児童数が大きく増加する一方、区立中学校の生徒数は漸減するという対照的な動きを見せている。中学受験が盛んな様子やうかがえることから、小学5・6年生の保護者の教育観や子どもの将来への期待と教育費や子どもの成績との関連について質問紙調査を実施した。区立小学校の協力を得ることが難しかったため、区内の学習塾や習い事教室、児童が放課後に時間を過ごす場所を運営する団体等に調査協力を依頼し、調査票を配布した。インタビュー調査も実施した。
第4回 (2020年度)	新型コロナ禍と生活の変化	コロナ禍による生活の変化が私たちの生活満足にどのような影響を及ぼしているのか、働き方の変化と子どもの学びの変化、対面から遠隔への対応やその評価について調べるために質問紙調査を実施した。区内でも1世帯当たり人員が多い小日向地域を調査対象とした。インタビュー調査は実施せず。
第5回 (2021年度 現在進行中)	新しい日常 ―新型コロナ禍と生活の変化調査第2弾―	コロナ禍による生活変化について、家計行動や時間の使い方の「ニューノーマル」を調べるとともに、コロナ収束後の生活についての考えを尋ねる質問紙調査を実施中。調査対象エリアは小石川地域とした。

2. コロナ禍の影響

社会調査実習におけるコロナ禍の影響として、2点を挙げるができる。面接を伴う調査方法を避けたこと、調査回答者へのフィードバックとして実施する報告会を開催しなかったこと、この2つである。

(1) 面接を伴う調査方法の回避

文京区エリアスタディでは、質問紙調査とインタビュー調査を両方経験し、量的データと質的データの特徴を理解し、社会事象を複眼的に理解する能力を身に付けることを目指している。しかし、コロナ禍の影響を受けた2020年度調査と現在進行中の2021年度調査では、感染リスクを考慮して、対面でのインタビュー調査を取り止めた。オンラインでのインタビューという方法もあるが、対面で実施するとき以上にインタビュースキルが必要になることを考慮し、インタビュー経験がない学生にとっては実施が難しいと判断した。

一方、質問紙調査については、感染リスクを小さくするために、①調査対象エリアを大学から徒歩圏内に設定（交通機関を使わない）、②調査票配布はポスティング（調査対象者との面接を避ける）、③回収は料金後納郵便を利用（調査対象者との面接を避ける）、という方法を採用した⁽¹⁾。質問紙調査でも、オンラインによる実査にすれば調査対象者との面接は不要になる。しかし、調査対象エリアを特定した調査をオンラインで実施する際には、調査票にアクセスする権限を調査対象者のみに与える必要があるため、対象となる母集団の名簿（例えば住民基本台帳）が必要となる。近年はこうした名簿の利用は個人情報保護の観点から大変難しくなっており、また、台帳閲覧には費用がかかるので、実習授業で利用するのは難しい。

(2) 調査結果の報告会開催を断念

社会調査実施後は、調査協力者に対して調査結果をフィードバックする必要がある。年度末に完成する調査報告書を希望者に郵送するほか、文京区大塚地域活動センターや文京区社会福祉協議会の地域連携ステーション「フミコム」で閲覧できるように配本している。また、本学HPで報告書完成を告知し、QRコードから報告書pdfにアクセスできるようにしている。こうした対応に加えて、区内の特定エリアを対象にした調査の際には、文京キャンパスで報告会を開催している。報告会には、調査に協力していただいた個人に加えて、対象エリアの町会関係者にも声をかけて参加していただいている。

2018年度調査は大塚3丁目を調査対象エリアにしたので、年度末の3月に報告書が完成したタイミングで報告会を開催した。報告会では学生が調査結果を報告したあと、町会関係者の方々からコメントをいただいたり、質疑応答の時間を設けたり、充実した内容となった。また、報告会終了後には参加された方々が互いに名刺交換するなどの光景が見られ、地域の方々の交流の場として機能できることがわかった。このため、調査対象エリアを特定して調査を実施した場合には、該当地域の町会や商店会等の関係者にもこちらからお招きする形で参加を呼び掛けるようにしたいと考えていた。

2020年度調査は小日向地域を調査対象エリアとして実査をおこなったので、2018年度調査時と同様の報告会を開催しなかった。しかし、年度末になってもコロナ禍収束には至らず、報告会開催は断念し、希望者や町会関係者に報告書をお贈りするのみの対応とした。オンラインで報告会を開催する方法

もあるのだが、その場に居合わせた多様な人びとの間で生まれる相互作用、シナジー効果を生み出すことは難しいと考えた。学生による調査結果の報告、質疑応答や町会関係者からのコメントといった内容であれば、オンライン報告会でも問題なく対応できるのだが、その後の「交流の場づくり」は報告会主催者側の力量では難しいと判断したのである。

3. ウィズコロナで進める文京区エリアスタディ

コロナ禍の収束には時間がかかりそうだ。授業の一環として行っている「文京区エリアスタディ」は、コロナ禍で中止するわけにはいかないので、調査方法の工夫によって乗り切っていくことになる。コロナ禍前も、調査にお金をかけられないという絶対的な制約の下で工夫を強いられてきたが、新たな制約が課された状況となっている。状況に応じてさまざまな工夫を編み出していきたい。

一方、「報告会を開催して地域の交流のきっかけとなる場としたい」という、いわば「文京区エリアスタディ」の副次効果の面への対応についてはどうしたらいいだろう。2020年度調査では報告会中止の対応をとった。現在進行中の2021年度調査についても、大学の教室を使って報告会を開催することは難しそうだ。ただし来年度については、イベント開催時のコロナ対応について社会全体での経験値が積みあがっていることを考えると、対策を工夫しながら開催できるのではないかと考えている。前述したように、オンライン開催の報告会では難しいと思われる「交流の場づくり（交流のきっかけとなる場をつくる）」については、来年度以降、改めて取り組んでいきたい。

【注】

(1) この方法は第2回調査(2018年度)でも採用しているが、この時は、調査対象者との面接を避けるためではなく、実査費用を抑えるために採用した。①は調査員である学生にかかる交通費を不要にし、②はポスティングすることで郵送費を不要にする。さらにポスティングできる範囲内に調査エリアを限定することで全数調査にし、サンプリング費用を不要にする。③については、調査票回収時に全世帯を学生が訪問して回るのは非効率であるため(ポスティングによる調査の回収率はおおむね2割程度)、調査票配布時に料金後納の返信用封筒を同封しておき、回答後の調査票はその封筒を使って郵送してもらうことで郵送費を抑えることを目的とした。

2021年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに ―プロジェクト概要―

B-ぐる映像制作プロジェクトは、文京区のコミュニティバスB-ぐるの車内で放映されている動画を、B-ぐる沿線協議会の依頼を受けて本学の学生が制作するというもので、もともとは2013年度にマネジメント学部芝原ゼミ（当時）ではじまったものである。教員の定年退職に伴い、2015年度から地域交流センター（当日は地域交流担当）が所管し、センターが参加学生を呼びかけ、これまで制作を継続してきた。呼びかけられて参集した学生はAGB隊（跡見・ガールズ・B-ぐる隊）としてB-ぐる沿線協議会とともに映像制作を行っており、2021年度はコロナ禍のなかでも例年と同じく3つのチームに分かれ、2021年10月公開・2022年1月公開・4月公開の動画の制作を行った。1つのチームは4～5の企画班にわかれ、3～5分程度の動画を制作しており、1チーム15～25分程度の動画が原稿執筆時点の2022年1月上旬時点で2本制作され、今後、年度内にさらに1本制作される見込みである。

2. コロナ禍2年目における活動の展開

(1) コロナ禍前と同水準の活動の再開

2020年度はコロナ禍の影響で上半期は対面の活動を行うことが極めて難しい状況で、活動も感染が一時的に収束した下半期を中心にしたものとなり、新しい動画の制作も例年よりも少ない2本に留まっていた。2021年度の活動開始にあたっては、2020年度下半期での活動状況も踏まえながら、B-ぐる沿線協議会関係者・担当教員の筆者・2020年度の活動に中心に関わった学生で、活動方針について検討を行った。その結果、年度初めに大学として教室外の活動の指針も示され、どのような状況においてどのような対策をすることで、どのような活動ができるのかが明確になったことや、感染症対策のノウハウも蓄積されてきたことなどから、引き続きオンラインも活用し感染対策を行いながら、コロナ前と同じ3本の動画制作をすることとなった。

プロジェクトは、地域交流センターが直接管轄する活動の一つであることから、まずは、年度初めの4月に地域交流センターから全在生学生に向けてポータルを通じて参加の呼びかけを行った。これに対して、昨年度からの継続参加者11名に加えて新規参加者19名の応募があり、合計30名の参加者で活動をスタートすることとなった。この30名という人数は2015年度に現在の形になって以降、最大の数である。コロナ禍のなかで、様々な課外活動が中止になったり大幅な制約を受けるなかで、継続中の数少ない活動へ学生が集まったということなのかもしれない。

メンバーが確定後、5月17日及び24日にZOOMを用いたオンライン会議の方式でキックオフミーティングを行った。2020年度はコロナ禍の影響で新規メンバーの募集を行わなかったこともあり、今年度は新規メンバーの割合がコロナ禍以前に比べると高い（コロナ禍前は継続2：新規1だが今年は継続1：新規2の割合）ため、ミーティングでは、まずはアイスブレイクを長めに行い相互に関係性を築

くことが心掛けられた。また、活動内容についても例年以上に詳細な説明とグループに分かれた質疑応答を行うことで、新規メンバーにも活動内容を十分に理解してもらうことが心掛けられた。また、全体を10名前後で編成されたA～Cの3つのチームにわけ、その後はチームごとに制作の活動を行うことが確認された。

(2) 各チームの活動の展開

コロナ禍前と同じく、Aチームは6月に活動を開始し10月に動画公開、Bチームは9月に活動を開始し1月に動画公開、Cチームは12月に活動を開始し翌年度4月に動画公開のスケジュールで活動する運びとなった。

以下、執筆時点で動画が公開に至っているA・Bチームでの活動について報告する。どちらのチームも最初の一ヶ月半は、ZOOMを用いたオンライン会議にて、5つの班にわかれ動画内容を検討した。班員同士は、対面では会ったことのないというケースが殆どであったが、週一回の企画会議以外にも、班でZOOMミーティングを重ねるなどしながら関係性を形成し、それぞれ、文京区の名所や名店、名物や各種団体を様々な形で紹介する動画内容を企画した。例年制作してきた「いちようさん」(樋口一葉を模したいちようさんというキャラクターが出演する物語形式の企画)では、三宅花圃をモチーフにした「かほさん」という新キャラクターが登場し、ライバルとして競い合いながら文京区内の名店などを紹介する内容のものとなった。また、これまで2路線で運行されてきたB-ぐるに今年度、本郷・湯島ルートという新たな路線が開通したことに伴い、クイズ形式などで新ルート沿線の名所や名店を紹介する動画も企画された。それ以外にも、コロナ禍を念頭に、区内でテイクアウトに力を入れている飲食店の紹介する動画なども企画された。

企画が固まった後、各班で店舗への取材交渉、撮影が行われた。コロナ禍のなかとはいえ、昨年度に比べると取材交渉で断られるケースも減少し、また、撮影も昨年度の感染対策ノウハウの蓄積を生かして順調に行うことができた。ただし、感染対策の関係で、狭い空間での撮影の場合は人数を絞って行う必要があり、通常はB-ぐる沿線協議会が依頼した映像制作の専門家が同行し撮影のアドバイスをを行うところ、学生だけで撮影を行う機会も多くなった。

撮影後の編集会議のみ、実際に専門の編集ソフトの使い方から指導する必要があることから、完全対面で実施された。Bチームの編集会議の時期はコロナ禍の収束期に行われた関係で全員が集まったの実施となったが、Aチームの編集会議が夏季休業中の感染拡大期に行われた関係で、各班が時間を少しずつずらして一度に室内にいる人数を絞っての実施となった。とはいえ、A・Bチームともに納期を守った制作活動を行うことができた。なお、制作された動画はB-ぐる車内で公開されている他、YouTubeの「B-ぐるチャンネル」(<https://www.youtube.com/channel/UCaY7ZHeVai5y91237H-tewA>)でも公開されている。



写真1：人数を絞った撮影の様子

2021年度 氷川下つゆくさ荘における跡見学園女子大学の活動について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

氷川下つゆくさ荘は、2020年7月に開設された「地域の居場所」施設である。この施設は、町会や文京区社会福祉協議会、エーザイ株式会社などからなる実行委員会で運営されており、本学地域交流センターも、エーザイ株式会社と連携する形（施設のエーザイ活動日に協働でイベントの実施などを行う）で関わっている。具体的には、地域交流センターが募集した学生が、施設を活用した取組みに参加しているほか、学内のメンバーを中心にした月一回の活動報告・検討会を開催している。

施設設立の経緯や、そこに本学が関わることになった経緯等については、既に本報告書の前号にて詳述している（土居、2021: pp. 5-7）ので、そちらを参照いただきたい。ここでは、コロナ禍の2年目を迎えた2021年度の取組みについて報告する。

2. 2021年度：コロナ禍2年目の活動概要

2021年3月27日、氷川下つゆくさ荘が入居する建物の2階で火事が発生した。氷川下つゆくさ荘は1階に入居していたこともあり、消火活動で水浸しとなった影響で、壁紙や電気配線等の被害を受けた。今年度は、乾燥や配線工事のやり直し、壁紙の張替え等もあって7月上旬まで閉鎖ということになった。

それでも、本学の氷川下つゆくさ荘プロジェクトのグループでは、4月の定例会議こそ休止したものの、その後は月に一度の定例オンラインミーティングを続け、今後に向けて何ができるのか、特にコロナ禍の状況で学生ができることと、コロナ禍がある程度収束した場合に何ができるのかを中心に検討を行った。また、チームとしての一体感を保つために、意識的にチームビルディングの活動などを行ってきた。

5月の会合では、チームビルディングの専門家も交え、参加者を複数のグループにわけたうえで競い合うようなゲーム形式のイベントを行った。その後もアイスブレイクを適宜とりいれながら、6月以降は再オープン以後にどのようなことができるかの検討を行った。そうした検討を踏まえ、まず、氷川下つゆくさ荘での本学の取組みや周辺情報などを伝えるフリーペーパーを作成することになった。また、再オープン後は、まずは地域の方々に気楽に来られる場所があるということを理解してもらうことが重要という観点から、定例会議に参加している社会人メンバー（教員、エーザイ株式会社担当者、文京区社会福祉協議会担当者）と学生が数名氷川下つゆくさ荘に滞在・開館して、地域の方々がふらりと立ち寄れるようにするオープンデイを実施しようということとなった。さらに、こうした検討の様子やフリーペーパー作成の様子、オープンデイの様子をSNSで発信していこうということで、氷川下つゆくさ荘×跡見学園女子大学のSNSアカウント（インスタグラムとツイッター）を作成し、定期的に情報発信を行っていくこととなった。

その後、7月上旬の再オープンを踏まえ、少人数のグループ単位での改装された氷川下つゆくさ荘訪問を行った。久々に訪れると、内装は張替えられ木質化されており、心機一転のスタートを切ろうという雰囲気漂うものになっていた。これを踏まえ、7月の定例会議では夏休み期間のオープンデイについての具体的な調整、フリーペーパー1号の内容の検討などを行った。しかし、夏休み期間は新型コロナウイルスの第5波の感染拡大期と重なり、8月中は実際にはオープンデイを実施することはできなかった。それでも、9月に入ると感染状況は下降期に突入したこともあり、人数を絞って氷川下つゆくさ荘を訪れ、周辺を散策しながら気づいたことを地図に記し共有していく活動を行った。



写真1. ハロウィンイベントの様子

感染が収束期に入った10月になると、オープンデイを本格的に実施できるようになり、週1～2日のペースでオープンデイが設けられた。特に決まったイベント等を行うという趣旨ではなかったが、オープンデイを実施するなかで、周辺の散策をさらに重ね、各県の県人寮等との関係性も形成されていった。また、フリーペーパー1号も完成し、配布を開始した。10月末には町会主催のハロウィンイベントが開催され、学生も事前のオープンデイの際に施設の装飾を行ったり、当日の運営の手伝いに参加したりして、昨年度に引き続き、今年度も地域の方々と学生が実際に交流をする機会を作ることができた。

11月から年末にかけても、オープンデイを引き続き実施していくと、次第に地域の方々がふらりと入ってくることも増え、中にはこうしたオープンスペースで活用してもらえないかと物品を寄付するケースもあった。筆者自身がオープンデイを担当した際も、ふらりと自転車で立ち寄った女性が、自宅に縁故米が余っているので寄付したいという申し出があり、30キロ以上のお米の寄付を受けている。こうした寄付物品は、施設で活用されているほか、施設内に自由に持ち帰れる物を置く棚を設置してそこに配架されたり、食品については月一度開催されている子ども食堂で活用されたりしている。また、フリーペーパーも年末にかけて2号が制作され、年明け早々に配布を開始する予定となっている。また、2月下旬のミニマルシェ開催を企画し、氷川下つゆくさ荘の運営を実質に行っている実行委員会コアメンバー会議にて提案し、了解を得た。ミニマルシェでは、近隣にある岐阜県人寮との関係を活かして岐阜の物品を取り寄せて販売する等の企画を検討していたが、この原稿を執筆している1月上旬現在、新型コロナウイルスの第6波の拡大期に入ったことが明らかになり、この開催が危ぶまれている。

3. おわりに

昨年度の本活動の紹介の最後に、「今後もコロナ禍が収束と拡大を繰り返していくと想定した場合、感染拡大期にはオンラインで講話や企画検討を行い、収束期には実際に地域に出てメンバー同士や地域との交流を進めることで、今後も新たな地域交流活動を展開していくことが可能である」(同上書:p.7)

と記したが、火事という想定外の要因を除くと、実際にそのようになっていたように思う。ただし、拡大・収束の間隔を予測することは現在でも極めて困難である。結果、収束期に企画したものが拡大期に中止になるということが繰り返され、それが活動へのモチベーションにも影響を与えているようであった。今後は、収束期に入った時点で、短い期間で企画を検討・提案し拡大期に入る前に実施できるような工夫が必要かもしれない。

参考文献

- ・土居洋平、2021、「新型コロナウイルス感染症流行下での地域交流活動の展開可能性 ―2020年度の活動事例からその手法を探る―」跡見学園女子大学地域交流センター『地域交流センター年次報告書 ゆかり』2号、pp.4-12

我楽田工房との連携・協働プロジェクトについて

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平

1. はじめに ―我楽田工房と連携の経緯について―

我楽田工房は、全国各地で地域振興をてがけるボノ株式会社が2014年7月に文京区関口にオープンさせたコミュニティスペースである。まずは、筆者がここで連携の活動を行うに至った経緯を簡単に紹介したい。

発端は、2015年4月にコミュニティデザイン学科が開設され、筆者も着任後、1期生が3年生になり文京キャンパスに来る頃までには文京区内で学生が地域について実践的に学ぶ場を用意したいと、連携相手を模索したことにはじまる。手探りで模索を続けるなかで、着任前からつながりのあった株式会社エンパブリックが文京区根津を拠点に活動をしていたことを思いだし、同社代表の広石拓司氏に相談を持ち掛けた。当時、同社では文京区から「新たな公共プロジェクト」事業を受託し、文京区での社会的起業を支援するプログラムを実施していたこともあり、2016年12月に開催された関連のワークショップにて、本学コミュニティデザイン学科の開設と連携先を模索していることを報告する機会を得た。その際、報告後にグループワークが行われ、文京区関口エリアで活動している方々とも交流を持つことができた。そして2017年3月、その方々との連携を相談する際、会場として案内されたのが我楽田工房であった。そこで、ボノ株式会社代表の横山貴敏氏を紹介され、我楽田工房の説明なども一通り聞いたのであるが、今後の連携の可能性を感じつつも、当時は初対面ということもあり、何か具体的なプロジェクトを一緒にという流れにはならなかった。

その後、上記の「新しい公共プロジェクト」に関わったことから、受講生を中心にプロジェクト後に形成されたまちづくりグループである「文京まちたいわ」に筆者も関わるようになった。そして、2019年2月に「文京まちたいわ」が主催するイベント「文京まちたいわフェス」がリアン文京（文京区小日向）で行われた際、我楽田工房が打上げ会場となった。その中で、横山氏とも話をする機会もあり、この頃からフェイスブック上でもつながりを持つようになる。SNSでのつながりと実際に定期的に行く機会を得ることで相互の理解も深まり、2021年春ごろのフェイスブック上でのやりとりをきっかけに、具体的な連携について相談をすることとなった。

2. 我楽田工房と連携した取組み

2021年春頃は、ちょうど基礎ゼミナール（2年ゼミ）の学外実習・インターンシップについて学生と相談をしている時期であった。コロナ禍ということもあり、2021年度も首都圏外でのインターンは一部の例外を除くと企画が困難であり、首都圏でのインターンシップも受け入れ先がかなり限定されていた。これらを踏まえ、学生にも、学外実習・インターンシップを校外見学的なプログラムや演習による代替も可能であることを説明していたのであるが、今年度は全員が可能であればインターンを希望するという状況であった。

我楽田工房は、コロナ禍の状況でも感染対策を工夫しながら様々なプログラムを実施しており、フェイスブック上のやり取りでも、今年度でもインターンシップを含め学生と一緒に何か取り組みをしていくこ

とは可能ということであった。そこで、学生にインターンの候補として紹介したところ、我楽田工房での取り組みが、まさにコミュニティデザインに関わるものということもあり、多くの学生が関心を示した。他のインターンシップ先との調整も経て、最終的に2年生は3名がインターンシップという形で我楽田工房での取り組みに参加することとなった。また、これとは別に演習ゼミナール(3年ゼミ)でも我楽田工房での取り組みへの参加希望を確認したところ、7名の学生が関心を示した。



写真1. 横山氏から事業について説明を受ける様子

密を避けるため、2・3年生別に5月から6月

にかけて我楽田工房を訪問し、どのような取り組みを一緒にするかの相談を行った。学生には、まず、我楽田工房の設立の経緯や運営しているボノ株式会社の事業、取り組んできたプログラムについて一通り説明があった。そのうえで、これから実施予定の取り組みや、既に他大のインターン生が取り組んでいる事業について紹介もあり、学生の関心を確認しながら参加する事業について相談を行った。また、相談を踏まえ、2年生3名は8月に実施されるSDGsワークショップに、また、2年生3名および3年生7名全員で同じく8月に実施される木材を使ったワークショップに関わることとなった。

ただ、その後の感染状況の悪化に伴い、木材を使ったワークショップは次年度に延期となり、SDGsワークショップも、当初は小中学生向けの2日間のプログラムであったものが、大人・関係者向けの1日のプログラムに縮小されることとなった。ただ、縮小されたとはいえ実施はされることとなり、2年生3名はその準備も含めたインターンシップを行うこととなった。ワークショップはカードゲームやグラノーラを用いてSDGsへの理解を深め、その内容についてレゴブロックを使って振り返るというユニークなものであった。学生は、資料の理解からはじまり、グラノーラの素材の準備や素材についての説明のPOPの制作、ワークショップの進行やレイアウトの検討などを行った。そのうえで、当日はテーブルファシリテーターとして運営にあたった。

当日は、我楽田工房と関わりのある地域活動やSDGsに関心のある方々が集まったほか、筆者や3・4年生も数名が参加した。2年生3名はテーブルファシリテーターとして、ワークショップの運営にあたったことはもちろん、開催前や休憩時間も参加者同士の交流促進に奔走していた。

3. 今後に向けて

インターン終了後も、我楽田工房では感染対策を工夫しながらの地域に関わる取り組みが実施されている。学生にも呼びかけがあることもあり、インターンとして関わった2年生はもちろん、当初の事業が延期になった3年生も参加している。なかには、それを通じて他大学の学生と交流を深め刺激を受けているケースも出てきている。我楽田工房は文京キャンパスから徒歩でも30分程度という近場に立地しており、特に3・4年生にとっては、コロナ禍のなかでも活動がしやすい環境にある。また、その取り組みの多くがコミュニティデザインに関わるものでもあり、来年度以降、さらに連携・協働の取り組みを進めていきたいと考えている。

コロナ禍での遠隔地との連携事業の実施の可能性 ー西川町お土産開発プロジェクトを事例にー

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平

1. はじめに ープロジェクト実施に至る経緯ー

山形県西村山郡西川町は、2015年12月に本学と包括連携協定を締結した。それ以降、筆者のゼミナールやニューツーリズム研究会を中心に、地域保全活動や地域づくり、観光振興など様々な連携した事業を実施してきた。しかし、コロナ禍のなかで2020年3月以降は学生が現地に行くことが困難となり、2020年度は全ての事業が中止・延期となってきた。

こうしたなかで、すでに2020年度から、コロナ禍においても何か連携した取組を実施できないかが模索されてきた。2020年度は具体的な事業の実施に至らなかったが、2021年度にはオンラインでも学生が参加できる取組みとして、この「西川町お土産開発プロジェクト」が始動することとなった。

2. プロジェクトの概要

西川町お土産開発プロジェクトは、(一社)月山朝日観光協会のおかみ会が実施主体となり、西川町、西川町商工会、本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科土居ゼミナールと協働で実施している事業である。背景には、西川町で販売されている既存のお土産の多くが、生産サイドの視点で地域資源をどのように活用できるのかという観点で企画・制作されたもので、観光客がどのようなお土産を求めているのかという視点が弱く、その結果、年代に関係なく気軽に購入できるお土産が少ないという課題があった。そこで、これまでとは視点を变えて、西川町を訪れる若者、特に若い女性が求めるものを軸に新しいお土産を創り出そうという本プロジェクトが企画された。

筆者のところには、観光協会事務局長より春先に連絡があり、担当者も交えてオンライン会議が開催され、プロジェクトの企画概要の説明を受けた。早速、ゼミの各学年の学生に参加を呼び掛けたところ、もともと地方での地域振興に関心のある学生が多い一方で、コロナ禍においてなかなか機会を得ることができなかったこともあり、2年生3名、3年生9名、4年生3名の合計15名の学生が参加することとなった。

3. お土産の企画・開発

6月9日にオンライン会議形式で第1回の全体会議が行われた。会議には、観光協会、町、商工会、筆者及び学生が参加し、上述のプロジェクト企画の経緯が説明された後に、現在販売されている西川町関連のお土産の確認、開発スケジュールの確認などが行われた。

学生たちは3名1組の5班に分かれ、その後1か月をかけてお土産品の企画づくりを行った。具体的には、

町から既存のお土産や写真、町関連の資料等の提供を受け、各班で商品コンセプトの検討から具体的な商品案・販売方法案の検討を行った。

7月14日に第2回の全体会議が行われ、ここで各班からのお土産品の企画提案が行われた。提案された商品は、入浴剤、消毒スプレー、フェイスパック、箸置き、グミ Mitchell、月山和紙など多岐に亘った。また、商品のみならず、体験とセットにした販売プランや、パッケージの工夫などの売り方に関する提案も同時に行われた。町側の参加者からは、各提案に対して、商品企画の意図、商品の内容の詳細、販売の際に想定される課題などについて次々と質問や指摘が相次いだ。また、月山朝日観光協会おかみ会会長からは、「象徴的なのは、画面のこちら側（対面で参加している町関係者）は私以外全員男性だが、画面の方はほぼ女性ということだ」という指摘もあった。都市部の若い女性からの提案ということで、概ね新鮮な提案と受け止められた様子が伝わってきた。



写真1. 第2回全体会議（オンライン会議）の様子

発表後、1か月程度をかけて、町側参加者及び制作業者にて実際にプロジェクトで採用し試作品を製作する提案の選定が行われた。結果は、8月23日の第3回全体会議にて発表された。採用されたのは、商品としてはフェイスパックであった。また、これに加えて別の班によるパッケージの工夫の提案も採用され、フェイスパックおよびパッケージデザインの案が示された。

その後は、複数の案について学生の方で検討を行い、自分が観光客として西川町を訪れた場合どうするかという視点で、案の精査を行っていった。学生の商品案およびパッケージ案へのコメントと、コメントを基にした修正の作業を数度経て、11月末までに最終案が作成された。また、パッケージについては複数の最終案をもとに11月末はコロナ禍の収束期であったことから、1年9か月振りに筆者が現地を訪れ、試作品の確認と今後や来年度に向けた関係者との調整を行った。

今後、1月末に商品が納品され、2月から現地にてテスト販売などが行われる見込みである。

4. コロナ禍の遠隔地との連携

今回のプロジェクトに参加した学生15名のうち、実際に町を訪れたことのある学生は6名と1/3に留まり、町の状況を知らないなかでどれだけの提案ができるかが心配されるものではあった。ただし、今回は学生に求められたことが「都市部の若者の視点」であり、それまでの地域の文脈に偏りがちであった商品開発と異なる消費者目線での開発を求められたこともあり、町のことをよく知らないことは、特段提案に不利に働くことはなかった。実際、採用されたフェイスパックを企画した班には、町を訪れた学生はいなかった。

これを踏まえると、コロナ禍においても、学生に求める役割を工夫することで、遠隔地との連携した活動は十分に可能ということになるだろう。もちろん、可能であれば現地を訪れ、資料や映像だけでは伝わりにくい、現地の人々の生活の雰囲気、文化などに触れ、それを尊重したうえで活動できればそれに越したことはない。また、こうした遠隔から地域に関わるプロジェクトを行うことで、参加した学生

の当該地域への関心は高まり、今回の場合も、まだ実際に町を訪れたことのない9名の学生も、コロナ禍が収束次第、現地を訪れたいという話をしていた。

しかし、収束と拡大の繰り返しの中で、なかなか遠隔地に自由に行くことを企画・実施しにくい環境においては、それでも可能なこうした取組みを重ねることで、まずは遠隔地の地域との関係性を維持をすることが大切である。

跡見「学芸員」in 菊坂のコロナ禍の活動について

新垣夢乃

1. コロナ禍のスタート：現場のない活動

跡見「学芸員」in 菊坂は、菊坂跡見塾の所蔵資料を整理・調査といういわば学術的な活動を行うことを目的に2020年11月9日に活動をスタートした学生有志のグループである。学術的な調査活動を基礎に置きながらも、所蔵資料について菊坂跡見塾周辺地域の方へのインタビューなどを行うことからきっかけを作りつつ、菊坂跡見塾を活用した地域交流活動の企画も実施していきたいと発足当初は考えていた。

しかし、2020年11月に活動をスタートしたにもかかわらず、菊坂跡見塾での活動はすぐに中断してしまった。2020年12月から、新型コロナウイルス感染症流行の第3波(2021年1月にピークを迎えた波)の拡大期となったことを受け、菊坂跡見塾での活動を中止したのである。

その後も東京都では、緊急事態宣言(2021年1月8日～3月21日、4月23日～6月20日)、「まん防」(4月12日～4月22日)の発令があり、菊坂跡見塾での活動は思うようには進められなかった。さらには、本活動がキャンパス外で行っている課外活動であるということもあり11月以降の対面授業の拡大も菊坂跡見塾での活動への学生参加を難しくしてしまった。

このように跡見「学芸員」in 菊坂は、コロナ以前であれば現地での活動を共有することでメンバー間に培われる関係性、現場があることでアクチュアリティーを持つ活動の目的、それらがなくままに活動を継続してきたことになる。それが、人が集い、活動を共にすることを妨げられたコロナ禍に活動をスタートした本活動の特徴といえるだろう。



写真 資料整理の様子



写真 七夕のお礼に保育園児から送られたメダル

表1：跡見「学芸員」in菊坂の活動歴

時期	跡見「学芸員」in菊坂の活動
2020年11月9日	菊坂跡見塾で活動開始。
12月7日	菊坂跡見塾での活動を中止。在宅で調査成果の整理、『ゆかり』へ投稿する報告書の執筆に取り組む。
2021年1月20日	報告書原稿の入稿。 ※緊急事態宣言発令1月8日～3月21日
3月16日	山梨県立文学館での資料調査の企画立案。
3月23日	菊坂跡見塾で活動再開。
4月12日	菊坂跡見塾での活動を中止。山梨県立文学館調査も中止。 ※「まん防」発令4月12日～4月22日 ※緊急事態宣言発令4月23日～6月20日
4月22日	山梨県立文学館調査に向けた準備開始。菊坂跡見塾パンフレットの企画立案。
5月20日	菊坂跡見塾での七夕企画立案。
6月15日	七夕で上演する人形劇の準備着手。
6月21日	菊坂跡見塾での活動再開。七夕準備。
7月3日	感染状況悪化を受けて、七夕企画の縮小を決定。
7月7日	MIRATZ本郷第二保育園と連携して菊坂跡見塾にて七夕実施。
7月17日	菊坂跡見塾での活動を中止。 ※緊急事態宣言発令7月12日～8月22日
8月23日	菊坂跡見塾での活動再開。新メンバー募集に向けて準備開始。
9月2日	避難訓練企画立案。
9月14日	新メンバー加入。
10月2日	旧安田楠男邸を訪問し、文化財の防災について取材。
10月7日	文京区アカデミー推進課と菊坂跡見塾パンフレットについて交渉。
10月17日	山梨県立文学館にて樋口一葉資料調査。学芸員の方と交流。
10月20日	本郷消防署員の方に文化財の防災について取材。
11月23日	菊坂跡見塾にて一葉忌開催。メンバーもイベントへ参加。 ※11月2日より対面授業が拡大
11月24日	台東区立一葉記念館にて樋口一葉資料調査。学芸員の方と交流。
12月25日	シンポジウム「コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性」にてメンバー代表2名が報告。

2. コロナ禍の対応：点々としたつながりの構築

このようにコロナ禍に活動をスタートした跡見「学芸員」in菊坂の活動は、活動の基礎、メンバー間の関係構築がなされる前から新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けてしまった。さらには、当初考えていたような菊坂跡見塾に地域の方々を招いてのインタビューというようなこともコロナ禍では不可能である。これは本活動における地域交流的な活動の頓挫であった。

そこで、活動をスタートして最初の緊急事態宣言が発令されている期間内に、地域交流の方向転換を行った。それは、菊坂跡見塾に地域の方を招くという、いわば菊坂跡見塾を中心に地域へと浸透していくという方法から、少人数のメンバーでコロナ禍でもオープンしている民家園、博物館、消防署などの関係者を訪問しノウハウやつながりを獲得していくという多方面へ錯綜していく浸透の方法への転換であった。

それによって、菊坂跡見塾という文化財となっている建物への防災意識の醸成、自らの調査成果を広く公開していこうという博物館的意識の醸成に取り組んできた。コロナ禍に適応する形で醸成してきたこれらのノウハウと意識を活用し、いかに菊坂跡見塾を活用した活動ができるのか、それによってどのように菊坂跡見塾周辺地域の人々とながりを構築することができるのか、それが今後の課題である。

コロナ禍は、活動を共にする学生同士の関係、学生たちと活動拠点周辺地域の方々との関係という、コロナ前であれば活動の最も基礎となるはずの関係構築の営みそのものを揺るがした。跡見「学芸員」in菊坂は、その困難に対応する形で、さまざまな所に点々とながりを構築してきた。上述の報告内容がコロナ禍への緊急対応であったことは確かだが、ここには、基礎が揺るがされたままノマドとなった「地域交流」の活動がこれからどうなっていくのか／どうしていくべきなのかというコロナ後の課題が現れているように思われる。もし今回の試行錯誤をコロナ後にも参照可能な記録として残すことが今後なにかの役に立てば幸いである。



写真 樋口一葉資料閲覧の様子



写真 学芸員へのご挨拶の様子

コロナ禍での静岡県東伊豆町地域活性化事業における経験共有と今後

観光コミュニティ学部 観光デザイン学科 教授 塩月亮子
観光コミュニティ学部 観光デザイン学科 3年 土方あかり

1. はじめに

最初に、本稿は2.の「サッポロビール株式会社とのコラボレーション事業」を塩月ゼミ3年生で本プロジェクトの学生リーダーである土方が執筆し、それ以外は教員の塩月が執筆したことをお断りしておく。

静岡県東伊豆町とは令和1(2019)年11月19日に地域連携協定を締結して以来、2年と2カ月ほど経った。締結の年は塩月ゼミ19名の学生が稲取温泉をはじめとする東伊豆町の観光資源となる場所を視察し、その後の女性人材交流会（企業で活躍している女性による会社や仕事内容の説明会、および説明会参加女性社員と学生たちが東伊豆町の伝統文化「雛のつるし飾り」を一緒に製作する東伊豆町が用意したプログラム）にも対面で問題なく参加した（会場は昭和女子大学）。

しかしながら、翌令和2(2020)年はコロナ禍のため東伊豆町を1度も訪問することができず、学生たちは役場の方との昼休みを利用したオンライン会議やネット等の情報から東伊豆町の観光資源を想像し、地域活性化への提案をオンライン上で発表することしかできなかった。前年は行われていた東京の二子玉川高島屋や渋谷の東急百貨店での東伊豆町PR事業（雛のつるし飾りづくりや物品販売など）の手伝いも無くなり、学生たちは大変残念な思いを抱えていた。

令和3(2021)年も令和2(2020)年と同様の状態が続き、月に2回程度の昼休みのオンライン会議が11月頃まではメインであった。しかしながら、令和3(2021)年は東伊豆町役場のほうから「サッポロビール株式会社とコラボレーションをして東伊豆町の特産品を用いた新たな飲料のレシピを提案する」という具体的な目標をいただき、役所の方だけでなくサッポロビールの社員の方や一般社団法人東伊豆町観光協会会長・事務局長、稲取温泉旅館組合長、熱川温泉旅館組合長、JA伊豆太陽東部営農センター長、伊豆東ワイン支配人、東伊豆町商工会事務局長などに直接電話で学生たちがヒアリングを行ったり、オンラインミーティングにご参加いただき直接ご意見をうかがったりすることができた。

そして、コロナ禍が収まってきた令和3(2021)年の末、12月18日(土)～19日(日)の1泊2日にかけて、ようやく念願の東伊豆町でのフィールドワークが実施できた。本稿では、令和3(2021)年に行った「跡見×サッポロビール」のレシピ開発プロジェクトのこれまでの経緯や成果と、同年12月に行ったフィールドワークに関して報告をし、コロナ禍での経験共有のあり方と、今後の見通しに関して述べていく。

2. サッポロビール株式会社とのコラボレーション事業

今回、「東伊豆町×サッポロビール」というカクテルレシピでのコラボレーションを実現するにあたって、連携女子大学である我々は、令和3(2021)年の夏休みから現在に至るまで、本格的にこの事業に携わってきた。

まず、令和3（2021）年8月10日に行われた、東伊豆町の役場の方々や農協の方々への発表に向けて、パワーポイントを作成するために、カクテルレシピで最も重要な素材となる東伊豆町の特産物を中心にインターネット等で調べ、それらを踏まえた上で、今回のコラボレーション実現に向けてのアイデア・企画等を、各学年にまとめてもらった。特産品を活かすのはもちろん、東伊豆町の特産物である必要性やその裏付け、ターゲット層、それによって期待できる結果や波及効果なども合わせて考えた。東伊豆町という町の良さを伝えることや、町の課題解決にも繋がるように意識した。

また、令和3（2021）年の8月中旬に、下記の方々へのヒアリング調査も行い、現地の方々の声も反映させながら、カクテルレシピ開発を進めることとなった。

- ・ JA伊豆太陽東部営農センター センター長 野田政哉氏 1年 佐藤小春、4年 木之瀬雛子 担当
- ・ 伊豆東ワイン 支配人 安藤秀之氏 2年 有井花織、2年 川合慧 担当
- ・ 東伊豆町商工会 事務局長 山田将夫氏 3年 中北杏、3年 藤本彩 担当

令和3（2021）年9月15日には、東伊豆町の関係者各位の方々、サッポロビールの社員の方々との初顔合わせをZOOMにて行った。上記の方々からのヒアリング調査で得られた情報を含め、鈴木宏規氏、塩月亮子教授、学生、そして下記の方々からの様々なご意見・アドバイス等もいただき、さらに濃密な内容となるよう試行錯誤を重ねた。

沢山の方々のご協力のもと、ブラッシュアップしたパワーポイントを使用して当日のプレゼンテーションに臨み、自分にとって大変貴重な経験となった。

- ・ 熱川温泉旅館組合 組合長 / 熱川プリンスホテル 社長 嶋田慎一郎氏
- ・ 稲取温泉旅館 組合長 / 稲取東海ホテル湯苑 社長 瀧大輔氏
- ・ 一般社団法人東伊豆町観光協会 会長 / 二人の湯宿湯花満開 社長 石島専吉氏
- ・ 一般社団法人東伊豆観光協会 事務局長 山本利定氏

検討の結果、「いずのはる」という柑橘の特産品を使用したカクテルレシピに決定し、令和3（2021）年末に実施したフィールドワークでは、「いずのはる」の試食と、生産者である伊豆太陽農協の土屋明浩氏からお話をうかがうことができた。今回のプロジェクトを五感で感じる機会を得られたことは、学生たちにとって大きな一歩であったと思う。

今後の活動としては、令和4（2022）年の2月に、東伊豆町訪問又はサッポロビール本社にて、関係者各位の方々や学生のカクテルレシピ試作会の開催を予定している。そして、3月いっぱいまで開催される、「雛のつるし飾りまつり」の期間中に、完成したカクテルレシピを提供することが目標だ。約半年間取り組んできた今回のプロジェクトも最終段階に突入しているが、残り少ない期間さらにミーティングや意見交換を重ね、誰もが納得できる素晴らしいカクテルレシピの完成に向けて、メンバー一同、精進していきたい。

3. 東伊豆町でのフィールドワーク

令和3（2021）年12月18日（土）～19日（日）までの東伊豆町におけるフィールドワークに関して報

告する。参加学生は塩月ゼミ16名で、筆者（塩月）を含めると総勢17名の参加であった。我々は東伊豆町役場が用意してくれた車3台に分乗し、様々な観光地を視察し、ヒアリングを実施した。受け入れ側の方は、東伊豆町役場観光産業課 主任主事 鈴木宏規氏、主任主事 相原啓佑氏、農林水産振興係兼農業委員会事務局 加藤良太氏の3名で、大変お世話になった。なお、宿泊場所は年末ということと、さまざまな宿泊先を体験するという意図から、以下の5箇所に分かれて宿泊した（表1参照）。

表1 令和3（2021）年12月18（土）～19日（日） 東伊豆町訪問者名簿（作成：星野日和）

氏名	学年	宿泊先
塩月 亮子	引率教員	熱川プリンスホテル
石原 咲良	4	熱川プリンスホテル
木之瀬 雛子	4	熱川プリンスホテル
松田 絵美	4	熱川プリンスホテル
桑原 梨緒	3	石花海別邸海うさぎ
瀬田 瑞季	3	石花海別邸海うさぎ
藤本 彩	3	石花海別邸海うさぎ
渡辺 雪華	3	石花海別邸海うさぎ
土方 あかり	3	伊東園ホテル熱川
芦田 そら	2	東海ホテル湯苑
石川 華	2	東海ホテル湯苑
川合 慧	2	東海ホテル湯苑
毛利 蘭	2	東海ホテル湯苑
星野 日和	2	二人の湯宿湯花満開
三森 南	2	二人の湯宿湯花満開
佐藤 小春	1	二人の湯宿湯花満開
杉本 優乃花	1	二人の湯宿湯花満開

次に、行程を記す。

令和3(2021)年12月18日(土)

- ①9:30 各自で熱海駅集合→東伊豆町役場の方たちの車で東伊豆町へ移動
- ②11:30 伊豆アニマルキングダム訪問
 - ・伊豆アニマルキングダム 営業課長 村木恒弘氏による説明
 - ・伊豆アニマルキングダムでSNS用の素材収集
 - ・昼食（ホワイトタイガーとライオンを見ながら）
- ③13:30 土屋農園 柑橘類（いずのはる）調査
 - ・伊豆太陽農業協同組合 東伊豆営農業経済センター 柑橘共選場 場長／ 土屋明浩氏による説明

- ④ 14:00 細野高原 イベント広場見学・撮影（積雪のため頂上には行けず、途中で降りてスキの原っぱを撮影）
- ⑤ 16:00 ふれあいの森 展望台での稲取岬を一望できる写真撮影（写真1）
- ⑥ 17:00 熱川プリンスホテル、湯花満開、東海ホテル湯苑、海うさぎ、伊藤園ホテル熱川にチェックイン
- ・二人の湯宿湯花満開 専務 石島正和氏の説明
 - ・東海ホテル湯苑 営業 井上孝俊氏の説明
 - ・石花海 専務 定居宏康氏の説明
 - ・伊東園ホテル熱川 支配人 藤原征和氏の説明
- ⑦ 18:30 徳造丸魚庵で夕食 金目鯛の煮つけやクチナシで色づけした黄飯など、郷土料理を食す

令和3(2021)年12月19日(日)

- ① 9:00 旅館・ホテルでの朝食→チェックアウト
- ・熱川プリンスホテル 社長 嶋田慎一郎氏の説明
- ② 10:00 熱川バナナワニ園
- ・営業 山本友昭氏の説明
 - ・跡見学園女子大学の卒業生 岩崎(佐野)夏美氏の説明
- ③ 11:00 港の朝市、漁港直売所「こらっしえ」見学
- ・昼食は、朝市会場にて金目鯛の釜飯
- ④ 13:00 「雛の館」見学
- ・「女将の会」 稲取温泉旅館協同組合 村木友香氏など計4名の女将へのヒアリング（写真2）



写真1:「稲取ふれあいの森」での調査(2021年12月18日塩月撮影)



写真2:「雛の館」で女将にヒアリングする学生たち(2021年12月19日塩月撮影)



写真3:「雛のつるし飾り」製作風景1(2021年12月19日塩月撮影)



写真4:「雛のつるし飾り」製作風景2(2021年12月19日塩月撮影)

- ⑤ 14:15 「ニコニコ会」による「雛のつるし飾り」製作練習会(写真3・4)
・「ニコニコ会」 代表 齋藤美智子氏の説明
- ⑥ 18:00 東伊豆町役場の車で伊東駅へ移動・解散(「雛のつるし飾り」製作に時間がかかり遅くなったため、熱海までは行かず)

4. おわりに

以上、令和3(2021)年の活動のうち、主にサッポロビール株式会社とのコラボレーション事業の準備過程および東伊豆町への訪問に関して述べてきた。

コロナ禍が問題となる前は、学生のやる気を出させ、現地の雰囲気をつかむためにも、簡単な文献・ネット調査の後、すぐにフィールドワークを実施し、地域活性化の提案を行ってきた。しかし、コロナ禍となり、文献やネット調査はできたものの、現地には行けないため、やる気を持たせたり観念的ではないプランを提案させたりするには困難が生じた。しかしながら、訪問の見通しがたつてからは、やる気も増し、それを楽しみに電話でのヒアリングや文献・ネット調査に励む学生が多かった。また、東伊豆町役場の鈴木宏規氏が毎回出席してくださるオンラインでのランチミーティングが定期的に行われていたため、学生たちは現地とつながっている感覚が持て、モチベーションを維持していたようだった。

オンラインミーティングでの東伊豆町の観光資源や新たな飲料レシピの開発に関しては、主に学年ごとに発表を行ったが、1年生は人数も経験も少ないため4年生と一緒に発表準備をするなど、授業ではなかなか実施できない他学年との交流を図ることができた。

また、現地訪問の際はコロナ禍の心配が皆無ではなかったもので、マスクを必ずつけることとし、食事は黙食を原則とし、お年寄りや暮らす学生などは、1名でも宿泊できるよう、配慮をした。それでも、総勢23名の本事業参加者のうち、フィールドワークに行ったのは16名のみだったのは、都合がつかなかった学生もいただろうが、コロナ禍だから控えた学生もいたと推察できる。なお、東伊豆町は映画やコマーシャル等のロケの誘致にも力を入れており、今回のフィールドワークに参加できなかった学生のなかには、映画のエキストラなどで個別に東伊豆町を訪れ、東伊豆町を見て回った学生もいた。

今後は、フィールドワークで得たヒアリング内容や視察の結果などを踏まえ、令和4(2022)年2月に実施予定の女性人材交流会(企業で活躍している女性による会社や仕事内容の説明会と、それまでの東伊豆町の地域活性化案をまとめた発表を昭和女子大学・駒沢女子大学など、大学ごとに発表し合うプログラム)にも跡見学園女子大学として参加する予定である。また、令和3(2021)年は実施されなかった東京の二子玉川高島屋や渋谷の東急百貨店での東伊豆町PR事業がもし実施されれば、その協力も行う予定である。

令和3(2021)年12月の東伊豆町でのフィールドワーク実施を通し、やはり地元を訪れ、地元の人々とのface to faceの関係を持ったからこそ、学生はその地のファンとなっていき、また実現性の高い提案が可能となるのだということを実感した。たった2日間の現地訪問がその後の調査研究の大きな動機付けになるとともに、何カ月も行ってきたオンラインでの経験共有をはるかに超える経験共有を学生たちにもたらしたと考えられるのである。

コロナ禍だからできた「わたしの文京遺産」を発見する「まち歩き」ゼミ

河村英和

本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科に属する筆者が担当している「観光デザイン演習IA（＝春学期の3年生のゼミ）」では、コロナ禍中の2021年度の対面授業を、教室内での「密」を避けるために屋外で行えるよう、「まち歩き」を主軸にすることにした。文京区内の文化遺産的な観光資源を発見・発掘するための校外学習で、ちょうど土曜日の午前中の1限目にあたるので、このゼミの授業時間が終われば、そのまま各自まち歩きを続行するのも自由で、土曜日は「まち歩き」にふさわしい時間と空気が流れているのも良い。

「まち歩き」は隔週に行い、「まち歩き」をしない週、すなわち教室（またはオンライン）でゼミ授業を行う回では、「まち歩き」の下準備のネットリサーチと話し合いをした。学生にはあらかじめ『わたしの文京遺産』という題の書き込み用シートを配り、色々なタイプの「文京区のスポット」を授業時間中にできる範囲で、毎回少しずつ提案・記入してもらうようにした。シートには、コンテンツツウリズムに関わる「文京区を舞台にした文学作品・ドラマ・映画・アニメ・マンガ」という項目、文化財や歴史的建造物についての「文京区の建築（時代・ジャンルは自由）・宿泊施設・店舗・著名人の家・墓」という項目があり、各自が好きな事例を挙げて埋めてゆき、その度に参考文献・サイトも同シート内に載せてもらう。最初に取り組んだ項目は「文京区を舞台にした文学作品」だ。一人一作品ほかの人と被らないように、自分で探した小説を挙げ、ゼミの時間内に図書館でその本を借り、文京区の名や建物が出てくる箇所（ページ）を探し、後日発表してもらった。メンバー10名の彼女らが選んだのは、夏目漱石の『三四郎』『それから』『こころ』、森鷗外の『青年』と『雁』、樋口一葉の『にごりえ』（原書版と現代語訳版で分担）、永井荷風の『伝通院』、江戸川乱歩『D坂の殺人事件』、徳永直『太陽のない街』だった。

2021年5月22日、初の校外学習を行った場所は、コロナ禍のため同月末日から休業する老舗旅館「鳳明館」となった。文京区には、かつて下宿屋や旅館が数多くあったが近年次々と解体され、今も往時の姿を留めて残る貴重な歴史的建造物がこの鳳明館である。当日は9時に丸の内線本郷3丁目駅で集合し、明治の文豪たちが投宿した菊富士ホテル跡、赤心館（石川啄木、金田一京助の下宿）跡を経て、ま



図：2021年5月22日に3年生のゼミで訪問したときの鳳明館本館の玄関（右：ゼミ生の阿比留未帆さん撮影）とモザイクタイル装飾が美しい竜宮風呂（左：筆者撮影）－鳳明館の社長が迎えてくださり、館内各部屋の説明をしてくださった

ず鳳明館本館（1905年築、登録有形文化財）に到着し、社長から宿の成り立ちや、職人の腕の見せ所となった客室の設えについてお話をうかがった（図）。10時頃には鳳明館の森川別館（1956年築）に移動し、予約していた大広間で女将の大曾根美代子さんから、建築意匠の見どころを案内頂き、鳳明館の戦前と戦後の建物の違いを比較することができた。翌5月29日は教室でのゼミとなり、先週みんなが鳳明館で撮影した写真を披露し合っ、遊び心溢れる匠の技が生きた室内装飾や歴史を振り返った。

6月5日の校外学習では、再び本郷3丁目駅に集合し、本郷から湯島方面への「まち歩き」をした。今回はゼミ生が挙げた文学作品の舞台を辿るルートである。漱石の『三四郎』に出てくる雑貨店「かねやす」（閉業）と本郷中央教会（1929年築、登録有形文化財）、鷗外の『雁』の舞台となった麟祥院、無縁坂、東大鉄門、岩崎邸の堀、泉鏡花『婦系図』ゆかりの湯島天神、文豪たちも通った和菓子屋「藤むら」と牛鍋屋「江知勝」跡地のような文豪の足跡や戦前の文化遺産に加え、近現代建築のさかえビル（1934年築、登録有形文化財）、隈研吾設計のダイワユビキタス学術研究館（2014年築）、丹下健三設計の東京大学本部棟・第2本部棟（1979年築）、秀和湯島レジデンス（1969年築）、湯島ハイタウン（1969年築）、白梅ハイツ（1974年築）といった将来のヘリテイジ候補となる現代の建物、とくに高度経済成長期の1960-70年代建築も新たな文化遺産として注目し見学した。

6月19日は、本学茗荷谷キャンパスから小石川までのエリアを巡った。ルートは登録有形文化財であるお茶の水大学の複数の建物（1930年代）、重要文化財の旧磯野家住宅、占春園、小石川植物園に移築された『雁』の舞台でもある旧東京医学校本館、『太陽のない街』にでてくる小石川の印刷所や製本所のある路地、石川啄木終焉の地、滝沢馬琴の墓（深光寺）、関東大震災の復興建築である拓殖大学本館（1932年築）、旧東方文化学院東京研究所（1933年築）などである。6月20日に緊急事態宣言期が解除されたので、7月3日は、本学が所有する樋口一葉の通った旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）の見学日とした。出発点・本郷3丁目駅から向かう途中、江戸時代から続く金魚店、当時の井戸が残る一葉の菊坂旧居跡、銭湯「菊水湯」跡を経由し菊坂跡見塾に到着した。伊勢屋質店が収蔵していた生活用品や古文書研究を行っている新垣夢乃先生から、一葉との関わりや建物の解説を受け賜った。7月17日は、文京区の歴史を知るために不可欠なのは区の郷土資料館であるので、「文京ふるさと歴史館」を見学した。しかし開館が10時からなので、それまでの時間を使って「まち歩き」ができるよう、9時の後楽園駅集合後、荷風の随筆の題にもなった伝通院、幸田露伴・幸田文・青木玉が住んだ家、立花隆の猫ビル、えんま通りの震災復興後の商店建築、東京市営真砂町住宅（マンサード屋根の洋館2棟）、金田一京助・春彦の旧居跡、坪内逍遙旧居跡（炭団坂）、旧諸井恒平邸を経て、文京ふるさと歴史館に到着した。

校外学習と交互に行われる教室でのゼミでは、毎回先週の「まち歩き」のなかで、各自が最も気に入ったスポットの写真を提示してもらい、訪れた場所が映画やドラマのロケ地に使われていないかどうかを検証してもらう作業も適宜行った。その結果、数々の映像作品でこれらの場所がロケ地になっていたことが分かった。文京区の文化遺産を発掘する「まち歩き」を隔週で行う方式の授業は、秋学期の同メンバーの3年ゼミ「観光デザイン演習Ⅱ」へも引き継がれ、今度は自分たちで訪れたい場所を提案し、現地で自ら解説もできるようにレベルアップさせていった。『わたしの文京遺産』シートには、春学期の授業初回で文京区内の自分が「気になる場所・行ってみたい場所」を書いてもらう欄と、秋学期の授業終盤のときに感じた「好きになった場所・行ってみたい場所」を記入する欄がある。それがどのように変化してゆくのか楽しみだ。コロナ禍がなかったら、この「まち歩き」ゼミはなかったかもしれない、私たちはここまで文京区内の知られざるスポット・文化遺産を発見できなかっただろう。

「跡見学園女子大学附属心理教育相談所 無料講習会」活動から コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて

心理教育相談所 松崎くみ子 阿部洋子 酒井佳永 野島一彦 宮岡佳子 宮崎圭子 鈴木眞理
新井 雅 小栗貴弘 板東充彦 前場康介

跡見学園女子大学附属心理教育相談所は、地域の方々の精神的健康、家族や地域社会での人間関係の問題、不登校、いじめ、発達障害等について、臨床心理学とその関連分野の専門的な立場から心理相談業務を行い、地域社会に貢献することを目的として平成14(2002)年4月に開設された(山口豊一、2004、p1)。

また、「無料講習会」は、多くの方々に本相談所の存在を認知して頂くための活動の一環として平成15(2003)年度1月より「無料講習会 ～ここを癒す～」として開催された(山口豊一、2004、p30)のが始まりであり、令和3(2021)年度の現在まで続いている。

平成25(2013)年4月より、文京キャンパスのすぐ近くの茗荷谷交通ビルに、文京区における大学の社会貢献等のために「跡見ギャラリー」が開設され、5月より当ビルの2階に「心理教育相談所文京分室(ATOMIさくらルーム)」が開室された(平成28(2016)年9月からは、やはり文京キャンパス近く、現在のプライム茗荷谷ビル7階に移転)。これを受けて、翌平成26(2014)年度からは新座キャンパス(春学期)、文京キャンパス(秋学期)と2会場での開催が始まった。

開始から本年度までの開催の概要は表に示した通りである。初回から実施している、受講者の皆さんへのアンケートの結果からみられる傾向としては、女性の受講者が多く(75%～95%)、年代としては40代、50代～最近では50代～60代の方に多く参加していただいている。居住域は新座市、朝霞市を中心とした埼玉県、文京区の方が多く、地域貢献としての傾向を示す結果となっている。

心理教育相談所の活動、そして無料講習会の開催がコロナ禍の影響を受けたのは、令和2(2020)年である。令和2(2020)年1月16日、日本で初の新型コロナウイルス陽性感染者が報告された。その後の感染者の増加に伴って、卒業式が中止になり、令和2(2020)年度入学式も中止、授業開始も5月11日まで延期された。緊急事態宣言が出された4月7日～5月6日は、相談所は閉所とし、その間に一部遠隔を用いた事務作業、遠隔カウンセリングなどの体制を整えた。通常であれば春学期の間に開催される新座キャンパスで実施している無料講習会は、開催延期とした(令和2年度第3回心理教育相談所担当者会議 6月2日)。7月1日の緊急事態宣言解除に伴って、相談所は感染予防対策に配慮しながら部分的な開所とした。秋学期の授業形態が分散登校を中心として実施する方針が決まり、「対面」での授業も実施されるようになったため、秋学期からの無料講習会開催を決定した(令和2年度第4回心理教育相談所担当者会議 7月7日)。予定では春学期に新座キャンパスで5回、秋学期に文京キャンパスで5回の開催を予定していたが、春学期の開催を見合わせていたので、秋学期に新座キャンパスで5回、文京キャンパスで5回の対面での開催を広報した。しかし、感染拡大を心配する受講者もあり、受講者がいらっしゃらず、開催しなかった回もあった。結果として新座キャンパスで5回、文京キャンパスで2回の開催となった。延べ受講者数はコロナ禍の影響もあり、新座キャンパス67名、文京キャンパス4名、合計71名(内76%は再受講の方)となった。相談所の利用に準じた感染予防対策を講じ、制約の多い中での開催となったが、アンケートの結果からは、いつも通りのご満足をいただいた結果と

なっていた。

令和3（2021）年度は、4月の時点から分散登校の方針で「対面」での授業の実施もあったため、通常の無料講習会開催予定にならって開催することにした。令和3（2021）年度は、心理学部の教員数が11名であったため、春学期に新座キャンパスで6回、秋学期に文京キャンパスで6回の開催を予定した。現時点（令和3年12月）までの開催は、順調に行われている。

コロナ禍にあっても、ある程度落ち着いた状況の中では、しっかり感染予防対策をとって、対面での無料講習会を実施することは可能であった。しかし、感染状況によっては、ZOOMなどの遠隔会議システムを用いた講習や、映像配信を用いた講習も準備しておくことで、感染を心配する受講者や遠方から参加される受講者のニーズにも応えることが可能になると考えられた。このことは、コロナ禍が落ち着いた後も、有用な選択肢として、検討する必要があると考えられる。対面、遠隔、いろいろな方法のメリット、デメリットを検討し、よりよいサービスを提供できるようにしたい。

跡見学園女子大学心理教育相談所 無料講習会（テーマ こころを癒す）概要（2004～2020）

年	新座キャンパス	文京分室さくらルーム	延べ 受講人数
H16(2004)	一般対象 16回		445名
H17(2005)	一般対象 6回 教員対象（教育委員会との共催）4回		187名
H18(2006)	一般対象 8回 教員対象（教育委員会との共催）2回		119名
H19(2007)	一般対象 7回 教員対象（教育委員会との共催）3回		187名
H20(2008)	一般対象 7回 教員対象（教育委員会との共催）1回		36名
H21(2009)	一般対象 8回		50名
H22(2010)	一般対象 9回		117名
H23(2011)	一般対象 5回		201名
H24(2012)	一般対象 5回		106名
H25(2013)	一般対象 5回		99名
H26(2014)	一般対象 5回	一般対象 3回	122名
H27(2015)	一般対象 5回	一般対象 5回	257名
H28(2016)	一般対象 4回	一般対象 4回	193名
H29(2017)	一般対象 5回	一般対象 5回	361名
H30(2018)	一般対象 5回	一般対象 5回	373名
R1（2019）	一般対象 5回	一般対象 5回	313名
R2（2020）	一般対象 5回（開催を秋学期に延期して実施した）	一般対象 2回開催（5回予定）	71名

跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要 活動報告より作成

参考文献

- ・山口豊一 2004 はじめに 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要 1,1.
- ・山口豊一 2004 講習会報告 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要 1,30.

「新座市就学支援委員会 委員」活動から コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて

心理学部 松崎くみ子 宮崎圭子

臨床心理学の知識と技術を活用して、地域貢献できる活動のひとつとして、新座市就学支援委員会の委員として臨床心理学科教員2名が活動している。

新座市就学支援委員会条例（平成26年4月1日施行）によれば、新座市就学支援委員会は、障害のある児童、生徒及び就学予定者に対し、適正な就学に係る教育的支援を行うために（第1条 設置）、置かれている。また、新座市教育委員会の諮問に応じ、（1）児童等の障害の種類、程度等の判断に関する事項、（2）児童等の就学に係る教育的支援に関する事項 を調査審議する（第2条 所掌事項）。委員は31人以内をもって組織され、学識経験者、医師等、教育職員、関係行政機関の職員のうちから教育委員会が委嘱し、又は任命する（第3条）。その前提には、学校教育法施行令の一部改正（文部科学省平成25年9月1日施行）を受けた、インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育推進の報告における「市町村教育委員会が、本人・保護者に対し十分情報提供をしつつ、本人・保護者の意見を最大限尊重し、本人・保護者と市町村教育委員会、学校等が教育的ニーズと必要な支援について合意形成を行うことを原則とし、最終的には市町村教育委員会が決定することが適当である。」との指摘が掲げられている。さらに、埼玉県では、インクルーシブ教育システム構築に向け、障害のあるなしに関わらず、児童生徒が共に学ぶことを追求するとともに、教育的ニーズに応じた多様な学びの場を構築することを目指している。多様な学びの場としては、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校があり、交流及び共同学習などの仕組みも活用されている。

就学支援委員会では、保護者から提出された「就学相談票」「心理・発達検査結果等の写し」などをもとに、翌年の就学における12月上旬ころまでの就学先決定にむけて、就学支援委員が在籍の園・施設に出向き行動観察を行い、日常生活状況の把握をし、希望者を対象に、専門家による面談を実施した資料も加えて、就学支援委員会において就学先に関する審議が行われる。その結果をもとに保護者との面談によって合意形成を行い、最終的には本人・保護者の意見を尊重して、就学先が決定される。

委員としての活動は、年間9回程度実施される就学支援委員会に出席して、就学先決定に向けての意見を述べることで、就学相談委員会での審議の資料として、各園・学校訪問をして行動観察を行い、報告書類を作成すること、専門家として心理相談を受けたり、巡回相談を実施したり、その報告書類を作成すること、さらにその資料をもとに、委員会で報告し、意見を述べることなどである。

近年、特別な支援を求める児童生徒が増えていること、特別支援教育の考え方の広まりとともに個別の支援ニーズにそった学習環境を整えることへの意識の高まりなどから相談票の提出は増加している。また同時に、発達特性だけでなく、様々な、心理・社会的な要因の影響もあり、審議に要する時間も増加し、検討点も複雑になってきている。発達検査・知能検査結果の評価、発達特性の把握、心理・社会的な要因の把握など、心理臨床の専門家として求められる役割も大きい。

コロナ禍の影響を受けて、令和2年度、令和3年度は、第一回の委員会開催を6月に延期したり、委員会開催回数を制限したり、遠隔会議システムの活用をしながらも、すべての就学相談票をめぐって検討が行われ、就学先の決定が行われた。

II 新座市就学相談の流れ



「新座市就学相談のしおり」より

コロナ禍は、学校生活に大きな影響を与えている。しかし、子どもたちが、楽しく、安心して学校生活を送ることのできるよりよい環境を提供するためには、たとえコロナ禍の中にあっても、就学支援委員会の活動を止めることはできない。委員としては、感染予防に配慮して、なるべく学校現場に出向いて、現場での状況把握を心がけることの重要性を改めて感じた。

教育現場への、コロナ禍の影響は大きく、突然の休校、続く学校再開に伴って、厳重な感染予防対策、遠隔授業への対応、学校行事の中止や延期、子供たち、保護者、教員が、皆、体験したことのない状況への対応に追われ、混乱の中にあった。しかし、巡回相談のために学校訪問させていただくと、そこには、感染予防の衝立が準備されたり、消毒液が設置されたりと、いつもと違う景色の中にも、子供たちの元気な姿があった。「学校」の日常が展開されていた。校長先生はじめ先生方が、少しでも「日常」「普通」「安心」を提供することに配慮されていたのではないかと感じた。

就学支援委員会の役割は、一人ひとりの子どものニーズに沿った教育環境を提供することである。様々な検討要因が重なり、相反する状況が同時に起こっていて、その判断も複雑な場合も多い。その中で、児童・生徒本人の意向、保護者の方の意向を尊重して、丁寧に様々な決定がなされる風土が整ってきている。児童・生徒・保護者の方の意向を反映するためには、その声に耳を傾けることが大切で、心理臨床の専門性の活用が期待される。また、様々な複雑な状況を把握するためにも、発達検査、知能検査などの標準化された評価ツールの活用、取り巻く環境の心理・社会的な要因の把握など、心理臨床の専門性が貢献できる部分も多い。このような、心理臨床の専門性への期待にお応えできるよう、研鑽を積むとともに、異なる専門性の先生方への、わかりやすい説明も心がけたい。

文献

- ・新座市教育委員会 2021 令和3年度 新座市就学相談のしおり 「共に育ち、学ぶ」 よりよい就学に向けて
<https://www.city.niiza.lg.jp/uploaded/attachment/44915.pdf> (2022年1月10日閲覧)

コロナ禍における「跡見ひきこもり支援事業」の展開とその後

板東充彦

1. 経緯

(1) 協働の模索

本事業は、別項の「文京区ひきこもり等支援者連絡会」での交流から始まったものである。当連絡会で、文京区の民間ひきこもり支援団体であるサンカクシャ・青少年健康センターとニーズの共有を進める中で、2019年秋に大学と民間支援団体との協働の模索が始まった。筆者は、大学内での枠組みに関して地域交流センター長と、跡見学園女子大学附属心理教育相談所との連携に関して相談所長との協議を進めた。学外では、文京区社会福祉協議会を交えて協働の可能性を探った。

これらの協議を通して、大学には少なくとも3つの資源があることが確認された。①教室や体育館等の物理的資源。②教員や学生等の人的資源。③情報や理論の集積としての知的資源。これらの資源の活用は民間支援団体の利益となり、協働事業に参加する学生に対しては教育機会の提供となる。不登校・ひきこもりの方たちへの学生による家庭学習支援や、文京区における公共施設の相対的不足に苦慮する民間支援団体への本学体育館等施設の一時利用可能性などを検討した。この段階でコロナ禍の深刻さが増したため、協働の模索は中止または延期を余儀なくされ、計画は頓挫するようにも思われた。

しかし、遠隔会議システムを用いた検討を継続させることはできた。家庭学習支援の実現は困難となったが、サンカクシャより積極的な協働の申し出があり、共にその可能性を探ることとなった。

(2) 協働の実践

筆者が担当する学部3・4年生のゼミは「コミュニティ心理学」をテーマに掲げ、コミュニティを通じた心理支援の学びを目標としている。2020年7月、サンカクシャ・青少年健康センター・文京区社会福祉協議会の方たちが3年生のゼミに参加してくださり、地域支援の実践を学生に伝えた。8月、学生の反応と希望を確認しつつ「跡見ひきこもり支援事業」を開始し、同年秋学期からゼミ生の参与が始まった。

2. コロナ禍における地域活動

コロナ禍において地域活動は大きな制約を受けた。本事業では、当初計画していた学生による家庭学習支援は不可と判断された。安全に実施できる活動は、遠隔会議システムを用いた打合せや交流である。とは言え、世の中は「思うようにいかない」のがデフォルトである。望む通りには進まない社会で、関係者が粘り強く対話を続け、最善解を探るのが地域での協働であろう。支援や協働は、「できることから行う」のが王道である。サンカクシャと同様の姿勢を確認するとともに、学生にもこれを繰り返し伝えた。コロナ禍が明ける時も来るであろうから、それを見据えて今できることを進めていった。

不登校・ひきこもり支援は、「対象者に会わないと始まらない」のではない。支援や協働は、その事

象に関心を抱く関係者と接する時点ですでに始まっている。あるいは、その問題や対象者を思い描く時点で始まっている。ひきこもり支援では、本人に会えない場合に親面接を行うが、趣旨は同じである。「関係者との関わり」がすでに支援であるなら、遠隔会議システムを用いた協議はまさにそれに該当する。「コロナ禍で支援を行えない」のではなく、すでに支援が始まっていることを十分に意識することが重要である。

2020年11月、本学の授業形態の変更に合わせて、希望する学生によるサンカクシャの居場所の見学を開始した。居場所を訪れた学生は、利用者である10代を中心とした若者たちと実地で関わり、スタッフから指導を受ける貴重な機会を得た。その経験はゼミで報告・共有され、筆者は臨床心理学の立場から指導・教育を行った。この循環により、見学に行けない学生たちにとっても学びとなった。

感染状況によって、見学の可否は調整された。2021年4月以降は新3年生が支援への参加を希望した。心理支援はデリケートな要素を含むため、サンカクシャと筆者は折に触れて情報共有をし、安全かつ関係者それぞれに利益となる協働の方法の模索を続けた。2021年秋学期、コロナ禍はやや収まりを見せ、万全の対策を取ったうえでの学生の居場所訪問の機会は増えた。2020年度と比べて学生の延べ訪問回数は3倍を超しており、サンカクシャの新たな事業への参加も始まっている。サンカクシャからも「ボランティアとしてぜひ学生に関わってほしい」という声をいただいております、団体―大学―教員―学生間の調整を丁寧に行うことで、今後の展開も期待できそうである。

3. 総括

以上より、コロナ禍においては、「制約は生じるものの、地域活動を展開させることはできる」と言えよう。私たちが主に利用したのは遠隔会議システムであるが、システムが存在だけでは活動は進展しない。必要なのは、①コミュニケーションの継続、②可能な活動の模索、③それらを諦めない心、であろう。

コロナ禍のみならず、平時においても活動の「制約」は様々な形で存在する。その制約は、活動を進める自分自身の限界、共に活動を進める協力者あるいは対象者の特質、社会状況等から生まれる。コロナ禍は、その制約の一つに過ぎない。ただし、コロナ禍特有の困難があるとすれば、人々の孤立と分断を促進する方向への物理的制約が発生することである。そのため、協働して困難に立ち向かうことが難しくなる。そうであればこそ、この困難に対して真摯に向き合い、平時よりも意識的に協働を図り、状況の分析と有効な手立ての模索を根気強く行うべきであろう。ともに困難を乗り越えた結びつきは、コロナ禍が収まった後の地域活動にも強い推進力を与えてくれるに違いない。

コロナ禍における「文京区ひきこもり等支援者連絡会」の展開とその後

板東充彦

1. 経緯

文京区ひきこもり等支援者連絡会（以下、連絡会）は、2019年3月に開始された。東京都文京区において、様々な立場からひきこもり等の支援に携わる個人や団体が集うネットワークである。本学の心理学部教員や地域交流センター長の他、文京区教育推進部児童青少年課、文京区教育センター、文京区社会福祉協議会、公益社団法人青少年健康センター、NPO法人サンカクシャ等が参加している。開始後、他大学の臨床心理学教員や精神科医、地域の居場所を運営する団体、本学の臨床心理学専攻卒業生も加わり、会が発展している途上である。

会合は2,3ヶ月に1回程度、夜間に開催される。開始当初より、「どのような集まりにしようか」「持続可能性を考えて、負担は少なく、無理なくやろう」という点を共有しながらネットワーキングが進められた。第1回（参加者8人）・第2回（参加者11人）の開催場所は本学のキャンパスであった。その後は、各参加団体の場所を順に訪問しながらの開催となった。支援団体の現場へ行くと、対話のみでは得られない様々な情報を共有することができ、お互いをより身近に感じることができる。

連絡会で行っているのは、情報交換・近況報告である。どこにでもあるネットワークの風景だが、当連絡会の特徴は極めてざっくばらんな雰囲気である。なぜこのような雰囲気を作ることができるのか、という点はさらに考察が必要であろうが、「無理なく、楽しくやりたい」という想いが強く、それを言語的・非言語的に表明できるメンバーが集まっていることを理由の一つとして指摘できるだろう。

連絡会の進行に決まりはないが、全員が一人ずつ近況報告をしていくスタイルが多い。活動をめぐる愚痴や多忙さも、談笑と共に率直に吐露される。各団体の活動や方向性と共に、メンバーそれぞれの人となりが少しずつ共有されていく。会合の終了後は、二者・三者間で検討したい事柄や、支援・研究の協働についての立ち話が続く。2020年1月には新年会も開催された。

2. コロナ禍における文京区ひきこもり等支援者連絡会

その後、新型コロナウイルスが猛威を振るい、2020年3月に予定されていた連絡会は中止となった。私たちはそれぞれの現場でコロナ禍の対応に追われることになった。しかし、上記のように2019年度にネットワーキングは始まっており、1年の経過で相互理解と関係づくりは確実に進んでいた。そのため、連絡会を開催できない時期が続いたものの、会合を通じて知り合った二者・三者間の連絡は活発に行われていた。地域のひきこもり支援団体と大学との協働を模索する途上だったため（別項参照）、2020年7月に筆者は連絡会のメンバー3人に声をかけ、学部ゼミにオンラインで参加していただいた。物理的移动の必要がないという点では、ゼミへの参加は容易であり、依頼しやすくもあった。

コロナ禍におけるオンライン通信技術の習得も進み、2020年9月に遠隔会議システムを用いて第7回の連絡会を開催することができた。その後、連絡会は2,3ヶ月に1回のペースで開催され、2021年

12月現在で通算12回を数えた。参加者は口コミで徐々に増えていき、現在では20人を超えるメンバーで構成されている。オンラインでは、会合後に二者・三者で立ち話をする機会は残念ながら得られない。しかし、会合の空気感が変わらず、連絡会以外の場での交流は続いている。連絡会を顔合わせと情報共有の場として、ダイヤモンド（☆）型にメンバー同士の相互交流が進むというイメージで地域活動が展開中である。

3. 考察

連絡会のネットワーキングに関して、コロナ禍での対応と今後の展開について考察する。

（1）対面で構築された関係性の基盤

当連絡会は、コロナ禍以前に開始できていたことにアドバンテージがあった。2019年度の1年は短い期間だったが、結果としては十分な時間であった。この間に構築された関係性と相互理解をもとに、コロナ禍でもネットワーキングを維持・継続、そして発展させることができた。

（2）二者・三者間の交流

地域のネットワーキングには複数の効用があると思われるが、当連絡会は地域のハブの機能を果たし、ここを拠点としてダイヤモンド（☆）型に二者・三者間の交流が進む展開となった。これはネットワーキングの理想形の一つであろう。二者・三者間の交流はコロナ禍でも容易であり、その質は保たれるようだ。本連絡会では実践されていないものの、Zoomのブレイクアウト・セッション等の活用により、会合においても二者・三者間の交流の促進も可能かもしれない。

（3）コロナ禍における大学の技術的貢献

コロナ禍により、オンラインによる交流の可能性の模索が一斉に始まった。大学は、学生との円滑な通信を図って授業を行う必要に迫られた。そのため、地域の現場と比較して大学関係者のオンライン技術獲得は早く進んだように思う。従って、大学は技術的な面でもコロナ禍のネットワークを牽引する役割を担えると考えられる。

（4）オンライン通信のメリットとデメリット

ネットワーキングを進めるにあたっては、物理的移動をせずに顔合わせと情報共有ができるためにオンライン通信のメリットが大きい。他方、情緒的交流（親しみの醸成）が進まない可能性があることはデメリットである。当連絡会においては、オンラインの会合でも画面をオンにして笑顔で交流することが暗黙の前提であり、情緒的交流を進める意識の高いメンバーが集まっていることで、このデメリットは希釈されたと言える。

文京アカデミーの子どもワークショップの実践 —コロナ禍における地域活動の経験共有とコロナ後に残るものについて—

跡見学園女子大学文学部人文学科 茂木一司

跡見学園女子大学学生 高橋 杏

長岡造形大学大学院 竹丸草子

群馬大学教育学部准教授 郡司明子

はじめに

跡見学園女子大学の地域貢献事業として、連携している文京区の公益社団法人文京アカデミーの「子どもアカデミア講座」で「iPadでアニメーションをつくろう！」(<https://www.b-academy.jp/manabi/060351.html>)を実施した。コロナ禍での地域活動の体験レポートして、結果と省察を報告する。

最初に自己紹介になるが、長年勤めた群馬大学共同教育学部美術教育講座を1年前に退職し、本年4月より跡見学園女子大学文学部人文学科教授として勤務している。専門は図工や美術の免許科目を主に担当する美術科教育であるが、最近は美術科教育（学校教育としての美術教育）の外側（障害・福祉や美術館など）と連携した（広義の）アート／教育が社会の中でどんな役割を果たす（べき）なのかをワークショップ（参加体験型学習）を通して実践／研究している。

今回は、人文学科の小仲教授から依頼を受け、文京区役所内の文京アカデミーで担当の内藤祐子氏から組織や理念、活動内容を伺い、「子どもアカデミア」の実施方法などを打ち合わせた。同講座の説明には、「アカデミー文京では、夏休みに子ども向け講座、親子で参加できる講座を多数ご用意しています。子どもの感性を育てたり、知識を広げたり、どの講座も夏休みの思い出として、貴重な体験ができるものばかりである。対象は、文京区在住・在学の小中学生」ということだった。アカデミーは本校の他、お茶の水女子大学、中央大学、貞静学園短期大学、文京学院大学が参加し、哲学、工作（キャンドル、どろだんご、紙工作）、体育？、理科（天文、海そう、人工イクラ）、数学、プログラミングとアニメ（茂木）の13の多様な講座が準備され、それぞれ10～20名程度の定員で募集している(<https://www.b-academy.jp/manabi/pamphlet/>)。

1. 「iPadでアニメーションをつくろう」ワークショップ（小学生20名、90分）のプロセスと結果

講座内容は初対面で異年齢の児童の参加を考えて、①協働でできるものでコミュニケーションを学び、主体的な学習ができる、②美術に必要な絵を描くスキルのようなものが不要で誰でも楽しめる題材の2つを考慮し、「iPadでアニメーションをつくろう」に決定した。参加者募集には、「みんなアニメは好きですね。でもつくったことのある人はいますか？ この講座では、どうして絵やものが動くように見えるのかを実際にアニメづくりをとおして学びます」と伝え、テレビなどで見るアニメをコマドリアニメーションという方法を使い、実際につくることによって、静止画が連続すると動画になることを理解し、ヴィジュアルカルチャーの一方的な受容者にならないことを目的にした。



アイスブレイクの場面



説明の場面



アニメ制作の場面



アニメ発表会の場面

○導入は、コロナ対策の注意事項から始めた。協働なのでどうしても騒がしくなってしまうが、最初に段取りや役割分担を決めて動くことによって距離を多少とっても対話や交流ができることを伝えた。

最初の活動はアイスブレイクとして、円になって座り、バースデーチェーン（誕生日順に席を並び替える）をした。参加者全員が自主的に活動することを目的にしていたが、結果として参加年長者の6年生が1人で仕切る活動になってしまった。コロナ禍の中で子どもたちが萎縮していたのか、今後のワークショップ実施の上で参考にしたい。

○次に、今日も目標として、「いいアニメの作品づくりではなく、みんなで協力して、意見が違ってても辛抱強く話し合ってね。頭だけでなく体を使ってやってみて考えてね」というワークショップ学習の意味を伝えた（どれだけ伝わったのかは不明？）。

○グループは4人×5グループで、「iPadを操作するディレクターを中心に撮影をしてください。最初に大まかなテーマなどを話し合ってから作業に入ること。2回制作するので、2回発表します」と伝えた。

○アニメ制作のポイントは、物語づくりに偏りがちなのを「コマドリによる動きの面白さ」に注意して制作することを参考作品の鑑賞とともに伝えた。

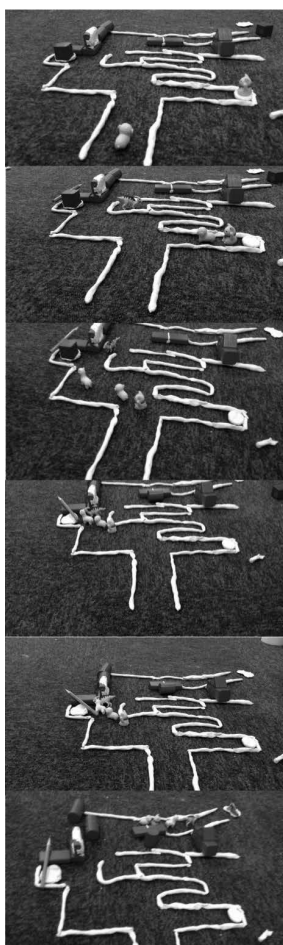
2. コマドリアニメ製作の結果

グループごとに多様なプロセスでアニメができた。代表的な3つを紹介する。

・グループ①（ファシリテータ：高橋杏）

題名「迷路」

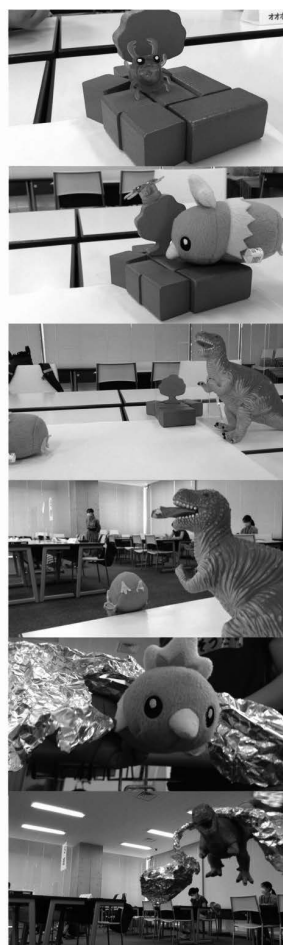
最初は、初対面同士だった事もあり4人グループの内2人が強くチームの方針を決めていた為、他の児童は見ているだけであまり一体感は無いスタートだった。しかし、最年長が中心に入り、全体をフォローしながら進行してくれたおかげで徐々に4人が打ち解け合い、見ているだけだった児童も参加して4人で一体となって制作していた。制作では、お互い持って来た材料同士を組み合わせさせて使おうと話合い工夫していた。2つ作品を作る予定だったが、この班は1つ目の作品のクオリティを上げたいと時間ギリギリまで使って続きを制作していた。後半は補佐だった私の存在を忘れるほど4人の世界に没頭し集中して楽しんでいた。



①「迷路」



②「新幹線が落ちる」



③「食物連鎖」

・グループ②（ファシリテータ：竹丸草子）

題名「新幹線が落ちる」

低学年3名と、高学年1名のグループだった。1回目の制作は持参したレールを組み立て、電車が走る間に雪が降ったり、果物が線路に突然出てきてぶつかり、パカッと割れるなどの作品を作った。電車が走る時に何が起こると面白いのかを考えて、自分が楽しいと思うアイデアをどんどん出し、他の人もそのアイデアに乗るように物語は膨らんでいった。だんだん打ち解けてきて、2回目の制作時にはなんと電車が崖下に落下して吊り上げるという展開になった。吊り上げる方法が難しく、全員で「あれはどうだろう？」と声を掛け合い、様々な物や方法で何回もチャレンジしていった。結果、自分達の納得する作品ができあがったようだ。「難しいけど、どうにかして吊り上げたい！」という想いが、初対面とは思えない連帯感を生み出し制作における協働を引出していた。誰か一人が指示するのではなく自分なりのリーダーシップをそれぞれが発揮できていた点が素晴らしかった。

・グループ③（ファシリテータ：郡司明子）

題名「食物連鎖」

4人の男児（6年生、4年生、2年生2名）グループで、上学年の2人が中心になり、各自やりたいことを出し合って、互いに調子を合わせながら活動が展開していた。下学年の2人も全体をよく見て、自分にできることを探して積極的に動き、制作に貢献した。互いの声（どうしたいのか）にもよく耳を傾け、共に考え、折り合いをつけていく。自分を押し過ぎず、さりげなく主張する「技」を持つ人も。各自持ち寄ったキャラクターを出し合ったら、恐竜が小動物を襲うストーリーに。さらなる恐竜の旅が続き、やがて異次元に入り込みウルトラマンの世界へ。最終的に皆の持ち物を十分に活かし合う物語の展開となり、それぞれの「もの」=各自の存在を認め合い、アニメーション（命を吹き込む）として生きる世界を共有したことから満たされた笑顔が生まれていた。

3. まとめにかえて

コロナ禍の中での対面ワークショップなので、大騒ぎにならないように注意を払った。子どもたちもこの状況に慣れていて、大きな問題は起こらなかった。しかし、映像メディア制作ワークショップなので、アイデア出しや制作中の協働、そしてふり返りなどの中では対話が重要になるので、いい作品を作ろうと焦ってしまわないでグループの中で納得するまで十分話し合いをし、少数者の意見も大切にしてほしいことを説明の中で伝えた。それでもものづくりワークショップはものとの対話が進み、新しいアイデアがどんどん出てくるにつれて場が熱くなってきて、楽しい学びになっていった。グループに1人ファシリテータがついていたので、直接指導するような場面はなかったが、安全性も含めてきちんと場がホールドされ、無事に最後まで創作活動は継続できた。

第2回「文^{ふみ}の京書道展^{みやこ}」開催報告

文学部人文学科教授 横田恭三

1. はじめに

芸術文化に関する全学的な活動は決して多くありません。学内における文化部の数少ない発表の場として「ゆかり祭」がありますが、これ以外は個々のサークルによるイベントが中心となります。本学を会場とする「朗読コンテスト」は広く学外の方々の参加を得て、大きな芸術文化活動の1つとして定着しています。しかし、書道・美術などのような作品を発表する場は極めて少ないといってもよいでしょう。

とはいうものの、かつては花溪記念資料館で実習授業の成果を発表する機会がありました。美術科ではテンペラによる実習作品、書道科では八つ切りサイズの創作作品を簡易表装して展示していました。しかし、セメスター制が施行されてからは全ての授業が半期で完結することになり、書道実習では大きな作品を制作することが難しくなりました。そこでこの企画に変えて「跡見OG書道展」を開催することにしました。OG書道展では花溪記念資料館の全面的なバックアップを受けて、今日まで順調に歩み続けてきました。コロナ禍で中止とせざるを得なくなった昨年と今年の2回を除いて、すでに13回目を数えています。このようにOG展は比較的順調に回を重ねてきていますが、本学学生の文化的活動はなかなか順風満帆にはいかなかったというのが偽らざる実感です。

2. 夢と消えた中国広州美術学院との文化交流

2011年、中国の広州美術学院の書道科教員 祁小春教授より大学間で展覧会を中心とした文化交流を企画しませんかとのお願いを頂きました。このことをきっかけに、本学で企画を練り上げ、正式に協定を結ぶことができました。翌2012年4月、文化交流のための組織を立ち上げ、広州美術学院にて書道・美術の作品展示ならびに研究発表という3部門において文化交流ができるように準備を進め、全学的に参加希望を募りました。半年以上かけて、作品、研究発表それぞれ学内選考を開き、入賞した作品を事前に広州美術学院へ搬送し、翌年3月の会期中に本学の代表者（各部門2名ずつ計6名）を広州へ派遣するという計画でした。ところが9月、野田内閣（民主党）の時でしたが、尖閣諸島の国有化を閣議決定した結果、中国が猛烈な反発をし、日中関係が最悪の状況に陥ってしまいました。数ヶ月経っても状況はいっこうに改善されないため、翌年1月初めになって遂に3月の派遣を断念したという経緯があります。以後、この企画は残念ながら立ち消えとなりました。

3. 文京区との連携

4年前の話になります。たまたま文京アカデミー主催のアカデミア書道講座を何年か続けて担当して

おりました。大学は文京区との連携を強く模索していた時期だったこともあり、当時の内山相談役より「文京区と連携してほしい」「書道展を開催してはどうか」という打診がありました。私としてはこれまで在校生の発表の場を企画しながらも、なかなか継続できませんでしたので、大変有り難いお話であると感じました。しかし、本学の学生と文京区民との連携を意識した場合、どのような企画が可能なのか、実のところ悩みました。そこで思いついたのが文京区民を対象にしたアカデミア書道講座の方々の作品と本学の学生の作品を一堂に展示する企画でした。こうしたコラボならば、相互に作品鑑賞ならびに研鑽を積むことができるのではないかと考えたからです。この方針のもとに、さらに首都圏の高校生や海外の学生らの作品を招待することができれば、たとえ展示総数が少なくても内容の濃いものになるだろうと確信しました。一昨年ついに「文の京書道展」を開催し、本学学生・文京区民・首都圏の高校生・海外の学生および教員の作品を一堂に展示することができました。

毎年、書道展をコンスタントに開催し、軌道に乗せていきたいと考えていた矢先、今度はコロナ禍により、昨年度は残念ながら中止となってしまいました。

4. 第2回「文の京書道展」開催にあたり

この「文の京書道展」は一般にいう地域交流というよりも、文京区民と本学の学生の作品を通して行つた書道文化交流の一端だと考えています。前述したように、これは文京アカデミア講座が発端となっています。したがって、文京アカデミーのバックアップを受け、アカデミア書道講座に参加した文京区民の方々の作品と本学学生の作品を同時に展示する合同書道展といえるでしょう。

展示期間は、令和3年の7月上旬～中旬の10日間程度を予定していたのですが、コロナ禍の関係で7月8日(木)～7月25日(日)までの18日間に延長され、文京シビックホール[※]の地下1階にある展示スペース「アートウォール・シビック」にて開催されました。作品は、本学学生と教員の作品14点、高校生の招待作品4点・海外の招待作品2点および文京区民や本学教職員の手になる「コロナ禍の終息を願う書」約50点です。高校生の招待作品も第1回が4校(東京2校、埼玉2校)でしたので、今回は6校を目標にしました(結果的には前回と同様に4校でした)。



文の京書道展 ①



文の京書道展 ②



文の京書道展 ③



文の京書道展 ④

この展覧会の目的は、①文京区民との連携・協働による生涯教育推進及び社会貢献 ②本学学生および文京区民の書の表現力と鑑賞力の向上 ③首都圏の高等学校への教職課程（書道）の認知。以上、この三つを掲げています。本学学生の作品については当初20～25点を想定していましたが、対面とオンラインとの併用授業の影響から思うように勧誘ができず、結果的に作品が集まりませんでした。また書道の盛んな首都圏の高校に依頼しレベルの高い作品を出品してもらいましたが、高校側もコロナ禍でしっかりした指導が出来ないこともあってか、参加の意思を表明していたにも関わらず、結局は出品を断念せざるを得ない高校もありました。海外の大学の参加については、たとえ思想信条は違っても同じ漢字文化圏の学生や教員が書いた作品を鑑賞することで、参観者に何かを感じ取ってほしいと願ったからです。第1回目は広州美術学院の教員と学生の作品を展示、今回は北京第二外国语学院へ依頼しました。いずれの教員も、私がかつて北京に研究留学していた際に交流を持った方々でしたので、メールで依頼すると快く応じてくれ、すぐにEMSを利用して作品を日本へ送ってくれたのでした。

次に、例年5月～6月に開催している〈文京アカデミア講座〉の方々の作品を展示する予定でしたが、緊急事態宣言下で講座そのものが中止となってしまいました。書道展の目的の1つに、「文京区民との連携・協働による生涯教育推進及び社会貢献」を掲げている以上、まったく文京区民の方々の参加がないことは何としてでも避けたいと考えておりましたところ、地域交流課の貴堂さんが〈跡見菊坂塾〉を訪れた方々に「コロナ禍終息を願う書」を自由に揮毫してもらおうというアイデアを出し、全面的に進めてくれました。このほか、本学の教職員の皆様にもやや無理を言って揮毫してもらいました。協力してくださった方々には心から感謝申し上げます。

5. 出品者・作品名リスト（敬称略）

ここで出品者と作品名のリストを紹介しましょう。

〈跡見学園女子大学〉

臨 吳昌碩〈行書五言律詩〉	人文学科四年	加藤佑夏
臨 米芾〈蜀素帖〉	人文学科三年	松田亜美

臨 〈石鼓文〉	人文学科三年	秋庭愛実
創作「暇」	人文学科三年	大津彩葉
創作 古今和歌集「むめのかを そでにうつして とめたらば はるはすぐとも かたみならまし」	現代文化表現学科四年	田中李沙
臨 顔真卿〈多宝塔碑〉	人文学科二年	福井夏実
臨 〈関戸古今和歌集〉	人文学科二年	中島礼乃
臨 金農〈臨西嶽華山廟碑〉	人文学科一年	林田美咲
臨 鄭道昭〈鄭羲下碑〉	人文学科一年	宮崎愛実
創作「茶香帯雪浮」	マネジメント学科一年	宮田真尋

〈高等学校の招待作品〉

臨 〈九成宮醴泉銘〉	日本大学高等学校三年	大隅芽依
臨 〈始平公造像記〉	板橋有徳高等学校一年	久保田瑛愛流
臨 〈祭姪文稿〉	星野高等学校三年	新 あい子
臨 米芾「苕溪詩卷」	大宮光陵高等学校三年	大山ひな乃

〈海外の招待作品〉

創作 自作詩〈元宵題木棉〉	広州書画院	羅 柄生
創作 「為此春酒 以介眉寿」	北京第二外国語学院教授	常 耀華

〈書道科教員賛助出品〉

創作〈何景明詩〉	文学部兼任講師	伊藤亜美（亜穹）
創作「本名はとんとわからず草の花」（夏目漱石の句）	文学部兼任講師	森岡 隆
創作「五言律詩」（文同詩）	文学部兼任講師	津田好一（貞蔵）
創作「飄若遊雲 激如驚電」	文学部教授	横田恭三（閑雲）

〈文京区民ならびに本学教職員の作品〉

「コロナ禍の終息を願う書」 半紙もしくは半紙2分の1程度の用紙に自由な語句を記した約50点以上を展示しました。		
--	--	--

まとめに変えて

この企画は文京区へ本学の存在をアピールする良い機会ですが、いくつか検討しなければならない課題も見つかりました。展覧会終了後、地域交流課の担当者とTeamsによる会合を開き、「文の京書道展」を総括する機会を持ちました。地域交流課の貴堂さんがまとめてくれたものを以下に掲げます。

- ・この展覧会のコンセプトは初回から下記の3点に凝縮される。（開催要項より）



伊勢屋を訪れて揮毫する区民

1. 文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献
 2. 関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程（書道）の認知
 3. 文京区民に対する本学学生の書を鑑賞する機会の提供
- ・このため、文京区アカデミア講座受講生作品を中心にしつつ、本学教職課程関連の科目受講生作品に加え、海外作家および国内実力校生徒作品の招待。さらに本学教職課程教員作品の展示を通じて、レベルアップを図ってきた。
 - ・時事的な話題性ももともと、初回は「令和」への改元にあたり、「令和」をテーマに各方面から「書」を集め展示した。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により実施を見送ったが、令和3年度は、「コロナ禍終息を願う書」をテーマに実施した。

以上が展覧会の展示に関する総括になります。

次に今後の方針について、以下の3点に集約しました。

1. 文京区アカデミア講座受講を引き受けるかどうかとは別に、上記コンセプトの展覧会を継続したい。
2. 文京区の協力を求めつつも、当書道展が掲げている目的は今後も維持したい。
3. 会場が展示に不向きであることは、改善を要望するが、現行の会場でも最低限、実施可能である。

最後に記した3について補足しておきます。会場は通路を兼ねたオープンスペースの関係で、そこを通行する人によって故意ではないもののちょっとした不注意で作品に触れてしまう危険性が排除できません。本来ならば、別に一室確保してもらうのがベストではありますが、それらの展示可能な会場は文京区民の申し込みが優先されるため、我々にはなかなかチャンスが巡ってきません。この点を解消できるかどうかが喫緊の課題となっています。

最後になりましたが、これまで地域交流課の絶大なるサポートをいただき、ここまで歩みを進めていくことができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

「ポストコロナの自転車にやさしい道路のつくり方」 開催の報告

坪原紳二

埼玉東上地域大学教育プラットフォーム4校共同公開講座「新型コロナウイルス危機を生きる～正しい知識と対応」の一部として、跡見学園女子大学では2021年9月25日に「ポストコロナの自転車にやさしい道路のつくり方」というタイトルで公開講座を開催した。新型コロナウイルスの影響で全面オンラインでの実施となり、30名ほどが参加した。

本講座では大きくは、①自転車の効用、②日本における自転車走行空間の現状と政策、③オランダにおける自転車走行空間の現状と政策、と三つの部分に分けて講演を行った。

①では、自転車についてしばしば言われている、環境に負荷を与えないこと、健康に良いことなどに加えて、経済にも貢献することを、自転車道整備後に商店街の売上が大きく伸びた事例、あるいは自転車にやさしいまちであることをシティマーケティングの柱に据えている都市があることを示して解説した。さらに自転車は、コロナ禍において三密を避けつつ比較的長距離を移動できる交通手段であり、また在宅勤務、在宅学習下での運動不足を手軽に補うことのできるスポーツの道具でもある。こうした点から世界的に自転車がブームとなっていることを、日本、フランス、及びアメリカの自転車売上データを示しつつ解説した。そして、ポストコロナにおいてもある程度の感染症対策を取り続ける必要があることも考慮すると、今の自転車ブームを維持し、さらには拡大することが重要で、そのためには質の高い自転車走行空間を整備する必要があることを唱えた。

②では、まず日本の現状として、自転車の歩道走行が一般化していること、それと符合して自転車走行空間も圧倒的に歩道上に整備されてきたことを解説した。しかし2000年代に入ってから、自転車・歩行者間の交通事故が問題視されるようになり、2007年には警察庁が「自転車安全利用5則」を出し、その筆頭に「自転車は車道が原則、歩道は例外のみ通行可」を掲げた。そして、自転車を車道に出す際の、自転車の走行空間のデザインに関して、国土交通省と警察庁が2012年には『安全で快適な自転車利用環境創出ガイドライン』を出し、さらに2016年にはその改訂版を出した。講座ではこのガイドラインの内容を、特に日本で多用されている「車道混在」に焦点を当て、走行状況を示すビデオも交えつつ解説した。そして、この整備形態では、決して自転車走行空間の改善にはつながらないこと、むしろ自動車利用に回帰してしまう可能性を指摘した。

③では、まずはオランダにおける伝統的な自転車走行空間である、自転車道と自転車レーンのデザインガイドラインを説明した。日本よりも広い幅員を求めていること、特に2人並んで走れるだけの幅を求めていること、また自転車利用者の走行空間に対する評価をデザインの基準にしていることを指摘した。さらにオランダの朝の通勤・通学風景を映したビデオを見せ、自転車道利用時のマナーや、車道との交差部分の処理についても解説した。

引き続き、オランダにおける第3の自転車走行空間として近年急速に整備が進んでいる、フィーツストラート (fietsstraat) を紹介した。これは幹線道路沿いではなく、住宅地内に整備される自転車の幹線ルートで、あくまで自転車優先であるが、車の走行も許される道路である。大きくは、両側の路側帯

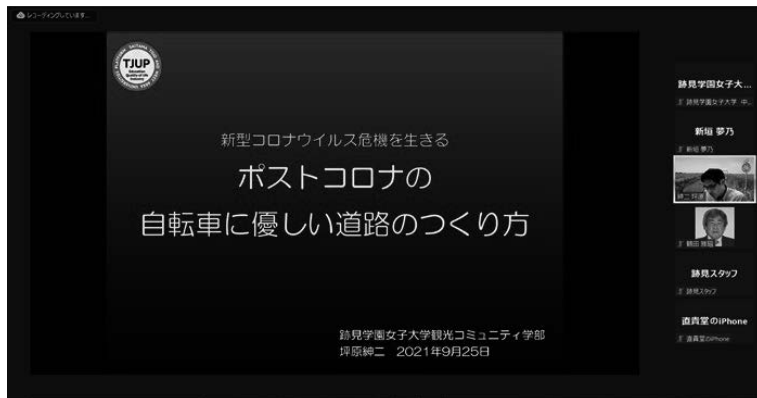


写真1：公開講座当日の様子



写真2：埼玉県内の事例紹介の様子

と中央の車道からなる狭幅員タイプと、これに中央分離帯が加わった広幅員タイプがある。2000年代初頭に整備された、まだデザインを模索している段階のフィツストラートも含め、両タイプのフィツストラートを、スライド、ストリートビュー、及びビデオを使って紹介した。さらに試行錯誤を経て、現在示されているフィツストラートのデザインガイドラインを解説し、実際に日本で適用した場合のイメージを文京区内の道路を例に示した。

最後にポストコロナにふさわしい、自転車にとって真に快適な道路空間をつくるためには、今の道路のつくり方を抜本的に改める必要があり、そのためには市民が自由に道路のデザインについて考え、提案していく必要性を訴えてまとめた。

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（2）

磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優理・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・
 黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曾根南美・渡辺恵未・渡邊菜月

1. 本稿の目的

「跡見「学芸員」 in 菊坂」は、2021年3月に「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」を執筆し、2020年11月に実施した56点の菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果を報告した（新垣・大櫛・菊地・末吉ほか 2021）。本稿では、2020年12月以降に継続して行った菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果について報告することが目的である。

2. 調査の概要

本報告を執筆するにあたって、16名（教員1名、4年生2名、3年生5名、2年生6名、1年生2名）のメンバーで菊坂跡見塾所蔵資料調査を実施した。

表1：調査メンバー一覧

新垣夢乃（跡見学園女子大学地域交流センター助教）	末吉はづき（同 文学部人文学科 4年生）
菊地春姫（同 文学部人文学科 4年生）	伊藤奈々（同 マネジメント学部マネジメント学科 3年生）
清水麻衣（同 文学部人文学科 3年生）	黛沙也加（同 文学部人文学科 3年生）
山岡沙織（同 文学部人文学科 3年生）	渡辺恵未（同 文学部人文学科 3年生）
大櫛優理（同 文学部人文学科 2年生）	服部胡桃（同 文学部人文学科 2年生）
松延咲季（同 文学部人文学科 2年生）	水村美穂（同 文学部人文学科 2年生）
森本千桜（同 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 2年生）	渡邊菜月（同 文学部人文学科 2年生）
磯田みずき（同 文学部人文学科 1年生）	若曾根南美（同 文学部人文学科 1年生）

今回、報告するのは、2021年3月23日から2021年11月8日の期間に実施した菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果となっている。

3. 調査方法

今回の調査にあたっては、2020年度から継続して菊坂跡見塾内の「座敷」に所蔵されている資料から調査を開始した。調査期間の途中で「座敷」の調査が終了したため、続いて隣接する「茶間」の調査に取り組んだ。調査に際しては、資料に資料番号を付したタグを取り付け、それぞれの資料について情報

カードを記入、その後資料を撮影し、EXCELにてデータ入力を行った。

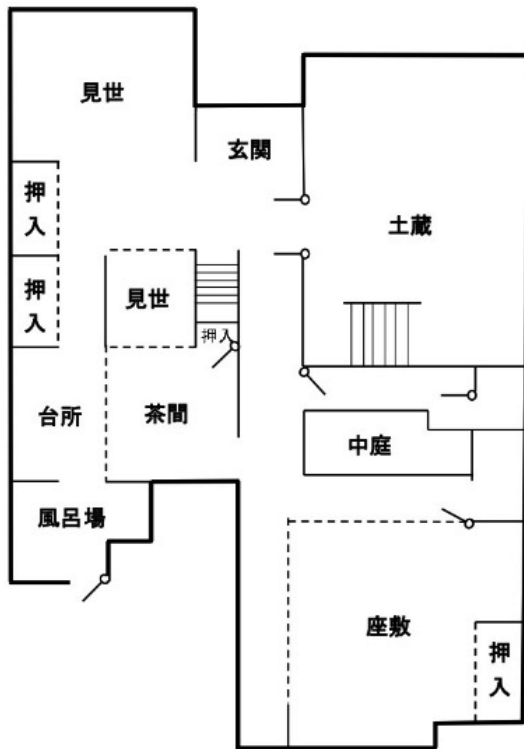


図1：菊坂跡見塾1階の見取り図

菊坂跡見塾資料調査情報カード					記入日：2020 年 月 日	
資料番号						
ふりがな					点数	
名称						
法量	縦	横	高	径(φ)	c m	
材質	植物	紙	木 ()	竹	他 ()	
	土石	土 ()	石 ()	セメント	ガラス	陶器 磁器
	金属	鉄	銅	鋳	青銅	真鍮 アルミニウム ジュラルミン
		ステンレス	銅合金	他 ()		
	合成樹脂	プラスチック	セルロイド	ゴム	ビニール	ナイロン 他 ()
	その他					
時代	作成・使用				年代	
項目分類				形態分類		
収蔵場所						
作者						
備考						
記入担当						
写真撮影 ☐ カード確認 ☐ データ入力 ☐ 再調査 (要 ・ 不)						

表1：菊坂跡見塾調査情報カード

4. 調査結果

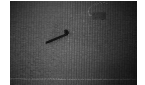
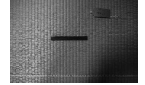
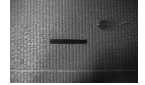
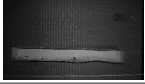
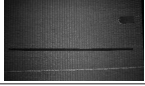
2021年度の調査では、120点の資料を調査することができた。

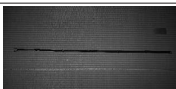
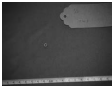
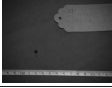
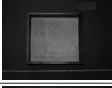
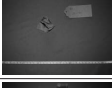
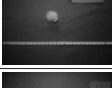
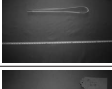
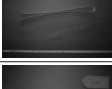
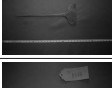
今回の調査では、旧伊勢屋質店を営み、そこを生活の場ともしていた永瀬家の生活の一端がうかがえる資料が多くみられた。2020年度の調査では複数の長唄本などが確認されていたが、2021年度の調査では「結櫛」や「紙縫り」、「鏡台」などの化粧道具が確認されている。これらは、かつての永瀬家の女性たちの生活の様子をうかがわせる資料であり、当時の女性の生活にアプローチする際の具体的な資料となり得る可能性を持っている。

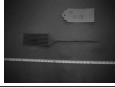
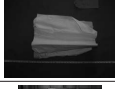
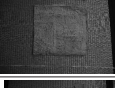
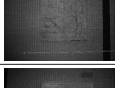
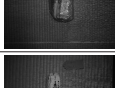
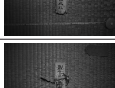
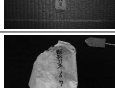
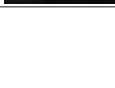
また、2020年度の調査では竿ばかりや分銅などが確認されていたが、2021年度の調査では年度毎にまとめられた大量の「揚げ札」（質屋に訪れた個々のお客さんの氏名、預け品、貸した金額、預けた年月日などが記載された札）が確認されている。これは、旧伊勢屋質店の経営についてアプローチする際の資料である。

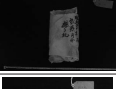
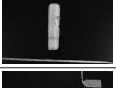
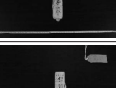
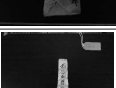
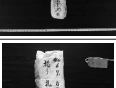
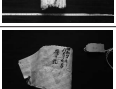
このように、同じスペースから生活や経営の資料が確認されたことから、旧伊勢屋質店が職住一体の場であったことがうかがえる。2021年度の調査で確認された「ふすまの裏紙」や「ハタキ」などの生活用具には、旧伊勢屋質店の揚げ札が使用されており、これらの襖の裏紙やハタキは旧伊勢屋質店での暮らしの特徴をあらわしているといえる。

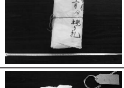
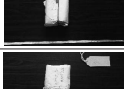
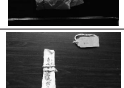
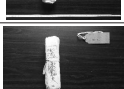
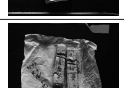
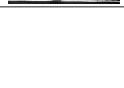
表2：調査資料目録

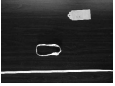
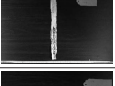
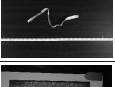
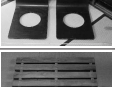
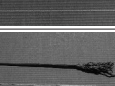
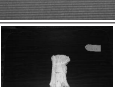
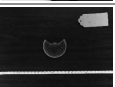
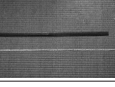
資料番号	名称	ふりがな	点数	法量	材質	備考	写真
44	こけし		1	縦25× 径6.6cm	木	濃い茶色、緑の装飾あり。	
45	不明		1	縦22.2× 横15cm	紙	本の奥付。書名不明。	
46	文台	ふみだい	1	縦30× 横49.5× 高7cm	木	裏側に「昭和三十九年九月 祝 工場新築記念 小口精機株式会社」との記載あり。小口精機は長野にある会社と思われる。	
47	御札立て	おふだたて	1	縦4.4× 横16× 高43.5cm	木	破損のため5つのパーツにわかれている。	
47-1	御札立て	おふだたて	1	縦7.3× 横13cm	木	御札立ての部品。	
47-2	御札立て	おふだたて	1	縦33.3× 横11.8cm	木	御札立ての部品。	
47-3	御札立て	おふだたて	1	縦16× 横1.8cm	木	御札立ての部品。	
47-4	御札立て	おふだたて	1	縦16× 横1.8cm	木	御札立ての部品。	
48	箱	はこ	1	縦2.5× 横11.5× 高2.6cm	紙		
48-1	箱	はこ	1	縦2.5× 横11.5× 高2.6cm	紙		
49	箱	はこ	1	縦54.7× 横6.7× 高6cm	紙		
49-1	箱	はこ	1	縦54.7× 横6.7× 高6cm	紙	箱のふた	
50	不明		1	縦28× 横1cm	木		
51	不明		2	縦20.5× 横15.5× 高0.1cm	紙	和綴じ本の表紙か。長唄本などとともに保管されていた。	
52	箱のふた	はこのふた	1	縦18.5× 横12.5× 高9.9cm	紙	「御□寸道具」の記載あり。□は採の異字体か。	
53	箱	はこ	1	縦17.5× 横14.5× 高6cm	木	中に白い布が入っている	
53-1	布	ぬの	1	縦64.5× 横39cm	布	箱の中に入っていたもの	

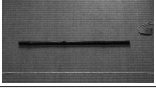
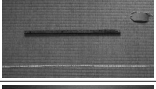
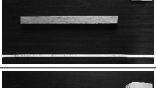
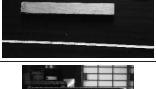
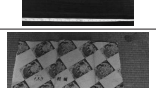
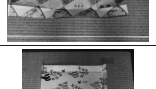
54	矢筈	やはず	1	縦101× 横0.9cm	竹 金属	掛け軸をかける棒	
55	市松人形	いちまつ にんぎょう	1	縦22× 横25.3× 高35.5cm	木	ケースに入っている (ケース破損あり)	
56	不明		1	縦30× 横9.2cm	紙	鏡台の引き出しから。上下で内容が異なる。和綴じ。	
57	ヘアピン	ヘアピン	2	縦5.3× 径0.2cm	金属	鏡台の引き出しから。	
58	ナット	なっと	1	縦0.6× 横0.6× 高0.2cm	金属		
59	鉄球	てっきゅう	1	径0.3cm	金属	鏡台の引き出しから。	
60	敷き紙	しきがみ	1	縦24.3× 横37.9cm	紙	1956年カレンダー。三頁機械。	
61	布	ぬの	1	縦68.8× 横66.8cm	布 綿	浜文様がかいてある。株式会社ケイス	
62	油とり紙	あぶらとり がみ	1	縦8.8× 横6.3cm	紙	口紅をふきとったあと。鏡台の引き出しから。	
63	証書	しょうしょ		縦12.5× 横8.8cm	紙	四百円の領収書。支払い永瀬さん。鰻ますやの印あり。もう一つ印があるが判別不能。	
64	鏡	かがみ	1	縦14.7× 横9.7× 高0.5cm	ガラス		
65	タグ	たぐ	1	縦8.3× 横4.1cm	紙		
66	綿	わた	1	縦3cm	綿	化粧品とともに入っていた。	
67	紙縫	こより	2	縦49.2× 横0.7cm	紙	櫛とともに出てきたので、髪結いの紙縫だと思われる。	
68	紙縫	こより	4	縦49.8× 横0.7cm	紙	櫛とともに出てきたので、髪結いの紙縫だと思われる。	
69	紙縫	こより	1	縦49.8× 横0.7cm	紙	櫛とともに出てきたので、髪結いの紙縫だと思われる。	
70	結櫛	ゆいぐし	1	縦20.6× 横7× 径1.6cm	木		
71	結櫛	ゆいぐし	1	縦19.7× 横6.8× 径0.7cm	木		

72	結櫛	ゆいぐし	1	縦23.3× 横6.5× 径1.2cm	木		
73	結櫛	ゆいぐし	1	縦22.2× 横3.7× 径0.5cm	木		
74	ティッシュ	ていっしゅ	2	縦21.4× 横16.5cm	紙	鏡台の引き出しから。	
75	鏡台	きょうだい	1	縦26.3× 横48× 高100cm	木		
76	表札	ひょうさつ	1	縦21.5× 横8.5× 高2.5cm	陶器	「永瀬善四郎」の表札。「五□□@」作者名の記載あり。	
77	ふすまの裏紙	ふすまのうらがみ	1	縦84.4× 横86.8cm	紙	「イセヤ」「伊勢屋」「三浦」「□」(やまきの記号)の記載あり。多くの文書を裏紙として使っている。昭和七年の裏紙を使用。。	
78	ふすまの裏紙	ふすまのうらがみ	1	縦74.8× 横75cm	紙	「伊勢屋」「永瀬」の記載あり。	
79	ふすまの裏紙	ふすまのうらがみ	1	縦77.6× 横78.5cm	紙	「大正八年 初□」「□本」の記載あり。明治三十九年、四十年の裏紙を使用。	
80	ふすまの裏紙	ふすまのうらがみ	1	縦73× 横71.7cm	紙	「伊勢屋」「小石川柳町」の記載あり。大正十年の裏紙を使用。	
81	ふすまの裏紙	ふすまのうらがみ	1	縦80.4× 横78.1cm	紙	「伊勢屋」「小石川柳町」の記載あり。昭和八年の裏紙を使用。	
82	揚げ札	あがりふだ	3	縦19× 横9.2× 高30.3cm	紙	昭和四十二年のものも混じっている。	
82-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横4.4× 高30.6cm	紙	「昭和三十一年四月十一日」「昭和三十一年九月三十日 受戻 五百円 馬□光夫様」等の記載あり。	
82-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.3× 横3.9× 高2.9cm	紙	「昭和三十一年八月十四日」「六百円 根本藤松様」等の記載あり。	
82-3	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横3.8× 高0.5cm	紙	「昭和42年一月二三日」「貳千円相済 林全太郎様」等の記載あり。	
83	揚げ札	あがりふだ	2	縦24.7× 横11.5× 高6.2cm	紙	「昭和39年6月揚げ札」の記載あり。	
83-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横4× 高4cm	紙	「相済」「受戻」の記載あり。	
83-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.3× 横4× 高3.7cm	紙	「特別」「相済」「受戻」の記載あり。	
84	揚げ札	あがりふだ	3	縦21× 横9.5× 高5cm	紙	「昭和39年10月11月揚げ札」の記載あり。	

84-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横9.5× 高4.5cm	紙		
84-2	ひも		1	横109cm		84の資料を結んでいた。	
84-3	ひも		1	横44.5cm		84の資料を結んでいた。	
85	揚げ札	あがりふだ	2	縦22× 横10× 高6.5cm	紙	「昭和四十年度式参月分揚げ札」の記載あり。	
85-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦17.7× 横3.8× 高3cm	紙		
85-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦17.7× 横3.7× 高4.6cm	紙		
86	揚げ札	あがりふだ	1	縦21× 横14× 高11.5cm	紙		
86-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦20× 横15.5× 高4cm	紙		
86-1-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦8× 横3.5× 高4.5cm	紙	「昭和40年二月一日 特別 相済 受戻 コンパス 五百円 40.4.12受戻 水島康弘様」等の記載あり。	
86-1-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦18× 横4× 高4.5cm	紙	「昭和40年三月十二日 特別 相済 40.4.12受戻 360 千五百円 野田和孝様 424」の記載あり。	
86-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦21× 横14× 高5cm	紙		
86-2-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦19× 横4× 高5cm	紙	「昭和卅九年 40.11.13受戻 特別 相済 受戻 鬼□□□子様 864」の記載あり。	
86-2-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦8.5× 横4× 高5.5cm	紙	「昭和40年二月十四日 40.10.1受戻 特別 相済 受戻 九百円 264 セビロズボン メニ 101 □□とめ様 570」の記載あり。	
87	揚げ札	あがりふだ	2	縦20× 横10× 高3.8cm	紙		
87-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦18× 横4× 高8cm	紙		
88	揚げ札	あがりふだ	3	縦19.5× 横8× 高3.6cm	紙		
88-1	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横4.5× 高1.6cm	紙	「昭和40年二月二十一日 40.9.14受戻 受戻 1600 327 相済 貳万円 高見文子様 指わ」の記載あり。	
88-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦18.5× 横4.5× 高1.6cm	紙	「昭和40年五月二十八日 160 受戻 相済 40.9.23 受戻 954 貳千円 9 25 □岡二郎様 954 □□□円」の記載あり。	

88-3	揚り札	あがりふだ	1	縦18.2× 横3.8× 高2.7cm	紙	「受戻 特別 相済 40.8.20 受戻 昭和四十年七月」の記載あり。	
89	揚り札	あがりふだ	1	縦20× 横10× 高4.5cm	紙	「昭和41年度 午2月分 // 3月分 揚り札」の記載あり。	
90	揚り札	あがりふだ	1	縦18.5× 横10× 高3.6cm	紙	「昭和四十一年度 四月五月 揚り札」 の記載あり。	
91	揚り札	あがりふだ	1	縦19.5× 横9.5× 高4.5cm	紙	「昭和四十一年 八月九月分揚り札」の 記載あり。	
92	揚り札	あがりふだ	1	縦19× 横11× 高3.6cm	紙	「昭和四十一年 十月 十一月分 揚 り札」の記載あり。	
93	揚り札	あがりふだ	1	縦20× 横10.5× 高4cm	紙	「昭和四十一年十二月分 // 四十二年 一月 揚り札 在中」の記載あり。	
94	揚り札	あがりふだ	1	縦19× 横8× 高3.5cm	紙	「昭和四十二年 二・三月 揚り札」の 記載あり。	
95	揚り札	あがりふだ	1	縦19.5× 横7.5× 高3.5cm	紙	「昭和四十二年 四・五月 揚り札」の 記載あり。	
96	揚り札	あがりふだ	1	縦18.5× 横9.5× 高2.5cm	紙	「昭和四十二年 六・七月 揚り札」の 記載あり。	
97	揚り札	あがりふだ	1	縦8.5× 横9× 高3cm	紙	「昭和42年 8 9. 揚り札」の記載 あり。	
98	揚り札	あがりふだ	3	縦23× 横12.5× 高6cm	紙	「昭和四十二年十一、十. 揚り札」の 記載あり。	
98-1	揚り札	あがりふだ	1	縦18× 横4.5× 高1cm	紙	「昭和卅九年 六月廿一日 特別 受 戻 相済 壹千円 岩崎昭宏様 1289」の記載あり。	
98-2	揚り札	あがりふだ	1	縦19.5× 横4× 高3.5cm	紙	「昭和42年四月十日 42.11.15 受 戻 特別 相済 ○戻 受戻 七百円 489 本山和夫様」の記載あり。	
98-3	揚り札	あがりふだ	1	縦19× 横5× 高4cm	紙	「昭和42年七月廿一 42.10.20 受戻 特別 受戻 相済 千五百円 913 10 20 480 亀井末八様」の記載あ り。	
99	揚り札	あがりふだ	1	縦19× 横8× 高3.5cm	紙	「昭42.12 // 43.1 揚り札」の記載あ り。	
100	揚り札	あがりふだ	3	縦25× 横13× 高4cm	紙	包装内側に「43.4 43.5 揚り札」の 記載あり。	
100-1	揚り札	あがりふだ	3	縦18× 横10× 高3.5cm	紙	揚り札2束を紙紐でまとめたもの。	
100-1-1	揚り札	あがりふだ	1	縦18.5× 横4.5× 高3cm	紙	「昭和43年三月廿五日 43.4.4受戻 特別 相済 受戻 六百円 322 4. 4.96 山口高様」の記載あり。	

100-1-2	揚げ札	あがりふだ	1	縦18× 横5× 高3.5cm	紙	「昭和42年十二月二日 43.5.2 受戻 特別 相済 受戻 壹〇円 1457 5 2 400 白鳥□ツヨ様」の記載あり。	
100-1-3	ひも		1	横9cm	紙	揚げ札を再利用か。資料№100-1-1、100-1-2を束ねるのに使用。	
101	ひも		1	横54cm	紙	ひもの先の紙に「昭和四十年揚り札」の記載あり。ひもの色と年代から資料№86の附属と推測。	
102	ひも		2	横32cm		昭和四十年代の揚げ札と同梱。	
103	ひも		1	横33cm	紙	書き損じの揚げ札を再利用か。昭和卅年代のもの。「宮本和子」「窪住吉」との記載あり。	
104	ひも		1	横24cm	紙	新聞を割いて再利用か。揚げ札に同梱。	
105	ガラス	がらす	1	縦30× 横38.5× 高0.3cm	ガラス	見世の入口に使用されていたものか。	
106	座いす	ざいす	2	縦52× 横36× 高43cm	木	株式会社ニトリ製。	
107	すのこ		2	縦33× 横75× 高3.5cm	金		
108	のれん		1	縦39× 横38.25cm	布	「伊勢屋」（勢は異字体）「いせや」等の記載あり。	
109	ハタキ	はたき	1	縦80× 横6cm	紙 竹 ビニール	揚げ札を再利用。	
110	ハタキ	はたき	1	縦78.5× 横6cm	紙 竹	揚げ札を再利用。	
111	揚げ札	あがりふだ	1	縦19× 横5× 高7.5cm	紙	「昭和卅九年一月廿六日 特別 受戻 相済 七百元 12.4 224 早川崑一郎様」の記載あり。	
112	揚げ札	あがりふだ	1	縦18× 横3.8× 高2cm	紙	「昭和43年一月廿一日 特別 受戻 相済 千式百円 肘かけ 三上猛夫様」の記載あり。	
113	ちゃぶ台	ちゃぶだい	1	高28.5× 径89cm	木	「1/9」「緑山」との記載あり。	
114	剣山	けんざん	1	縦5.3× 横7× 高2cm	金属		
115	パネル	ばねる	1	縦102.7× 横73.5× 高3.5cm	木	JR東日本が制作した伊勢屋周辺を案内するパネル。	
116	物差	ものさし	1	縦2.5× 横76× 高0.4cm	竹	寸尺（鯨尺）の物差。	

117	木材	もくざい	1	縦1.5× 横38× 高1.7cm	木	「¥100」との記載あり。テープの跡と 思われる変色あり。	
118	竹棒	たけぼう	1	横63× 径1.6cm	竹	加工済み。	
119	木材	もくざい	1	縦1.1× 横45.3× 高0.7cm	木	釘が2本打たれている。	
120	木材	もくざい	1	縦3.7× 横35× 高0.6cm	木	表面、片面に塗料あり。	
121	木材	もくざい	1	縦2.4× 横31.5× 高2cm	木	側面の断面が粗い。	
122	木材	もくざい	1	縦3.5× 横31× 高2.7cm	木	傷が多い。	
123	ラジオ	らじお	1	縦21.5× 横48× 高14cm	金属 プラス チック	八欧電気株式会社製。1960年代制か。 使用可能。	
124	筆筒	たんす	2	縦124× 横84.6× 高43.2cm	木		
124-1	筆筒(上)	たんす (うえ)	1	縦66× 横84.6× 高43.2cm	木		
124-2	筆筒(下)	たんす (した)	1	縦58× 横84.6× 高43.2cm	木		
125	取手	とって	1	縦3.4× 横7× 径0.8cm	金属	引き出しの取手。	
126	包み紙	つつみがみ	1	縦43.7× 横67cm	紙	大黒屋製。引き出しのなかに敷かれて いた。「風味あられ 大黒屋 目黒公 会堂前 TEL(712)1517」「相撲」の記 載あり。	
127	包み紙	つつみがみ	1	縦31.4× 横46.7cm	紙	サカイヤ製。「(株) 坂井屋 調整年月 日52.12.18 中南店 東京都中野区中 野2-25-3」の記載あり。	

最後に、2021年度の調査に参加した学生メンバーのエピソードを紹介して締め括りしたい。

資料番号116番の「物差」を調査した際のことである。各資料は量方を計測するのだが、資料が物差しということで目盛を読んで計測しようとした。しかし、いざメジャーで計測してみると数字が合わない。「そうか、尺か」と計算してみると、それも数字と目盛が合わない。担当した学生メンバーは困り果てて、図鑑を調べ、それが「鯨尺」であることを突き止めた。現在ではほとんど触れることのない単位であり、私たち学生にとってははじめて触れたかつての日本にあった生活の感覚であった。



写真1：調査の様子



写真2：質物台帳の展示

また、旧伊勢屋質店の台帳をのぞいていた学生メンバーが、1945年4月10日という東京大空襲前日の記録があることを確認した。この台帳は、その日以降1946年まで中断しており、戦時下の混乱と、それでもそこにあった生活の様子がうかがえる記録であった。そのため、解説キャプションを制作し台帳とともに旧伊勢屋質店で展示することとなった。小さなものではあるが、初めてつくる展示であり、それを一般公開の日に来館者に見ていただくことができたのは貴重な経験であった。

引用文献

・新垣夢乃・大櫛優理・菊地春姫・末吉はづき・服部胡桃・松尾映里奈・松延咲季・森本千桜・渡邊菜月、2021、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」『ゆかり』2

菊坂跡見塾文化財防火デー避難訓練報告

水村美穂・松延咲季・山岡沙織・渡邊菜月

1. 本稿の目的

2019年4月のノートルダム大聖堂の火災、同年10月31日の首里城の火災は衝撃的な映像と共に報道され、歴史的な文化財の防災についてあらためてその重要性を再認識させる出来事であった。

私たち跡見「学芸員」in菊坂のメンバーは、普段から菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）で所蔵資料の調査・整理などの活動を行っている。この菊坂跡見塾の建物と棟札は、文京区指定文化財として指定されている文化財となっている。

そのため、私たちは普段の活動場所であり、なおかつ文化財でもある菊坂跡見塾において火災などの災害に遭遇した場合、どのように対応したらよいのかを知りたいという問題意識を出発点として、2021年9月より消防庁作成の「国宝・重要文化財（建造物）等に対応した防火訓練マニュアル」の読み込み、文京区内にある「旧安田楠雄邸庭園」の管理者の方へのインタビュー、本郷消防署の担当者の方へのインタビューや打合せを重ねてきた。それによって、菊坂跡見塾での避難訓練のシナリオを作成し、毎年1月に設定されている「文化財防火デー」にあわせて実際に避難訓練を実施した。

本稿は、その避難訓練の実施にむけた学びの段階、実際の避難訓練の実施について報告するものである。この報告によって、菊坂跡見塾での防災を考えるきっかけとするとともに、学生目線でどのようにしたら文化財の防災を考えることができるのかについて一つの具体的な方法を示すことで、同じ学生にも文化財のための防災意識を芽生えさせることができればと考えている。

2. 基礎資料の発見とネットワークの構築

私たちの活動は2021年9月にスタートした。まず、最初に調査をしてわかったことは、消防庁が文化財となっている建物を対象とした「国宝・重要文化財（建造物）等に対応した防火訓練マニュアル」という資料を発行しているということである。この資料には、文化財の防火訓練を行うために、①火災危険の把握、②訓練想定（出火日時、出火場所等）の検討、③火災発生時の初動対応の確認、④訓練シナリオの作成、⑤消防機関等の関係者との連携、という具体的な手順が示されている（消防庁、2020年：2-9頁）。

メンバーの打ち合わせにおいて、このマニュアルに準じて準備を進めることが確認された。しかし、マニュアルだけで実際に避難訓練が可能なのかということが問題となり、実際に文化財となっている建物ではどのような防災対策がとられているのかを知ることが重要であるということになった。

そこで、菊坂跡見塾と同じ文京区内にある歴史的な建物で、なおかつ一般公開を行っている旧安田楠雄邸庭園の管理者にインタビューを行うべく連絡をとった。この旧安田楠雄邸庭園は、1919年に建築された建物で構成されている。この旧安田楠雄邸庭園を管理されている仰木氏へ2021年10月2日

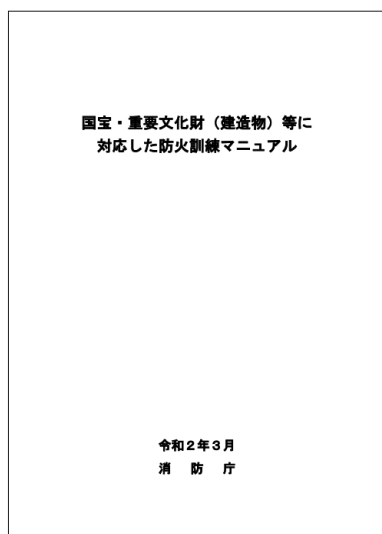


写真1：国宝・重要文化財（建造物）等に対応した防火訓練マニュアル

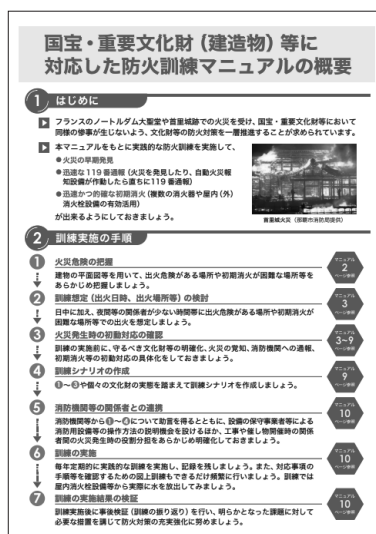


写真2：国宝・重要文化財（建造物）等に対応した防火訓練マニュアルの概要

にインタビューを実施した。

このインタビューでは防災訓練は様々なシチュエーションで行う必要がある事、何かが起きた時に通報や避難誘導の役割分担をしっかりとできるようにしている事、また、名札の裏に建物の図面が書かれた紙を入れ消火器などの位置がすぐにわかるようにしておくとのアドバイスを受けた。また、そこでは、管轄の消防署に赴き挨拶を行いつつ、具体的なアドバイスを受けることが重要であるとの指摘をいただいた。

この仰木氏のアドバイスを受け、菊坂跡見塾がある地区を管轄する本郷消防署へ連絡を取り、予防課防火管理係自衛消防担当係長の楠田健太郎氏、予防課防火管理係自衛消防担当の鶴見裕佳氏に文化財の避難訓練についてお話をうかがうことができた。そこでは、①火災危険の把握、②訓練想定（出火日時、出火場所等）の検討、③火災発生時の初動対応の確認、④訓練シナリオの作成、⑤消防機関等の関係者との連携という流れで正しいということを確認し、一度、自分たちで訓練シナリオを作成したら消防署で内容確認を行うことができるとのアドバイスをいただいた。さらには、シナリオの内容に応じて訓練機材の借用も可能であるとのアドバイスを受けた。



写真3：旧安田楠雄邸庭園にて文化財の防災についてインタビューを行う様子



写真4：本郷消防署にて文化財の防災についてインタビューを行う様子

その他にも火災発見後の行動の役割分担が被らないように指示役が必要である事、シナリオ作成ではオリジナルのアイデアを出す事などのアドバイスをいただくことができた。

3. 避難訓練実施に向けた準備

3.1. 火災危険の把握

まず、菊坂跡見塾内でどのような火災の危険があるかについて実地調査を行った。菊坂跡見塾は火気厳禁ということもあり、ガスなどは設置されていない。そこで、古くなったコンセントから火災が発生するというシナリオを想定した。

3.2. 訓練想定（出火日時、出火場所等）の検討

学生メンバーが活動する日中に1階の見世にあるコンセントから出火したという訓練を立案した。

3.3. 火災発生時の初動対応の確認

初期消火→消火器の場所を首から提げている名札裏の図面で確認

→初期消火終了後も火が消えなければ近くの扉などから屋外に避難

通報→発見者から火災の情報を聞いておく

→屋外に出てから速やかに119番通報

避難→避難経路になり得る通路の確認

→一つでも多くの資料を火災から守るため、各自が手元にある資料を持ち出す

3.4. 訓練シナリオの作成

上記の1～3に加えて、学生達が1階の奥にある座敷で作業中に出火、見世に行った1人が火災を発見すると想定した。

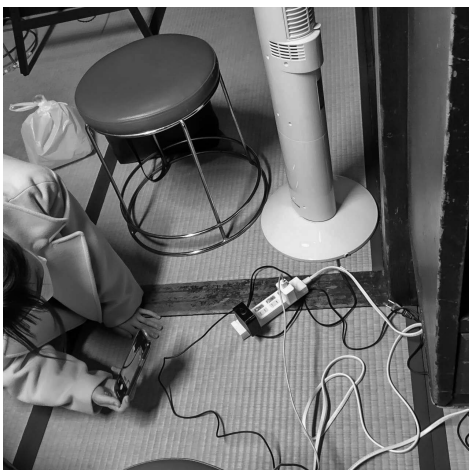


写真5：菊坂跡見塾内実地調査の様子



写真6：菊坂跡見塾における本郷消防署員への事前説明の様子

これらの作業によって、下記のような訓練シナリオを作成し、2022年1月12日に菊坂跡見塾にて本郷消防署の楠田氏、鶴見氏へ事前説明を行った。

学生4人の活動中を想定したシナリオ

学生① 見世にて火災を発見、他の学生に知らせる→学生が全員いるか確認→それぞれの学生に役割の指示出し→初期消火手伝い（台所の消火器を利用）
学生② 初期消火（蔵の消火器を利用）
学生①②は初期消火終了後速やかに避難
学生③ 避難指示、経路の確認（風呂場横の裏口or玄関or座敷八畳の廊下のガラス戸）
学生④ 安全な屋外に避難→119番に通報し住所、出荷箇所、規模、怪我人の有無等伝える
※可能であれば手元にある資料を持って避難する。
※事前に消火器の設置場所と菊坂跡見塾の住所を記した名札を作成し参加者に配布した。

4. 避難訓練の実施

旧安田楠雄邸庭園の仰木氏や本郷消防署の楠田氏、鶴見氏のご協力もあり、何も知らない状態から防災シナリオの作成、訓練の実施までたどり着くことができた。

2021年1月24日に、本郷消防署から空の消火器を借用し、シナリオをもとに避難訓練を実施した。新型コロナウイルスの影響により、リモート中継で楠田氏らに講評をいただくことができた。訓練に参加した学生からは、「素早く的確な情報伝達、情報共有が重要であることがわかった」や「通報時、住所が書かれた名札が役に立った」、「いざという時のために消火器の使い方をしっかり復習するべきだと思った」等の声が上がった。

また、玄関以外から避難する際に利用するスリッパの数が足りない事、掃除用具などが収納されている倉庫の消火器が取り出しにくい場所に置かれておりいざという時に時間がかかってしまうという課題も発見することができた。

今後、以上の課題を改善したうえで、けが人などのアクシデントを組み込んだり、一般公開時を想定したりと、より難易度を上げたシナリオを作成し、訓練を行っていきたい。

参考文献・資料

・消防庁、2020年、「国宝・重要文化財（建造物）等に対応した防火訓練マニュアル」（<https://www.fdma.go.jp/mission/prevention/post-5.html>最終閲覧2022年1月24日）

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾） 〈紹介日順〉

〈テレビ・配信〉

- (1) 番組名：「あらぶんちょ散歩～春日駅」

放送日：令和4年1月10日（月）～1月16日（日）

地デジ11ch⇒11：00～11：30 14：00～14：30 17：00～17：30

地デジ10ch⇒15：00～15：30 19：00～19：30

地デジ102ch⇒23：00～23：30

放送局名：東京ケーブルネットワーク提供

放送終了後YouTube公式チャンネル「あらぶんちょチャンネル」で公開。

https://youtu.be/_cpMczB7e84

〈新聞・雑誌〉

- (1) 「東京どんぶらこ～本郷菊坂」（『東京新聞』令和3年4月24日）

- (2) 「マダニヤイ とことこ散歩旅 658 本郷通り22 『伊勢屋質店 赤貧 樋口一葉が通った店』」
（『朝日新聞』令和3年7月12日夕刊）

- (3) 「のぼりくだりの街（6）～炭団（たどん）坂 文人の面影を探して」
（『東京新聞』令和3年11月6日）

- (4) 「（シリーズ明治の偉人）夏目漱石の残したもの。～江戸っ子漱石のミチクサ散歩道」（『週刊現代』
令和3年11月27日号）

〈ガイドブック〉

- (1) 『あらぶんちょ通信／CABLE GUIDE』「あらぶんちょ散歩 vol.167」（22.1月号）

最優秀賞を受賞して

三村侑綺

この度は、第10回目を迎えた【文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』】において、青少年の部・最優秀賞に選んでいただきましたこと、大変光栄に思います。

私自身、『朗読』に触れたのは約半年ほど前、大学での『朗読法』の授業がきっかけでした。講師の八柄順子先生には、朗読をする上で表現豊かに読むためのポイント（強弱・緩急）などの基礎的なことをはじめ、実際に読んだ時に出てしまう癖など、丁寧に指導していただきました。また、今回のコンテスト参加にあたって、背中を押していただいたのも先生です。本当にありがとうございました。

事前審査と本選出場の際には、コミュニケーション文化学科の小板橋靖夫先生にご指導いただきました。私が方言の強い地域の出身ということもあり、言葉のアクセントがひとつの大きな課題でもありました。その点をはじめ、間の開け方や読む速度など、様々なパターンを提示していただきました。教えていただいたことの中でも特に衝撃だったのは、「書かれている文章の句読点と、朗読をするときの句読点は同じではない」ということです。書かれているものは読み返すことができますが、朗読ではそうはいきません。より相手にしっかり伝わるよう間を入れる必要があります。また、私は通常の読むスピードが速いため、ゆっくりと読む部分をつくってメリハリをつける、などの工夫が必要だとアドバイスをいただきました。そこで「朗読」の自由さ、それゆえの難しさを痛感しました。自分の頭に浮かべている情景が、そのまま聴き手の方々に伝わるとは限りません。その中でもより想像させ「伝わる朗読」をするにはどう表現したらいいか、試行錯誤を重ねました。

そのために必要なことは「情景を思い浮かべること」と教えていただいたのですが、普段から本を読む際に、その世界観を頭の中で想像することが好きなので、その日常的な積み重ねが、ほんの少しでも朗読に繋げることができたのではないかと感じています。

今回のコンテストには、自らの「やってみたい」という素直な気持ちに従い、参加しました。自分から進んで挑戦してみたいとここまで強く思ったのは初めてだったので、緊張と同時に心がワクワクしていました。事前審査通過の報告をいただいたとき、自分の発表もそうですが、他の方々の朗読を聴けることをとても楽しみに感じました。本選当日の11月14日、周りはもう何年も朗読をやってらっしゃるような方々ばかりで、事前リハーサルでの声の出し方・立ち姿からその経験の差をひしひしと感じました。本選では思わぬハプニングも起こりましたが、司会の八柄先生をはじめ、会場の皆様の温かい心遣いに大いに助けて頂きました。この場をお借りして、感謝申し上げます。本選後には、同じ出場者の方々が声をかけてくださいました。それらが本当に嬉しく、いただいた言葉ひとつひとつが、私の一生の宝物です。何かに挑戦することによって得られるものの大きさを、身をもって体感しました。この挑戦は私にとってとても大きな一歩になりました。これからも朗読を通して、表現の幅を広げていきたいと考えています。作品に触れ、それを表現することの難しさと楽しさを重ね、より自分らしい朗読ができるようになることが大きな目標です。

この賞をいただくことは、私一人の力では成し遂げられませんでした。ご指導くださいました八柄先生、小板橋先生、応援してくれた家族、そして支えてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「ひと涼みアワード2021」 オンライン啓発部門 最優秀賞 受賞コメント

生活環境マネジメント学科 石渡 尚子

昨年に引き続き、熱中症予防に貢献する活動の表彰制度「ひと涼みアワード2021」（主催：熱中症予防声かけプロジェクト、後援：環境省）で石渡ゼミ3-4年生が取り組んだ熱中症啓発プロジェクトが「オンライン啓発部門 最優秀賞」に選ばれた。2019年度は「外国人おもてなし部門」、2020年度は「オンライン啓発部門」で最優秀賞をいただいたので、石渡ゼミの熱中症啓発活動は3年連続の受賞となった。

今年度の表彰には、全国から465件（行政：168件、企業236件、民間団体61件）の応募があり、最優秀賞受賞者は8部門で24団体、その中で大学生の受賞は1件であった。以下の熱中症声かけプロジェクトホームページには受賞団体と取り組み内容が紹介されている（<https://www.hitosuzumi.jp/award2021/>）。

新型コロナウイルスの感染状況は改善せず、今年度も対面でのイベント実施は不可能となった。学生は前年度の経験を活かし、日本への来日を楽しみにしている外国人に向けた熱中症啓発活動をYouTubeなどのSNSを通じて実施した。昨年度よりも早い時期から熱中症に関する英語と日本語の動画を作成し、6月から配信を始めて9月末までに合計48本の動画をYouTubeチャンネル「Netchusho project」にアップロードした。

これら動画の総再生回数は12月時点で約1,400回となり、当初目標としていた1,000回を大きく上回った。今年度はコロナ禍における熱中症予防のポイントに加え、都内の観光スポット情報に熱中症予防対策を加えた動画も作成した。特に英語版の観光スポット動画の再生回数が多いことから、夏場の日本を楽しみながらも気を付けるべき熱中症について、海外の方にPRすることができたと考えられる。

石渡ゼミの熱中症啓発プロジェクトは東京オリンピック・パラリンピックに向け2018年からスタートし2021年まで4年間継続してきた。今後も、いつか日本を訪れたいと思っている外国の方々に、楽しく安全に日本の夏を満喫していただくための情報を発信していきたい。

最後に、お忙しい中、毎回動画ナレーションのネイティブチェックを行ってくださった本学文学部人文学科のクリストファー・ブルスミスに、ゼミ生一同、心より御礼申し上げます。



最優秀賞受賞



ひと涼みアワード・3年連続トロフィー



2021石渡ゼミ Youtube チャンネル

令和3年度の地域交流関連活動記録

貴堂 直

跡見学園女子大学における「地域交流事業」の運営体制

1. 跡見学園女子大学地域交流センターについて

跡見学園女子大学地域交流センターは、本学に所属する教員や学生が地域交流活動を組織的・積極的に行えるように地域交流活動の支援を行い、そのために必要な環境整備を行うことを目的に、附属教育研究組織として平成31年度より設立されました。([地域交流センター規程])

具体的な活動は、下記の通りです。

- ① 地域交流活動の企画立案・実施
- ② 本学の地域交流活動についての情報収集及び成果の公表
- ③ 本学の地域交流活動に対する人的支援・財政的補助。
(本学の「正課」「正課以外」、本学教員の地域における調査・研究、本学人材の地域への提供等)
- ④ 地域交流活動への本学施設の開放
- ⑤ 自治体との包括連携協定の推進と協定締結自治体との連携事業の実施・支援

2. 地域交流センター運営委員会について

地域交流センター運営委員会は、地域交流センターの上記の具体的活動に関する事項を審議することを目的に、委員長たるセンター長と各学部より選出された委員および、若干名の専門委員により組織されています。([地域交流センター運営委員会規程])

3. 地域交流センター運営委員会開催一覧

令和3年度運営委員会	第1回 (令和3年4月14日〈水〉)	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第2回 (令和3年5月26日〈水〉)	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第3回 (令和3年6月23日〈水〉)	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第4回 (令和3年7月28日〈水〉)	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第5回 (令和3年9月15日〈水〉)	15時00分～16時00分〈Teams使用〉
	第6回 (令和3年10月27日〈水〉)	15時00分～16時00分〈Teams使用〉
	第7回 (令和3年12月1日〈水〉)	15時00分～16時00分〈Teams使用〉
	第8回 (令和4年1月26日〈水〉)	15時00分～16時00分〈Teams使用〉
	第9回 (令和4年3月8日〈水〉)	15時00分～16時00分〈Teams使用〉

平成3年度 連携地域・企業（締結順）

跡見学園女子大学 自治体等 協定締結先一覧（令和4年2月現在）

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
埼玉県新座市	新座市と跡見学園女子大学との連携協力に関する包括協定	H20.4.10	H22.4.10	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・教育・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全・回復・創出に関する事項 ・防災に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
東京都文京区	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と文京区との相互協力に関する包括協定	H23.5.17	H26.3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
埼玉県新座市・埼玉県新座警察署	新座市における女子学生安全対策協定	H23.7.29	H25.7.28	自動更新	・女子学生に対する防犯指導 ・安全情報の提供及び情報交換 ・学生防犯リーダーによる啓発活動への支援
福島県会津若松市	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と会津若松市とのパートナーシップ協定	H24.7.25	H27.7.24	自動更新	・学術研究の成果、地域施策の充実及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
東京都文京区	災害時における母子救護所の提供に関する協定	H24.9.7			
埼玉県和光市	和光市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H24.11.22	H27.11.21	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全、創造に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
埼玉県新座市	災害時における施設の使用に関する覚書	H25.1.10 締結 H26.2.13 改訂			・災害時におけるグラウンド及び体育館での避難所の開設 ・新座市役所と本学のホットラインの設置 ・物品資材の配置

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会		2014.6.23	2020.12.31		・人的分野及び教育的分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる研究分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動での連携 ・オリンピックムーブメントの推進及びオリンピックレガシーの継承に関する連携
全国「道の駅」連絡会	「道の駅」就労体験型実習の実施に関する基本協定	H27.3.10			・「道の駅」就労体験型実習の実施
長野県	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と長野県との相互協力に関する協定	H27.6.22	H29.3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・学生の就職支援 ・インターンシップの実施
警視庁大塚警察署	災害及び防犯ボランティア等に関する協定	H27.9.1	H28.8.31	自動更新	・防災及び防犯等各種広報活動に対する共同活動 ・発災時に文京区が設置する避難所等における災害警備活動
秋田県男鹿市	秋田県男鹿市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27.12.21	H30.12.21	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・人材育成に関する事項
山形県西川町	山形県西川町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27.12.22	H30.12.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項
群馬県長野原町	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と長野原町との相互協力に関する包括協定	H28.4.19	H31.4.19	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認めたこと
埼玉県三郷市	三郷市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H29.3.6	H30.3.6	自動更新	・社会福祉に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツに関する事項 ・地域環境に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認める事項
富山県立山町	富山県立山町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H29.5.22	R2.5.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
長野原町	長野原町と跡見学園女子大学観光コミュニティ学部との観光振興プロジェクトに関する覚書	H29.6.1	H29.11.19		・長野原町ハツ場地区における調査研究活動への協力 ・学生による調査研究結果の提供、及び研究成果の地域での活用
和光市文化振興公社	公益財団法人和光市文化振興公社と跡見学園女子大学との相互協力協定書	H29.6.23	2021.3.31	自動更新	・文化更新に関する事業 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・地域文化資源に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他、甲と乙が相互に必要と認める事項
千葉県いすみ市	いすみ市と跡見学園女子大学における域学連携に関する協定書	2019/6/1	2019/3/31		いすみ市における地域創生をテーマに共同で研究、実践活動を行うことを目的とする。
静岡県東伊豆町	静岡県東伊豆町と跡見学園女子大学との包括連携協力協定書	2019/11/19	2022/11/18	自動更新	・活力ある地域づくり ・観光振興 ・情報発信 ・人材育成 ・研究教育
株式会社ジャルパック	跡見学園女子大学と株式会社ジャルパックとの連携に関する協定書	2020/2/4	2021/2/3	自動更新	・教育、研究、文化の発展・向上に関わる相互支援 ・学生・教職員と社員の相互交流 ・人材育成・キャリア形成 ・学生・教職員の研究成果・活動を業務に活かす ・地域社会の発展・活性化
公益財団法人角川文化振興財団	跡見学園女子大学と公益財団法人角川文化振興財団との連携に関する協定書	2020/8/1			・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関すること ・学生及び教職員と社員の相互交流に関すること ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関すること ・学生及び教職員の研究成果・活動と角川文化振興財団の文化活動の成果を互いに活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関すること ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
エーザイ株式会社	コミュニティスペース運営協力に関する協定書	2020/9/24			・千石三丁目居場所作りプロジェクト実行委員会の準備・運営するコミュニティスペース（所在：文京区千石三丁目三番七号）への協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前1項及び2項の目的達成のための相互交流、研究成果・知識の交換 ・その他地域社会の発展・活性化に関する取組み

令和3年度 文京区受託事業

事業名 令和3年度 文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』

主催 文京区 主管・運営：跡見学園女子大学

日時 令和3(2021)年11月14日(日) 本選13時～16時25分

場所 跡見学園女子大学 ブロッサムホール(文京区大塚)

新型コロナウイルス感染が拡大する中で行われたコンテストで、会場では感染拡大防止策を徹底する中で実施された。

応募総数：253人(一般170名、青少年83名)

※審査対象外64名(一般31名、青少年33名)

※本選出場者数：青少年の部 6人 一般の部 10人

録音審査応募期間：8月30日(月)から9月3日(金)

録音審査：9月16日(木)、17日(金)

NHK放送研修センター日本語センター

本選観覧者：事前申し込み：110人

当日観覧来場者：107人

※一般観覧者は、約100名を目途に抑制して実施。席と席の間を間隔をあけて着席していただいた。



受賞者(青少年の部)



受賞者(一般の部)

審査結果

受賞結果	氏名	朗読作品
最優秀賞(青少年の部)	三村 侑綺	トロッコ
優秀賞(青少年の部)	内田 美鈴	十三夜
優秀賞(青少年の部)	大家 梨里衣	東京の三十年
最優秀賞(一般の部)	野坂 昌子	十三夜
優秀賞(一般の部)	吉岡 玲子	野菊の墓
優秀賞(一般の部)	東海林 明	日和下駄

審査員

氏名	肩書
広瀬 修子 氏	元跡見学園女子大学教授、元NHKアナウンサー
伊藤 文樹 氏	NHK放送研修センター日本語センター 専門委員
上野 義博 氏	文京区教育委員会教育推進部教育指導課 指導主事

事業名 旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開事業

主催 文京区

受託 跡見学園女子大学

令和3年度旧伊勢屋質店一般公開は、緊急事態宣言が発令されたため、令和3年4月25日～5月31日まで閉館となった。6月からは感染拡大防止策を講じた上で開館した。

【施設利用時の注意事項】

グループでの来館はお控えください。また、施設前でお待ちいただくことはできませんので、あらかじめご了承ください。

以下に該当する場合は入館をお断りします。

- ・発熱がある場合
- ・体調がすぐれない場合（例：咳、咽頭痛、味覚障害等の症状）
- ・同居家族や身近な知人に感染が疑われる人がいる場合
- ・入国制限・観察期間等がある海外から2週間以内に帰国した場合

マスクを持参し着用してください。着用のない場合、入館をお断りすることがあります。

手指を消毒してください。

周囲の人と、できるだけ2m以上の距離を空けてください。

会話は最小限にして、大きな声を出さないでください。

展示物や壁に触らないでください。

同じ場所で長時間滞留しないでください。

入館日を記録した用紙を渡すので、少なくとも2週間は保管してください。

来館後2週間以内に新型コロナウイルス感染症を発症した場合は、速やかに連絡してください。

（連絡先：アカデミー推進課 観光担当 電話番号：03-5803-1174）

靴袋は各自で取り、見学中は持参し、使用後はお持ち帰りください。

感染防止のために施設が定めたその他の措置の遵守、スタッフの指示に従ってください。

感染症拡大防止のため、皆様のご協力をお願いいたします。

また、注意事項は今後変更する場合があります。変更があり次第、ホームページ等でお知らせします。

【施設での御案内について】

当面の間、スタッフによる口頭での説明は行いません。

館内に掲示のパネル等を御覧ください。

【施設の衛生対策】

職員のマスク着用及び手指消毒（手洗い含む）の徹底

職員の体調管理の徹底

施設の換気及び定期的な消毒

館内に感染予防に関する注意喚起や滞留防止を促す目印の掲示

令和3年度菊坂跡見塾一般公開日

令和4年3月31日

4

月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

月合計4日

5

					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

4/25～5/31新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時閉館

月合計0日

6

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

月合計8日

7

			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

月合計9日

8

						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

月合計2日

9

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

9/18台風のため臨時閉館

月合計6日

開館日

10

月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

月合計9日

11

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

月合計5日

12

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

月合計5日

1

					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

月合計2日

2

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28						

月合計2日

3

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

月合計2日

年合計54日

●令和3年度 旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開について

年間開館日数 54日（新型コロナウイルス感染拡大防止のため、8日間臨時閉館）

年間来館者数 文京区民 412人 文京区民以外 579人 跡見学園関係者 2人 合計 993人

令和3年度 地域交流活動（実施日順）

活 動 名	かるた部：新春かるた大会
活 動 主 体	跡見学園女子大学 かるた部
実 施 期 間	令和3年3月22日
実 施 場 所	菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）

菊坂の旧伊勢屋質店にて、かるた部が恒例の新春かるた大会を実施。在学生に加え、昨年卒業した部員も活動再開のお祝いかたがた、競技に参加。

活 動 名	「文京ハッピーベジタブルフェスタ2021」への参加及び地域での食育活動
活 動 主 体	石渡ゼミ
連 携 先	文京区保健課、「クイーンズ伊勢丹目白店」
実 施 期 間	令和3年4月15日（木）～令和4年1月31日（月）
実 施 場 所	WEBおよびクリーンズ伊勢丹目白店

WEB開催される文京区保健課主催の「文京ハッピーベジタブルフェスタ2021」に野菜の食育ポスター展示で参加。また、地域食育活動として、食品スーパー「クイーンズ伊勢丹目白店（株式会社エムアイフードスタイル）」で、食育ポスター展示等を実施。

活 動 名	菊坂七夕祭り
活 動 主 体	跡見「学芸員」in菊坂メンバー（主催）
連 携 先	MIRATZ本郷第二保育園
実 施 期 間	令和3年7月7日（水）

文京区内には、マンションの一室を使用したような形態の小規模な保育園・託児所が多く存在する。これらの未就学児向けに菊坂跡見塾を活用した地域貢献の試みとして、菊坂七夕祭りを企画した。

活 動 名	第2回「文の京（ふみのみやこ）跡見学園女子大学書道展」
活 動 主 体	文学部横田恭三教授（全国大学書道学会理事長）
実 施 期 間	令和3年7月9日（金）～7月25日（日）
実 施 場 所	文京区シビックセンター 地下1階吹き抜け周囲 アートウォール・シビック

本学学生の作品を中心に、首都圏の高校生（招待作品）、海外の指導者や学生（招待作品）、および本学書道科講師（賛助出品）の作品を展示。また、これらの作品に加えて、「コロナ禍の終息を願う書」も展示。

活 動 名	新座市北二福進協「遊びの広場」参加
活 動 主 体	新座市社会福祉協議会 北部第二地区地域福祉推進協議会
実 施 期 間	令和3年6月27日 14～16時
実 施 場 所	東裏公園（新座市大和田）

コミュニティデザイン学科1年生、新垣地域交流センター助教の2名で活動。

①地域の子どもたちが幅広い大人たちに接する機会を通じて提供する、②障がいを持った子どもやその保護者たちが、安心して遊べる場を提供する、③保護者同士のネットワークを構築することで、地域のなかで子育てを行うことをめざす、という目的を持った活動である。

活 動 名	「氷川下つゆくさ荘」との協働プロジェクト
活 動 主 体	地域交流センター
連 携 先	「氷川下つゆくさ荘実行委員会」（町会、区社協、株式会社エーザイ、地域住民）
実 施 期 間	令和3年6月28日（月）～令和4年3月31日（木）
実 施 場 所	ズームによるオンライン会議、千石三丁目「氷川下つゆくさ荘」

現地の施設の装飾や改修を行う設備班、子ども向けのイベントの企画や実施・実施支援を行う子ども班、高齢者向けイベントの企画や実施・実施支援を行う高齢者班の三班構成。

活 動 名	跡見ひきこもり支援事業
活 動 主 体	坂東ゼミ
連 携 先	特定非営利活動法人サンカクシャ、公益社団法人青少年健康センター（茗荷谷クラブ）、文京区社会福祉協議会
実 施 期 間	令和3年7月1日（木）～令和4年3月31日（木）
実 施 場 所	特定非営利活動法人サンカクシャ、公益社団法人青少年健康センター（茗荷谷クラブ）、文京区社会福祉協議会、茗荷谷キャンパス等

2019年3月より開催された「文京区ひきこもり等支援者連絡会」で検討を重ねた。「コミュニティ心理学」をテーマとした3、4年生の坂東ゼミ生を中心に希望者参加。

活 動 名	環境省国立公園・温泉地等での滞在型ツアー・ワーケーション推進事業に掛かる調査
活 動 主 体	篠崎ゼミ（3年）
実 施 期 間	令和3年9月6日（月）～令和3年9月9日（木）
実 施 場 所	北海道大雪山国立公園及び周辺市町（南富良野町・新得町・鹿追町・上士幌町）

北海道の南富良野まちづくり観光協会が主体となって、環境省による国立公園・温泉地等での滞在型ツアー・ワーケーション推進事業の一環として、北海道大雪山国立公園をフィールドに、地域一体となった自然体験型のツアー等の企画・実施・準備、感染症対策、e-bike利用等による脱炭素化等の推進に向けた事業を実施することとなっている。

本学学生は自然体験型のツアーを実際に体験することにより、その企画内容や感染対策、脱炭素化の取り組みの問題点や課題を検討するための基礎資料を提供するものである。また、学生の視点による国立公園等の魅力を訴求する国内外向けプロモーションの素材を作成する。

活 動 名	妊産婦・乳児救護所開設訓練
活 動 主 体	文京区防災課
協 働 主 体	跡見学園女子大学（妊産婦・乳児救護担当職員と地域交流課職員及び文京区勤務者関係職員）
実 施 期 間	令和3年9月16日（木）15:30～17:00
実 施 場 所	跡見学園女子大学 文京キャンパス

妊産婦・乳児救護所の、実際の開設手順の確認及び活動の確認

活 動 名 B-ぐる車内映像制作プロジェクト

活 動 主 体 地域交流センター

連 携 先 文京区、「B-ぐるバス沿線協議会」

実 施 期 間 令和3年10月1日(金)～

今年度1チーム目の作品が10月1日(金)より、B-ぐるバス車内で公開された。今回は、9月30日(木)に3路線目となる「本郷・湯島ルート」が開業されたことに伴い、本郷エリア、湯島エリアの情報なども多く盛り込んだ内容になっている。

活 動 名 鳩ヶ谷商工会主催の地域イベントへの参加

活 動 主 体 篠崎ゼミ

実 施 期 間 令和3年10月30日(土)～令和3年10月31日(日)

実 施 場 所 埼玉県川口市鳩ヶ谷

地域イベントのロゴを模したデザインに着色してもらった用紙を地域の小中学生(約1200名)がキャンドルのランプシェードとして、会場内に展示。地域の学童保育事業者とコラボし、子ども縁日企画として、ゲームコーナーを実施。また地域の歴史文化を学ぶクイズラリーの実施。

活 動 名 未来の健康を作る職員プロジェクト 2021

活 動 主 体 石渡ゼミ 3,4年生

実 施 期 間 令和3年11月5日(木)～2022年3月31日(水)

2013年から6年間にわたり、地域高齢者の孤食解消・外出頻度の向上を目的とした、「高齢者のための共食プロジェクト」に取り組んできた。この成果が評価され、平成30年度に農林水産省が主催する第2回食育活動表彰で消費安全局長賞を受賞した。

この経験を活かし、今年度からは、地域の高齢者ばかりでなく子どもの食育改善も目指した新たな食育プロジェクトをスタートした。1年目となる今年度は、中学生を対象に食育活動を行った。

活 動 名 生活環境マネジメント学科 石渡ゼミ3, 4年生が「ひと涼みアワード」で3年連続最優秀賞を受賞

活 動 主 体 石渡ゼミ 3, 4年生

実 施 期 間 令和3年11月25日 (木)

全国約1,600の行政・企業・民間団体が一体で行っている熱中症予防声かけプロジェクトの活動に2019年から参加。このプロジェクト主催（環境省後援）の「ひと涼みアワード2021」において、オンラインを活用した積極的な啓発活動が評価され、「オンライン啓発部門 最優秀賞」を受賞した。石渡ゼミのひと涼みアワード最優秀賞受賞は3年連続。

活 動 名 「いきいきシニアの集い」への書道作品出展

活 動 主 体 跡見学園女子大学 書道部

実 施 期 間 令和3年11月27日 (土) ～11月28日 (日)

実 施 場 所 文京シビックセンター

文京区主宰の「いきいきシニアの集い」へ学生の書道作品を出展した。

活 動 名 東伊豆町大学等連携地域活性化事業

活 動 主 体 塩月ゼミ

実 施 期 間 令和3年12月18日 (土) ～2021年12月19日 (日)

実 施 場 所 静岡県東伊豆町

伊豆町とサッポロビール株式会社との特産品を用いた商品開発に関するコラボレーション企画への参加・協力のため東伊豆町を訪問し、東伊豆町の特産品に関する現地調査を実施。

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 『ゆかり』に関する規程

第一条 この規程は、跡見学園女子大学学則第一条の二第3項に基づき、地域交流センター年次報告書『ゆかり』（以下、『ゆかり』という。）の発行と編集に関する必要な事項を定める。

第二条 『ゆかり』は、原則として毎年一回発行する。ただし、必要な場合には、臨時号や合併号を発行することができる。

第三条 『ゆかり』に成果を発表することができるのは、原則として本学専任教員とする。ただし、以下の者は、地域交流センター長（以下、「センター長」という。）が認める場合には、成果を発表することができる。

- 一 本学兼任講師
- 二 本学事務職員（学芸員・司書等）
- 三 本学に在籍する学生
- 四 本学の地域交流活動に関与する者
- 五 地域交流センター運営委員会（以下、「センター運営委員会」という。）での議を経て、センター長が許可する者

第四条 『ゆかり』の編集及び発行については、地域交流センター（以下、センターという。）がこれを行う。

第五条 投稿を希望する者は、センターが指定する期日までに「投稿申込書」に必要な事項を記入の上、届け出るものとする。また、原稿は、センターの指定した期日までに提出することとする。

第六条 原稿を依頼する者へは、センターより「原稿依頼」を送付する。

第七条 投稿原稿は、センター運営委員会において審査を行い、採否を決定する。ただし、必要に応じて、投稿原稿の内容に関わる専門家に意見を徴することがある。

第八条 採用原稿が多数にのぼり、全編の掲載が困難な場合には、センター運営委員会が協議し対処する。

第九条 掲載原稿の著作権は執筆者に属し、センターは編集著作権を持つものとする。掲載原稿の複製権及び公衆送信権を含む著作権は、大学が参加するインターネット上の論文公開システムの中で無償公開されることを前提としたうえで、原則として執筆者に帰属する。それぞれの執筆者が学術的寄与のために複製または転用等を行う場合は、これを妨げないものとし、また、センターに許諾を求めることを要しないものとする。ただし、転用等を行う場合は、その内容が『ゆかり』に掲載済である旨を明記しなければならない。

第十条 この規程を実施するに当たり、必要な細則を定めることができる。

第十一条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附 則 本規程は、令和3年4月1日より施行する。

ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3

発行日：2022 年3 月31 日

発行者：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-0012 東京都文京区大塚1 丁目5-2

電 話：03-3941-7420

印 刷：セントラル印刷（株）

ISSN：2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 3

ゆかり

コロナ禍と地域交流	笠原清志
ウィズコロナにおける地域交流活動の展開 —2021 年度の跡見学園女子大学の対応から考える—	土居洋平
氷川下つゆくさ荘、跡見の学生に期待すること	清水 誠
大塚仲町町会と跡見学園女子大学の連携に期待すること、 跡見生に期待すること。	紅林光正
跡見学園女子大学における TJUP の取組みについて —TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）の 1 年間の活動を振り返って（活動報告）—	中村英昭
跡見学園女子大学の地域交流活動への 新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析	新垣夢乃
特 集 コロナ禍の活動 —経験の共有とコロナ後に残るもの—	跡見学園女子大学地域交流センター
第 2 回「文の京書道展」開催報告	横田恭三
「ポストコロナの自転車にやさしい道路のつくり方」開催の報告	坪原紳二
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（2）	磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優理・ 菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・ 服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・ 水村美穂・森本千桜・山岡沙織・ 若曾根南美・渡辺恵未・渡邊菜月
菊坂跡見塾文化財防火デー避難訓練報告	水村美穂・松延咲季・ 山岡沙織・渡邊菜月
メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）	貴堂 直
最優秀賞を受賞して	三村侑綺
「ひと涼みアワード 2021」オンライン啓発部門 最優秀賞 受賞コメント	石渡尚子
令和 3 年度の地域交流関連活動記録	貴堂 直
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程	